

古典自然物の研究

——自然物, 醫藥・その即物的考察——

森 村 謙 一

古典自然物の研究一日次

1~100・番號の後は當該文獻に出ている名稱, 續けて別名, 或いは部分的名稱. ()
内は極近縁種。

頁	頁
[始めに]	
I. 自然物・個々の検討一……………276	19. 菓 ……………256
《五行大義》より:	20. 李, 郁李, 梅 …………… 256~255
【原文】 i. ……………276	櫻 ……………255
1. 榆, 榆錢, 榆莢 ……………276	21. 栗 ……………254
2. 桑, 榘, 桑白皮, 黑實桑 ……………274	22. 杏 ……………254
3. 棗, 酸棗, 榘, 大棗 ……………273	23. 桃, 桃臬 …………… 254~253
【原文】 ii. ……………272	24. 菜; 菘, 蕪青, 芥 ……………253
4. 薺 ……………272	25. 葵 ……………253
5. 麥 ……………272	26. 韭 ……………253
6. 款冬 ……………271	27. 藿 ……………252
7. 靡草, 小麥 ……………270	28. 薤 ……………252
【原文】 iii. ……………269	29. 葱 ……………252
8. 醢 ……………268	30. 畜 ……………251
9. 酒 ……………268	31. 牛 ……………251
10. 蜜, 蜂蜜 ……………268	32. 狗 ……………251
11. 薑, 白豆蔻, 小豆蔻, 鬱金 … 267~265	33. 鼈 ……………251
12. 鹽 ……………265	34. 羊 ……………250
13. 穀 ……………264	35. 鷄 ……………250
14. 米, 大米, 小米, 黃米 ……………262	36. 石 ……………250
15. 麻, 麻蕒, 麻子 ……………262	37. 玉 ……………250
16. 大豆, 大豆, 綠豆, 赤小豆 … 261~259	38. 金 ……………250
17. 黍, 稷, 秬, 蜀黍, 慮粟 ……………258	39. 雄黃 ……………249
高粱, 禾, 梁, 粟 …………… 258~257	40. 曾青 ……………249
18. 稻米 ……………257	41. 赤石脂 ……………248
	42. 草 ……………248

古典自然物の研究一 目 次・續

頁	頁
43. 茯苓 ……………248	73. 白朮, 朮 ……………234
44. 桂心, 桂, 牡桂, 肉桂 ……………247	74. 黃耆 ……………234
45. 天門冬 ……………247	75. 當歸 ……………233
46. 五味子 ……………246	76. 獨活 ……………233
47. 玄參 ……………246	77. 芎藭 ……………233
48. 蟲 ……………245	78. 白芷 ……………232
49. 蜚零 ……………245	79. 芍藥, 牡丹 ……………232
50. 蛭網 ……………245	80. 辛夷 ……………232
51. 蚺蛇, 蚺蛇膽 …………… 245~244	81. 防風 ……………231
52. 伊威, 鼠婦 ……………244	82. 地黃 ……………231
53. 蜥蜴, 守宮, 壁宮, 壁虎 ……………244	83. 大黃 ……………230
【原文】iv. ……………244	84. 藁本 ……………230
54. 胡麻 ……………243	85. 蛇銜, 蛇含 ……………229
55. 柑橘, 橘, 柚, 橙, 柑, 陳皮… 243~241	86. 馬蘭 ……………229
56. 胡桃 ……………241	87. 蠱實, 荔實, 馬蘭子 ……………228
《黃帝內經太素》より:	88. 酢漿 ……………228
57. 蘭 ……………241	89. 甘草, 國老 ……………227
58. 蘭草, 水香, 香水蘭, ……………240	90. 麻黃 ……………227
澤蘭, 蘭澤香 ……………240	91. 黃芩 ……………226
59. 草蘭, 建蘭花 ……………240	92. 山茱萸 ……………226
60. 半夏 ……………239	93. 遠志 ……………226
61. 烏賊骨, 海螵蛸, 墨 ……………239	94. 黃連 ……………225
62. 雀卵 ……………239	95. 苦參 ……………225
63. 鮑魚汁 ……………238	96. 藕 ……………224
64. 鐵落, 生鐵 ……………238	97. 藍 ……………223
《醫心方》, 及びその他の参照資料より:	98. 貝母 ……………223
65. 細辛 ……………237	99. 白薇, 白蘘 ……………222
66. 蜀椒 ……………237	100. 茵陳蒿 ……………222
67. 續斷 ……………236	II. 總括: ……………221
68. 烏頭 ……………236	まとめ; 原產地別・表1. ……………220
69. 皂莢 ……………236	效用別・表2. /1~ /5 …………… 218~214
70. 石南 ……………235	考察…………… 214~212
71. 厚朴 ……………235	文献…………… 211~210
72. 茵草 ……………235	

〔始めに〕

凡そ自然は複雑多様で、自然物は實に種類が多く多彩である。古今東西を問わず人は自

然と自然物を理解するために努力して来たが、先ず対象の全てを特定の範疇毎に分けて纏める處理・即ち「分類」が、その一つであった。「五行」は「範疇」の数を「5」として、古代中國に於いて創始された分類方式で、近隣諸地域にも廣まり、後々まで人の思考や文化に影響を與え續けた。こうした分類は、先ず全対象について確立すると、やがて対象の中の特定、限定範圍内についても同様に適用され、分類は多層構造となってゆく。當5範疇方式の場合、先ず大宇宙の森羅萬象を「木、火、土、金、水」に分ち、その先は、例えば有機的自然であれば、全てを包括する「木」の中で「人」との関わりに象徴性を持たせて「五木」や「五草」の概念が設定され、更に「人」への具體的な寄與を重視して「五穀」が定められ…と發展したように見える。今回検討した自然物の一部は、五行を論ずる文中に登場しているので、それらの該當物については當論内で、五行に関連して配當されている意味を試考した。しかしながら當論全體は、「五行」との関連の有無に係らず凡そ醫藥その他・實用目的に使われて来た、幾多の自然物についての総合的検討であり、一貫して対象が必ず備えている「具體的性質・特徴」を検討の中心點とした。

更に、同じく古代から、中國を含めて世界各地で〔**本草學**〕と總稱される・具象物科學が成立發展し、極めて廣範圍の自然物を醫、食、住始め、人の生活と文化のあらゆる局面に役立て、寄與する爲の偉大な體系となって来た。近代以降は自然科學全體の高度な發達により、そうした寄與の解明と發展が化學、藥理、醫療の各面に互り高度に進んで來ている。今回主に東アジアの地に題材を採り、この廣大な地域での古代の人々と自然物の関わりを、基本的には本草學の體系に據りながら、全て實際の個々の物に即し、多面的に検討した。

自然物には、草一莖、石塊一片に至るまで、それぞれに必ず多面的な性質・特徴が備わっている。検討に当たっては、先ず素材面の同定から始めて、科學的、藥學的、或いは醫學的に、觀點を重ね、古典的實績から最新データに至る研究成果に依る裏付けを盛り込むよう、努力した。

京都大學人文科學研究所において、開所時から設置されている〈科學技術史共同研究室〉の現主坦者・武田時昌教授が數年來、中國隋代・蕭吉撰による《五行大義》をテキストとする研究班を結成され、日本平安時代・丹波康賴編『醫心方』に引く諸原典を追及する研究班も並び結成されて、それぞれ関連各分野の研究者方を廣く糾合し、基本概念「五行」を含め、東アジア全般に互る古代の自然思想・文化についての研究活動を主催して來られた。兩班の活動が相まち、地域及び領域の兩面に互り廣範圍で活發な研究の場が繼續しており、幸いに筆者もこれら兩班に常時參加することが出來て現在に至っている。更に、同研究所の金文京教授が主催して來られた、中國宋代・陳元靚著《事林廣記》をテキストとする〈中國中世類書共同研究〉にも、上記・科學技術史研究班員が関連分野研究者

として参加する機会があり、筆者も繼續出席させて頂いた。これら数々の學問的環境で得られた、大いなる啓發と恩恵に深く感謝し、小考を試みた次第である。《事林廣記》に記載が有る自然物の検討は、別途に纏めを作成する。)以下、《五行大義》(元弘相傳本)、《黃帝內經太素》(仁和寺影印本)、《醫心方》(安政刊本)、及びそれらのテキストに關連する古典類に収録する自然物を個々に検討してゆく。《五行大義》以外も、いずれも同研究所で以前、山田慶兒教授(現名譽教授)及び田中 淡教授がそれぞれ(科學技術史共同研究室)を主擔し、研究班を主催しておられた際のテキストや參照資料であり、品目はそれらの會讀に参加し検討したものである。

品目の各々を參照する文獻は、古代からの「本草書」を中心とした實學の古典に重きを置いた。今回の當小論は、該當品目の即物的検討、即ち、それぞれの「物」としての實體の解明を旨とするから、その意味で、長大な年月の間に巨大な博物學體系を構成して來た本草書は、絶好の據りどころとなる。中國の本草學は極めて古く始まり、表現に神仙思想的要素が混在はするものの、何らかの確かな藥效を有する自然物(生藥)を解説した書物、即ち藥物書として西曆紀元頃には數々出現していて、それらの幾つかは書名を《□□本草》と稱しており、またそれらを「本草」と總稱していた。やがて五世紀末・南朝梁代初期に、華中に生まれ育ちその地で活動した陶弘景が、《神農本草經集註》七卷を著した。

この書は、先行していた二大本草書・《神農本草經》と《名醫別錄》を合併し校定増補する形を執り、廣大な中國域の中央に位置する土地の利を生かして、北方の中原文化要素に偏重せず、西部及び南部、更に、より一層遠隔の外國のものに至るまで、生藥品目とそれに関連する知見、醫處方をよく採り入れている。従って諸古典の中の自然物を照合検討するに當り、《神農本草經集註》は最適の存在である。今から千五百年前の古典でもあり、寫本斷片も世界的に稀有であるが、幸いにも、中國の總合的大規模本草書の歴史は、當《神農本草經集註》もそうであるように、實際には一時代前の該當書の中味を丸ごと收容し、新しい編者の見解・知見を添え、その後の專書や關連書に著わされた知見、醫處方を付加する方式の繰り返しである。⁽¹⁾《神農本草經集註》は七世紀半ば唐代《新修本草》に、更にその後の宋代へ、凡そ總合的大規模本草書の核心として全てそのまま受け繼がれた。十世紀後半から十三世紀へかけて宋代には王朝が強く關與し、總合的本草書の増補大改訂が再三敢行された。その成果は木版印刷術の普及も幸いして、幾種類かの刊本として今に傳わり、考究に大いに役立っている。當小論はそれら増補改訂を繰り返した經過の後半の刊本・所謂《證類本草》に収録された《神農本草經集註》を照合した。《證類本草》には1065年に出た蘇頌他撰《圖經本草》の内容が品目毎に分條され、本體(増補大改訂の底本となった、それまでの總合的本草書)の當該品目記載に添附されている。《圖經本草》は政府が全國に手配し、各地の有用自然物の實物や實寫圖、及びその品目に關する詳細な記

述を提出させて、醫葯行政を主管する高官であった蘇頌が主となり、専門的につぶさに検討し是正し、改めて編集したもので、圖と記載文は品目毎に實に精緻である。今回の小論では《證類本草》として下の二本を使った：

- ① 西曆十二世紀初 唐慎微撰、艾晟增訂《經史證類大觀本草》(明代重修、清・柯逢時影印本)
- ② 西曆1249年 張存惠(晦明軒)刊行《重修政和經史證類備用本草》(《晦明軒政和本草》)

兩本は《圖經本草》を併合した後、更に1119年の寇宗奭撰《本草衍義》を、①は卷末に全て附刻し、②は品目毎に分條し本體の當該品目に添附記載してあるなど、共に《證類本草》の優良版として高く評價され、今回のような精査の對象として最適のものである。古文獻の追求に留まらず、現代の化學、藥學に據る研究方法を教えて頂いた、廣島大學藥學部生藥學研究室・大塚英昭教授に深く感謝する。

- (1) 拙論「中國の本草學と本草學者」文獻2-5等參照。

I. 自然物・個々の検討

検討方法：品目毎に番號を定め、

- ① [學名・屬名、種小名連記] を挙げ、その語意を具體的且つ簡潔に記する。[歐米名] も併記。
 - ② [原產地] に註目し、その地域での當該品目の歴史的、人文地理的な關わりを探る。
 - ③ 當該品目の全體或いは特定部分に含まれている活性物質を採り挙げ、その效用を詳細に觀る・即ち、科學的、藥學的、或いは醫學的な實際作用を《神農本草經集註》古記載に照合して理解する。
- ◎ 全検討結果の總合、及び自然物の歴史的有用認識の多面的考察を〔總括〕として纏める。

—《五行大義》より—

【原文】 i. 卷第二、第六の二. 論支干雜「五行書云、…立春木王。甲召乙還、乙懷金氣來。故仲春殺榆莢白也。…立夏火王。丙召丁還、丁懷水氣來。故仲夏桑椹熟黑也。…立秋金王。庚召辛還、辛懷火氣來。故仲秋棗熟朱也。…立冬水王。壬召癸還、癸懷土氣來。故仲冬草木皆黃也。」

1. 「榆」は落葉高木で屬名 *Ulmus* (英名 Elm)。當屬は北半球で廣く分布するが地域によ
- [27]

り種類が分かれている。ヨーロッパやアメリカ中～高緯度の地では、古來、自生樹木の代表のような存在であったらしく、屬名 *Ulms* の語源は“Trees”を意味する古代ケルト語。中國では中～高緯度地域に、ヨーロッパのものに比べやや小振りの、*U. pumila* L. (現中國名・家榆、白榆。pumila=小さい) という種類が廣く自生し、また古くから植栽されて來た。當種は春、新葉が出る前に枝の間に小さな花が群がり付く。上記原文で「榆莢」としているのはこの花序(穂)のことで、此處での「莢」字は現代用語の「さや」・即ち「まめ科植物で種子(豆)が収まっている細長い袋」の意味ではない。榆では個々の花は小さく、花序は始めくすんでいるが、開花すると黄白色の葯(雄蕊)が一齊に外に伸び出て目立つ。原文はその鮮やかな色彩出現を「金」の氣の發現としている。⁽²⁾花後の微小な果實には平たく丸い翼が付いていて、遠くへ分散しやすい。夥しい數のこの微果が風に舞い地に敷く晩春の風情は、古來の詩文にもよく登場している。尙、秦の「錢(小額貨幣)」が重かったので、漢の高祖は民に自由鑄造を許し、その結果、錢はこの微果に似せて小型輕量化され、「榆錢」の名稱が生じるに至ったとい⁽³⁾う。

榆は中國の中～高緯度地で昔から、其處彼處に自生或いは植栽され、ごくありふれた樹木で、葉、樹皮、莢果(榆錢)を乾かし粉にして食料に加え、或いは麵にして食することもあった。《本草書》の記載では藥效の期待が明瞭で、中國古代の《神農本草經集註》に於いて「上品」生藥として「榆」を挙げ、殊にその樹皮〔榆白皮〕の作用を重視して、その主な效能を「大小便不通の場合、通じさせて癒す」としている。現代的に觀ても、榆には白皮部分は勿論のこと、どの部分も粘液物質やタンニン(植物性ポリフェノール)を豊富に含んでおり、浸出液を服用すれば、それらの成分は體內全體の緩和作用、整腸や利尿の作用を強力に發揮すると推定出来る。

また《本草書》の中で西暦6世紀南北朝時代・梁代の名醫・陶弘景は、「生じたばかりの莢仁(未熟果實)で糜羹(やわらかいあつもの)を作れば、(食した者は)よく眠れる」と述べている。上記タンニンが體內停滯老廢物や不消化物質に結合し排出除去するので、新陳代謝が促進され腦も休まるのである。歐米でも全く同様に、*Ulms* 屬樹木の樹皮を緩和整腸劑として使つて來た。

- (2) *U. pumila* 種は日本に自生せず、植栽も定着しなかつた。日本寒地に多い「ハルニレ」は *U. pumila* とは別の「榆」で、中國北部～朝鮮にかけても自生するが、葯は綠色を帯びて目立たない。「榆錢」の形も *pumila* 種とはやや異なる。日本中部以西に多い「アキニレ(漢名・樞)」は朝鮮や中國中部～東部にも分布するが、秋に「莢」が生じる。【原文】の「仲春…」と合わない。
- (3) 《漢書》[食貨志 下]に「秦の錢重くして用い難きが爲に、更に榆莢の錢を鑄し、…」とある。

2. 「桑」(Mulberry tree) は植物分類學上、クワ科クワ屬 (Genus *Morus*) の總稱で、ユーラシア全域に多種類が分布し、しかもその各々が古昔から人に利用された。枝葉、幹根、果實等々、植物體のどの部分も使って來たが、果實「椹」を乾燥させたものは、中國からアジア西方、ヨーロッパ南部にかけて廣い範圍で食料となって來た。「果實」と言っても、大きい單一果ではなく、粒狀液果の集合體であるが、風乾すると保存が利く。中國には本來 *M. alba* という種類 (漢名・桑, 和名マグワ。種小名は albi=白色) があり、上古から養蠶に使い、甲骨文字でも表されていた重要樹木であるが、この種類は果實が黒く熟するとは限らず、熟しても白いままの系統があり、それが西方へオアシス沿いに傳播した。11世紀にはヨーロッパ南部に入って廣まり續けたので、後に近代分類學が確立し、個々の植物種の學名を二名法で定めた際、この白果の系統が桑の代表種のようにみなされ、種小名が “alba” となった。*M. alba* 種の根皮は、「桑白皮」の名で古代中國の本草書《神農本草經集註》に出ており、消炎、利尿、鎮咳、去痰、その他、多様な效能で使われて來たが、近代以降は、抗アレルギー、抗炎症、抗腫瘍等の能力を有する芳香族有機化合物・フラボノイド類を多種類、豊富に含有することが解明され、上記效能の物質的裏付けとみなし得る。現行〔日本薬局方〕でも漢方生薬として認定されている。⁽⁴⁾ 醫療效力を持つ上記成分は、根皮内の白い層に多く含まれているので、この名稱中の「白」字には、根皮最外部の粗皮は剥ぎ去り、その内側の白い部分を使用せよとの、教示の意味が含まれている。⁽⁵⁾

中國には當種以外にも原産種が數々あり、早く入った外來系統もあるが、それらを比較してみると、《五行大義》原文の上記記載には、イラン、小アジア原産の *M. nigra* L. (漢名・黒實桑) を充てれば、五行の色彩配當との對比が鮮明となる。この種類は「椹」が始めは赤く、成熟すると眞黒色となるのである。この種類は強勢で、土地を選ばず大樹となり果實の收量も多い。挿し枝、採り枝などの無性生殖法でもよく殖えるので、原産地やその周辺地域では、古昔から街路その他至る處に植えられ、日陰を提供し、果實や根皮の有用性 (上記) 以外にも、葉を飲料 (薬茶) にする等々、實に多目的に利用されて來た。古代ギリシャの先哲や詩人にも知られ謳われ、西暦紀元前に既に地中海沿岸へ到達していたから、東方へも恐らく早い時代に傳播し、隋、唐の時代までには中國でも廣く栽培されていたであろう。

中國では、桑は養蠶を始めとして萬能的有用性が大きい⁽⁷⁾ 故か、古代から「聖樹」とされていた。《山海經》や《淮南子》等には「扶桑」として記載があり、殷・湯王「桑林祈願」も有名である。

(4) 漢方の常として單品では使わず、他の生薬と組み合わせた複合處方 (「五虎湯」他) とする。

(5) 十一世紀宋代・蘇頌の《證類本草》に「金瘡 (刀傷) で腸が露出したのは、桑白皮を綫 (絲) にして縫い、熱い鶏血を塗る。(誰某は…この法を用いて癒えた。)」とある。この品目には強い殺菌力があり、傷の化膿防止に役立つことが早期に認知されていたのである。

- (6) 近年、「桑の葉特有の成分物質が哺乳動物の血糖値上昇を抑える」との研究報告もある。
- (7) 桑の有用性は實に多様で、果實の食用、酒造用、薬用以外にも、樹皮の煎汁は黄色染料となり、樹皮からは光澤ある強靱な繊維が採れて衣服、織物、網索、和紙等となり、根幹の材は堅く狂いが少ないので家具、楽器、彫刻、建築物、農具等々に造られる等々、極めて廣範圍に利用されて来た。

3. 「棗」 *Ziziphus jujube* ナツメ (Jujube tree) 前出品目「桑」と比較すると、ユーラシアの廣い範圍で重要な食品となって来た點は桑と同じであるが、桑とは異なり、棗は人の拇指頭大の單一果で、水以外の成分(糖分などの有機物、及び無機物類)含有量も多く、外皮は丈夫で成熟しても破れず、乾かして保存するのに適している。棗樹は、晩春から初夏にかけての花季が長く、その時期に降雨が續くと結實率が低下するが、一年を通じて乾燥には強く、少雨アルカリ性土壌の地でもよく育ち、栽培可能域が廣い。また棗の果實は同一樹でも粒毎に成熟がずれるので收穫期間が長く、人家の傍らで植栽して隨時採取することが出来る。また、棗樹は根が地表下を伸びて芽を出し、實生も可なので増殖も容易であり、總合的に、上記氣候風土の地では棗は實用食料として價値が絶大である。

棗は多くの品種系統に分かれる。學名を var. *spinosa* と付けられたものは中國北部に多い野生種で、古代の本草書《神農本草經集註》に「酸棗」として出ている。中國最古の辭書《爾雅》には「𣎵」の名で載っている⁽⁹⁾。果實は本草書の名の通り酸味極めて強く、小形で核(種子)は大きく、果肉部分が少ない(和名サネブトナツメ、サネは種子)。當種は果實の脇に刺が出ている(*spinosa* = 刺の多い)が、この刺も生薬「白棘」として果實とは別に《神農本草經集註》に出ている⁽¹⁰⁾。

棗の果實は有史以前から重用され、早くから淘汰が進んで、刺が少なく果肉が厚く核が小さいものが選ばれて、古代の内に既に刺の無い系統 var. *inermis* (*inermis* = 刺針の無い)も栽培されていた。

棗の果實は近代以降も世界的に薬用に使われ、現〔日本薬局方〕にも生薬「大棗」として採用されている。緩和、鎮痛、鎮靜、強壯、補血の目的で、漢方「葛根湯」, 「小柴胡湯」, 「半夏瀉心湯」, 「平胃散」等の處方に加えられている。果實には酸性多糖類の各種や有機酸類が豊富に含まれ、更に生物體內エネルギー代謝(エネルギー活用)で主役となるATPの基礎物質AMP(アデノシン1磷酸)が多量に含まれているので、こうした多種多様な物質群が總合的に、上記効用に寄與するのであろう。

棗は、夏の黄色花がやがて結實し、秋には熟して朱黑色となる。《五行大義》原文の當該記載では、この色移りに五行配當を充てている。(→後述「考察」)

- (8) 棗は日本には自生していなかった。有用性は奈良時代から知られ、栽培の努力は爲されたが、日本では開花期・降雨による結實率低下に直面し、より大形で味味な他種果實との競合も

あり、棗は常用生果にならなかった。薬用、料理用には昔も今も頻用するが、殆ど全て輸入に頼っている。

- (9) 《神農本草經集註》には更に「山棗」の別名も出ていて、編著者・六世紀梁代陶弘景の説明、及び後の時代の本草家達の言及を総合すると、當稿本文に述べたように、中國では古代に既に、棗の改良された諸系統の栽培が普通に行われており、それらと區別して、野生種を「山棗」と呼んでいたことが明らかである。棗は本來、少雨乾燥型大陸性氣候には適合している。
- (10) 《神農本草經集註》に「白棗」の〔主治〕として「心腹の痛み、癰腫。膿を潰し痛みを止め、結を決刺する」とある。この文章の第2句以降は、當該の刺を現代外科の「メス」のように使う意味にも取れる。《本草綱目》「白棗」の〔附方〕欄には、この刺を多數集めて煮たり煎じたり、焼いたりして服用する等、内科的に使用する、古代からの處方が數々集めてある。

【原文】 ii. 卷第二，第八。論合「…木八畏庚九，故以妹乙妻庚，庚氣在秋，和以木氣，是以薺麥當秋而生，…火七畏壬六，故以妹丁妻壬，壬得火熱氣，故藪冬當冬而華。金九畏丙七，故以妹辛妻丙，丙得金氣，故首夏靡草薺麥死，…」

4. 「薺」, 5. 「麥」 原文は“薺麥”2字續いているが、「薺麥」で単一名ではなく「薺」と「麥」・二種類である。「薺」和名ナズナ *Capsella Bursa-pastoris*⁽¹¹⁾ は、日本で「春の七草」の一つとして知られ、早春に伸びる若葉を摘み、セリその他の野菜と共に粥に入れる。巧まずして新鮮な食物纖維やビタミンの攝取に努めた先人の智慧であった。この十字架科草本は北半球温帯に廣く分布していて、中國でも昔から春先に摘む野菜であり、その意味で此處に名指されていると思われる。

ヨーロッパでもその微小果實の特徴ある形から Shepherd's Purse (羊飼いの財布) と俗稱され、古くから親しまれた民間薬であった。原産地はよく分からないが、十字架科植物全體の成り立ちや、冷涼氣候を好むことからして、ユーラシア内陸の幾分北寄りか或いは高原地であろう。

「麥」は、代表的中國土着穀類・オオムギ *Hordeum vulgare* var. *hexasticon*⁽¹²⁾ である。元々、オオムギ (Barley) は原産地が中國 (四川省西部邊) と言われ、中國では三千數百年前から栽培していた。河南省安陽小屯・殷墟で出土した「卜辭」の「來」や「麥」の字はオオムギという。西方遠方へもごく古く傳播したらしく、ヨーロッパ・新石器時代の湖上住居跡やエジプトの古墳からこの穀粒が出たとの考古學的な報告があり⁽¹³⁾、紀元前ギリシャの貨幣には大麥の穂の繪が刻まれている。

極近縁種「小麥」を比較して略解すると、オオムギに比べてコムギは原産地が遙か西・カスピ海南方邊で、中國へ傳わったのは精々二千年前とされ、古代中國の人たちには、コムギ (Wheat) は外來感がまだ残る新參の穀類であった。コムギはまた、オオムギとは異なり、粒は皮が厚く堅くそのままでは食し難く、精白し難い。粉食 (粉に挽いて食し易く加

工)の習慣が一般化するまでは、コムギは知られていてもやや馴染みが薄く、古代は「麥」と言えば、普通はオオムギを意味していたと観てよい。【原文】では此處は上述のように、「菜」と「穀」・代表的な種類を一つずつ挙げているが、植物を論じているのではなく、ナズナやオオムギでは穂が初秋に出ることを五行配當に對比させている⁽¹⁴⁾。

- (11) 葉が出揃ってまもなく、細い軸が垂直に伸び、短い柄を持つ小花が多数、互いにやや離れて付いて穂を形成し、下方から上方へ順に咲いて稔ってゆく。花後の小果實の形が獨特で、學名の各々は、いずれもそれを表している・Capsella=小箱、Bursa-pastoris=羊飼いの財布。
- (12) Hordeum=オオムギの古名 hexastichon=六列・栽培のオオムギは「六條種」で、穂には果粒が6列に並んでいる。別に、2列の系統もあるが、それは歴史上、オオムギが本格的に栽培され始めた初期のものである。尤も、食用ではなくビールやウィスキーの醸造用には、二條種の方が六條種よりもタンパク質が少なく発酵に好都合として、今も世界的に「二條種」が使われている。
- (13) こうした西方での出土が数々あるので、オオムギは原産地そのものが、中國西部ではなく、もっとヨーロッパに近い處・いわゆる近東地域との説も有る。上記(註14)・「二條種」「六條種」相互の系統關係の考究も絡んで、今尙議論が残る。
- (14)〔淮南子 天文訓〕陰生於午、故五月爲小刑、薺麥亭歷枯。〔鹽鐵論 論鄒〕金生于巳、刑罰小加、故薺麥夏死。「亭歷」・《神農本草經集註》では種子(亭歷子)を用い、その〔主治(主な效用)〕を「癥瘕、積聚、結氣、飲食寒熱。破堅、逐邪、通利水道。」とする。原植物について清・吳基濬撰《植物名實圖考》「亭歷」圖のものは、專家は十字科の野草「イヌカラシ」と同定。しかし現今の市場でみられる「亭歷子」については、同じ科の雑多な別種の種子が混入しているという。

6. 「款冬」キク科多年生草本 *Tussilago farfara* L. である。中國～インド～中近東～北アフリカ～ヨーロッパと、分布は廣範圍であるが日本には自生しない。先ず名稱について；傳承されて來たこの名稱を、明代・李時珍が《本草綱目》當該生藥〔款冬花〕の〔釋名〕で「款」の意味は“至る”で、冬の至れる時期に花が咲く草」と説明し、寇宗奭(下記)の「多くの植物の中でこの草だけが氷雪をものともせず、春の到來に先んじて活動を始める。それ故に世に“鑽凍”という」との説明も引いている。兩名稱・「款冬」「鑽凍」、及び、更に《本草綱目》で紹介されている「欵凍」,「穎凍」,「氏冬」、といった古い別名の数々には、いずれも、この植物が寒氣厳しい内から生長を開始する元氣のよさ、生命力の強さに直感的に着目し、效用を期待した古代人の願いが託されているのである⁽¹⁵⁾。次いで藥效については《本草綱目》に所收の、七世紀初《神農本草經集註》に包含される《神農本草經》文、《名醫別錄》文、それらへの陶弘景の註釋文、七世紀半ば・唐代《新修本草》蘇恭の文、十一世紀・《圖經本草》蘇頌の文、十二世紀初・宋代《本草衍義》寇宗奭の文を順次観てゆくと、この品目が或る範圍の病變に對して、確かな效力を持つ重要生藥と認識されて來たことがよく判る。《神農本草經集註》〔款冬花〕の〔主治〕に「效逆(咳が噎せ戻り)上氣して善く喘(あえ)ぐもの、喉痺(喉の痺れ)、諸々の驚癘(強い引付

け)、寒熱邪氣《本草經》、消渴(糖尿病症状)で呼吸がぜいぜいするもの《別録》とあるように、主に呼吸器系の強い病變に對應出来るとして、各本草家いずれも、この生薬を中心に如何に有效處方を形成するか・その點を具體的に詳述している。⁽¹⁶⁾今日では分析により、「款冬花」に rutin, hyperin といったフラボノイド類、及びサポニン(糖の結合體)が含まれていることが判っている。フラボノイド類は、前出「桑白皮」で略解したように、人體内で抗アレルギー、抗炎症、抗腫瘍等の生理作用を發揮し、またサポニンは、界面活性効果により鎮咳去痰、難溶性化合物の可溶化、吸収を促すので、それらの活性化化合物の總合作用として上記諸薬效が示されるのであろう。

この植物は元々ヨーロッパにも分布しており、彼の地でも早くから民間薬として利用されていた。その後、18世紀に定められた學名に効用がそのまま示されている(tussis 咳, aggero 塞き止める。種小名 farfara は、屬名種名併記の「二名法」が定まる前の當植物の通稱—アラビア風の語感から傳播經緯が推察出来る)。植物體の效用部分は花と葉であるが、中國では未開の蕾が付いた新生の花莖を珍重したようである。ヨーロッパでは喘息患者がこの葉をタバコに混ぜて吸ったという。一方、この植物を食用とする記載は、本草關係では別名「鑽凍」の説明(宗奭・前述)の續きに、「春季、世人はこれを採って蔬菜に代えて食う。」とあるだけで、他の本草家は言及していない。〔菜部〕にも別に記載がなく、中國では本格的な野菜と思われていなかったらしい。人の関わりの重點が食用よりも薬用に在った譯で、近縁別種の日本の「フキ」の場合とはその點が異なる。⁽¹⁷⁾

- (15) 《神農本草經集註》に更に三別名あり；「菟奚」(語意 兔の腹←全體に白毛密生)、「橐吾」(近縁別種ツワブキの漢名を混同)、「虎鬚」(別種藥草・沙參 ツリガネニンジンの異名を混同)。
- (16) 《本草經》や《名醫別錄》より後の本草家も款冬を重視した。《本草綱目》で觀ると、最古の二書の記載以外にも、唐・甄權「肺氣心促の急熱、勞欬が絶えず續き出て涕唾の粘るもの、肺萎、肺癰で膿血を吐くものを療ず」、宋・大明「心、肺を潤し、五臟を益し、煩を除き、痰を消し、肝を洗い、目を明にする。また中風等の疾」と〔主治〕が續き、それぞれに工夫した處方を付している。
- (17) フキ (*Petasites japonicus*) は款冬に似るが別屬で、日本では春の美味な食草として誰しも馴染み深い。地下莖を干したものは「咳止め」效用の民間薬となる。屬名は“Petasos = 鐙廣帽子”を意味する(葉の形狀を言う)。日本では本州北部から北方島嶼にかけて、變種で大形のアクタブキ (var. *gigantica*) が産し、これもよく知られた蔬菜である。中國の款冬(和名フキタンポポ)は、加工品が漢方生薬として輸入されることはあっても、日本ではあまり栽培しなかった。

7. 「靡草」これは直接には特定の植物を示す語ではないが、この語自體と前後の語句や文章、また文章全體の中の位置付けといった面から手掛りを得て、植物の特定種類が推定

出来る。最初に「靡」字を自然現象と捉えて、「風によく靡く植物の密生集團のこと」と見當が付く。次いで、「種類は何か？」であるが、地球上で、極端に寒冷ではなく年間降水量がかなり多い處では、密集していても生長出来る植物となると、先ずイネ科植物である。イネ科の中にも種類は多々あるが、植物體個々の形はどの種類もよく似ていて、莖は殆ど枝分かれせず横に張らず、葉は極度に綫形化し、上へ上へと伸びる。立込んでいても下方まで日光が當るように、密集生育に高度に適應した生活形になっている。人の祖先はこの特性を見抜き、面積當り出来るだけ多くの收穫が得られる作物としてイネ科のものを選ぶことが多かった。これ即ち「穀類」である。そうしたイネ科植物密集栽培の典型例は勿論我々の身近にもあり、「夏の稻田」もその典型例であって、遠目には緑の厚い絨毯を敷き詰めた感じで擴がっており、それが波打つように風に靡くさまこそ、まさに此處に言う「靡草」の情景であろう。

原文の場合の「靡草」の植物種を、もう少し詰めて考えてみよう。

自然の草原は、密集していても草の種類や大きさがまちまちで、その情景にはなり難い。やはり一つの種類を密植して育てているイネ科作物集團が考え易く、たちまち思い浮かぶのはコムギ畑である。「麥 オオムギ」の條で觸れたように、コムギは當時、西方から傳來して廣まった斬新な穀物であった。オオムギの諸品種は概して葉や莖が剛直で風に靡く感じではないのに対し、コムギは葉や莖が柔軟で、その畑は、夏の稻田同様に風に靡き波打ちやすい。中國ではコムギは秋播きで栽培され⁽¹⁸⁾、冬を越し、翌年の晩春～初夏に穂が熟して枯れるから、原文「首夏一死す」に合致する。一連の文章で春に先立つ「菜」には款冬と薺、初夏の「穀」には麥と靡草・それぞれ代表的な種類を設定し、整合性も高い。

(18) 小麥 コムギ *Triticum aestivum* (左記學名の由來・tritus 磨り潰す一粒が硬く、先ず磨り潰さないと食べ難いので。Aestus 夏一初夏に收穫出来るから。) 近世以降、主に歐米でそれぞれの地の氣候風土に合うよう、盛んに品種改良を施したので、今ではオオムギにも増して品種・系統が多い。概して發芽時は冷涼氣候を好むものの、土壤が凍り付くと生長出来ないの、中緯度の地では秋に播き、高緯度の地では冬季の嚴寒が緩んだ後、春に播く。

⁽¹⁹⁾ 【原文】 iii. 卷第三, 第十四 論雜配, 就此分爲六段 第三, 論配氣味「鄭玄云, 五味, 醴酸, 酒苦, 蜜甘, 薑辛, 鹽鹹。黃帝甲乙經言, 穀則米甘, 麻酸, 大豆鹹, 麥苦, 黍辛。一云, 稻米辛, 菓則棗甘, 李酸, 栗鹹, 杏苦, 桃辛。菜則葵甘, 韭酸, 藿鹹, 薤苦, 葱辛。畜則牛甘, 犬酸, 彘鹹, 羊苦, 鷄辛。本草云, 石則玉甘, 金辛, 雄黃苦, 曾青酸, 赤石脂鹹。草則茯苓甘, 桂心辛, 天門冬苦, 五味子酸, 玄參鹹。蟲則蜚零甘, 蛭細辛, 蝮蛇苦, 伊威酸, 蜥蜴鹹。藥食之物例多, 且舉大略。配五味如此。皆是五行氣所生, 氣有偏, 故其味則別。」

(19) 既に採り上げ記述解説した品目については太字體にしていない。(以下同様)

8. 「醴」(音 ケイ) 古代・調理の際の酸味材。〔説文〕作醴，以麴以酒，竝麴酒省從皿，皿器也。

「醴」字の各部分がそのものを作る過程をよく示していて、粥(かゆ)に酒を混ぜ、皿に流して空気に曝し、酢酸発酵させたもの。譯は「すぎけがゆ」がよい。エチルアルコールを原料とする酢酸発酵は水及び空気中の酸素が使われるので、酒から酢を造るには水と空気が必要なことを、古代人は経験的に知っていたのである。しかもこの混合物は、発酵後に加熱すると粥の澱粉が糊(のり)状化し、食材に絡み付いて、酸味をよく保持する。周知のように今日でも、酢の類を使う調理では、葛粉等の澱粉質を溶いて加え、生じた「とろみ」でその酸味を保つよう、工夫している。

9. 「酒」アルコール飲料の發祥は、ユーラシアでは新石器時代に遡るとか。中國でも傳説的に太古・「夏」王朝(約三千年前)の昔からこれは有り、全くの濁り酒と透明に近いものとは、かなり早くから區別するようになった。また、「蒸留器」とおぼしき器具が、紀元前三千九百年頃の古代オリエント遺跡で出土している⁽²²⁾ことから、蒸留の技術が中國に古く傳播し、酒の濃縮に應用されるようになり、《五行大義》の時代には、宮廷や上流階級で「酒」といえば蒸留酒であったのではないか。何時の時代でも、支配者やその追従者達は嗜好品類には贅を凝らし、最新高度なものを選ぼうとするのが常である。そうした贅澤の顯示が、自分達の權勢を誇示する一端にもなる。尙、中國の「酒」(及び、下に續く「蜜」など)については、篠田 統博士の考究が詳しく、且つ具體的である。→文獻5-1, 5-2。

10. 「蜜」自然物で甘味材の典型は「蜂蜜」で、物質的には天然單糖類2種・「ブドウ糖」と「果糖」を主とする混合物。攝食すれば直ちに吸収消化されて高カロリーを出す。これらの單糖類は一時に多く攝れば体内で再合成され肝臓等に蓄えられる。蜂蜜は山の熊も冬眠前に懸命に探し求めるといい、太古から人類の重要な食物であった。ユーラシアで一萬數千年前・石器時代の洞窟壁畫に、蜂の巢から蜜を採る様子が描かれている例もある。中國の古文獻では、古く甲骨文字に「蜜蜂」らしい象形が見出されるが、間違いなく蜜蜂と蜜を指して解説する記述が現れるのはA. D. 4世紀以降のことで、晉代・張華原撰《博物志》や梁代・陶弘景編《神農本草經集註》に出ている。コムギやイモから「飴」を造る方法も知られていたが、やや面倒であった。一方、「蔗糖」は、上記の單糖が2分子ずつ結合した二糖類で、攝食すれば直ちに單糖類に分解され、その後は上記同様となる。元々多くの植物に含まれているが、インド原産のイネ科大形草本「甘蔗」サトウキビ *Saccharum officinarum* には殊に多く含まれている。(屬名 sa = 非常に、charis = 甘い。種小名は offi-

cina=薬局の。精糖が近代工業化される前、砂糖は貴重で薬品扱いされ、薬局で賣っていた。)この植物は他の地域でも、低緯度～中緯度で温度と水分が充分な處であればよく育つので、早くから栽培が廣まっております、植物體をそのまま食し、また、碎いて絞った汁を調理に使う利用法も古く中國にも傳わっていた。絞り汁はそのままでは加熱しても結晶化せず、粘稠(濃く、粘り氣が強い)な状態を保つ。〔説文(新附)〕の「糖、飴也。」はそれを言っている。

そこで【原文】の「蜜」が蜂蜜か蔗糖濃厚液か、ということになるが、當時「蜜」として先ず意識されたのは、蜂蜜であつただろう。しかし蔗糖の粘稠液が新しくハイカラな「蜜」として、珍重された可能性がある。蜂蜜には獨特の臭氣があるが、蔗糖には臭氣は無く、より上品と感じられたかも知れない。蜂蜜は成分の單糖類が空氣中の水分を吸収するので、ある程度以上は乾燥せず、じっとりしているが、蔗糖液は煮詰めて塊状に固めることが出來て、運搬し易くなる。更に、蔗糖液は微酸性で、充分精製した後、石灰の適量を混じて中和すると細粒の結晶となる。これは美しく扱いやすいので、益々喜ばれたに違いない。篠田 統博士によれば唐・太宗がインドに使を派遣し、そうした製糖法を學ばせたという。→参考文献5-1, 5-2。

11. 「薑」*Zingiber officinale* 和名ショウガ、ショウガ科。屬名は、サンスクリットの *sringa*=角(つの)形の一 *ver*=根・即ち食、醫、兩用に使う根莖の形を言っている。この植物は熱帯東部アジアの原産で、發芽や生長の際に高温多湿を必要とし、經年栽培出來る地域は限られるが、アジア、インド、～アフリカの廣範圍で、日常的に最も多用されて來た有用自然物の一つである。中國では《史記》やその他、紀元前の文獻に江南の産物として名を挙げ、香辛料兼蔬菜の認識でよく食され、また、生薬の筆頭のように醫療面で頻用されて來た。歴代の本草書や醫書では、實に多くの處方でこの品目を加えている。當品目獨特の香氣や風味、更には醫療効果をもたらす含有成分として精油分と辛味分がある。

精油は環状セスキテルペン的一種 *zingiberen* (1分子構成炭素數15の芳香族化合物)とその類似化合物、辛味は主に *6-gingerol* (側鎖にケトンを持つ芳香族化合物・1分子構成炭素數17)である。

攝取が適量であれば、これらの成分の活性が相まって身體に良い刺激となり、健胃消化、矯味、鎮吐、鎮痛などの目的に用いられた。〔日本薬局方〕にも登録されていて、通常、當該成分の溶液を使う。

ショウガを食すれば、寒い時は身體が直ぐ暖まり、暑い時は發汗を促して涼しくなるのは、誰しも經驗している。漢方醫療では古い根莖を蒸して乾かしたものを使い、「中を溫め、代謝を促進する。」ということで、「大建中湯」,「荅薑朮甘湯」などの處方に加えている。

中国の本草書では、《神農本草經集註》の昔から《別錄》文・「生薑」、《本草經》文・「乾薑」と二項目に分けて記載している。生薑は生鮮品で、産地やその近隣地には出回っただろうが、国内でも北部～西部は概ね温度と水供給が共に不足で、栽培不可能で生薑は得難く、日干しを経た乾薑に頼って来た。

中国では全土で調理に多用するが医療に必需の生薬でもあり、乾薑は昔から全土で莫大な需要があった。乾薑の製法は、6世紀梁代・陶弘景の記述⁽²³⁾によれば、「水に漬けて皮を取り去る操作を二度繰り返す、日干後は器中で熟成させる」とあって、随分丁寧な作り方であるが、12世紀宋代・蘇頌の記述は、「長流水（水量充分な流れ）で洗い、日光に晒せば乾薑となる。漢（現 四川省）、温（現 浙江省）、池州（現 安徽省）のものを良しとする。陶氏の説は漢州（漢・上記）の乾薑法だ。」と、簡単である。一般に植物体の表面は、黴菌や害虫が取り付き難いように丈夫な皮層で覆われている。根莖等、土壤に接していた部分はその機能が強いので、保存に際し皮層を剥ぎ去れば逆効果である。そのことを陶弘景當時は判らなかつたが、蘇頌の頃までには一般に知られるようになり、皮を残す処理法となったと判定出来る。日本・天平時代（729—748）の文書に生薑の名が見える由だが、傳播はそれより前の時代であろう。

ショウガを日本で栽培するには、冬季屋外では根まで枯れるので、秋に掘り揚げて温處に保存し、翌春植え直す。夏の高温多湿はこの植物に好適でよく生長する。日本では乾薑を作るよりも、新芽、或いは春以來急成長した若い根莖を秋半ばに採って、そのまま攝食⁽²⁴⁾することが多い。若い根莖は比較的柔らかく辛味も程々で、新鮮蔬菜として好適である。日本は乾薑の需要を、昔も今も概ね輸入に頼っている。ヨーロッパには紀元前に傳わつたが、彼の地では氣候上、栽培出来ないので、全て干物の輸入に頼り、後々迄高價なものであつた。利用法は、清涼飲料「ジンジャーエール」が普通⁽²⁵⁾で、ビスケットやケーキの原料に混ぜ合わせ、またパンを焼く際に混ぜることもあつた。

ショウガ科植物は熱帯の大型多年生草本群で、ショウガ以外にも有用な種類が数々在る。例えば「ビャクズク 白豆蔻」という種類が、本來タイ、カンボジア、ベトナムからインドネシアにかけての地に産し中國に齎され、北宋代・十世紀後半の《開寶本草》に出ている、十一世紀の《證類本草》各版本、及び更に後世の本草書に引き継がれている。原植物はショウガ科内 *Amomum* 屬の數種で、屬名は A（無い）+ momos（不純物）・香料として純粹という意味。實際の植物體にはやや大粒の果實が房になって實り、ショウガの成分に似た芳香製油及び辛味を含んでいて、この果實を生薬として使う。〔主治〕は、先ず《開寶本草》で「冷氣積りて吐逆し反胃するを止め、穀物を消化し、氣を下す。」とあり、後の醫家が消化系や呼吸系等への具體的な效能も追記している中で、十六世紀末・明代の李時珍が「酒毒を解す」とも書き添えているのは、二日酔いに悩む御仁にとって結構な話

である。

また、インド～スリランカ原産の「ショウズク 小豆蔻 *Elettaria cardamomum*」(属名はその地方での土名・*ela-tari*に由来。種小名は *carda* 家庭生活の守護女神+前述 *amomum*) という種類もあり、ビャクズクと同じように果實に芳香性精油及び辛味を含んでおり、健胃、驅風など、ビャクズクと同様の用途に使われて来て、〔日本薬局方〕生薬に指定されている。これがヨーロッパで古代ローマ時代から輸入し、肉料理に使って来た **Cardamon** である。この *Elettaria cardamomum* と、十八世紀にリンネが定めた *Amomum cardamomum* なる学名のものとは同一とする見解があったが、後者はカンフル様の香味臭が強いとの報告もあり、よく似てはいるが別種で、Cardamon の代用品と観の方が妥当であろう。ショウガ科の有用種類について下に更に數種を挙げ、各々について使用部分、含有物質、用途、薬效を略記する；(各左端「[Ⓜ]」は〔日本薬局方〕指定生薬)

和名	本草名	現中名	学名	使用部分、含有物質等、用途、薬效
ウコン	鬱金	姜黄	<i>Curcuma longa</i>	濃黄褐色根莖→カレー等、食品着色 健胃、利膽、鎮痛。
[Ⓜ] ガジュツ	蓬莪朮	莪朮	<i>Curcuma zedoaria</i>	根莖の芳香精油とモノテルペン類 健胃、肝疾患治療。
[Ⓜ] シュクシャ	縮砂薔	縮砂	<i>Amomum xanthioides</i>	塊状種子の芳香精油と環状テルペン類 健胃整腸。
ソウズク	豆蔻 (草豆蔻)	草蔻	<i>Alpinia katsumadai</i>	果實の芳香精油とモノテルペン 健胃、食欲不振、強壯。
[Ⓜ] ヤクチ	益智子	益智	<i>Alpinia oxyphylla</i>	果實の芳香精油と辛味及び苦味、フラボン類 健胃整腸。

補足. 以上各種の原産地はいずれもインド～東アジア熱帯域(益智は中国・海南島及び雷州半島)。

- (22) 参考文献 3-6. p. 162~163. なお「蒸留器」は最初、香料精製用に考案されたという。
- (23) 参考文献 1-1. の当該文譯・「今はただ臨海、章安(共に現 浙江省)に産し、數村で作るだけだ。蜀、漢(現 四川省～陝西省)の薑が舊(もと)は美しいものだった。荊州(現 湖北、湖南兩省を主とし、周邊も含めた廣域)には好い薑はあるがどれも乾にすることが不能だ。凡そ乾薑を作る法は、水に三日間漬けて皮を去り、流水中に六日間置いて更に皮を削り去り、然る後に(陽に)晒し乾し、甕缸(かめ)に入れて三日間醸して出来上がる。」
- (24) 若い根莖は薄切りして味噌を添えて食する。日本料理で焼魚、鮓、膾などに、その小片を添えることもある。若い根莖を採り、紫蘇で色付けした梅の浸出液に漬けたもの(紅しょうが)は彩りも良く、頻用されている。古い根莖(ひねしょうが)は、魚を煮る際に刻んで加えると魚の臭みを消す。
- (25) 辭書に據れば、*jinger-ade* はショウガを加えた清涼飲料、*jinger-ale* は同じくショウガを加えた炭酸清涼飲料である。

12. 「鹽」鹽(鹽)は生存の爲に攝取が必要な礦物質の筆頭で、本草書で梁代・陶弘景が「五味の中で、此ればかりは闕くことが出来ない。」と記しているように、古代もその認識は明瞭であった。〔説文〕に「鹽、鹵也。天生曰鹵，人生曰鹽，…鹵，西方鹹地也，…鹽

出于海…」と、簡潔な説明がある。内陸部では岩鹽や、湖水の干上りで生じた鹽砂を利用し、沿海地では海水から採っていた。本草書では《神農本草經集註》内《本草經》文で下の四品目を掲げている。各品目で示された《本草經》文や《別錄》文の〔主治（主な效用）〕も書き添えると；

〔戎鹽〕「本經・目を明にする。目の痛みに氣を益し、肌骨を堅め、毒蠱を去る。」

「別錄・心腹痛，瀉血で血を吐き，齒舌が出血する（のを治す）。」

〔大鹽〕「本經・人に吐かしむ。」「別錄・腸胃の結熱，喘逆して胃中のものを吐く病を主とする。」

〔鹵鹹〕「本經・大熱，消渴，狂煩を主とし，邪を除く。及び蠱毒を下し，肌膚を柔らかる。」

「別錄・五臟，腸胃の留熱，結氣，心下堅く食終れば嘔逆喘滿するを去り，目を明らかにし，目の痛み（を治す）。」

〔食鹽〕「別錄・鬼蠱を殺し，邪疰，毒氣，下部の蠶瘡，傷寒寒熱，胸中の痰癖を主に治し，心腹の卒痛を止め，肌骨を堅くする。」

以上の〔主治〕は早期の本草書記載を通じて觀た，中國古代の「鹽」の生藥的側面とも言える。

但し，我々現代人は，鹽といえは近代以降の製鹽法による鹽化ナトリウム（NaCl）100%の品を想定するが，古代の鹽はそうではなく，NaCl以外の可溶性化合物も種々混じている。NaClより含有率は小さくとも，それらの物質の方が生藥成分としては強く働くことは有り得る。該當するケースが實際に有り，時代がやや下った唐代《新修本草》に登場する〔綠鹽〕は，銅化合物（綠鹽銅鑛）が多く混入しているので綠色を呈しているが，〔主治〕に「目が赤く涙が出るのを主とする。」と明記していて，その効力は，本來成分の鹽に依るのではなく，銅化合物に依っている⁽²⁶⁾。近代以降の醫療でも，抗生物質が発見され適用に至る前は，硫酸銅水溶液が眼病治療に使われていた。こうした事實から戎鹽，鹵鹹を検討すると，兩者共〔主治〕に「目を明らかにし目痛を癒す」と明記しているのは，綠鹽ほど含有率が大きくなく綠色は呈さないが，何らかの銅化合物を含む場合が多かったのであろう。銅の鑛石を産する地域では綠鹽に限らず一般の鹽資源にも，銅化合物が混入する可能性は充分有り得る。

13. 「穀，（五穀）」一般に東洋の「穀物」は西洋の「Cereals」⁽²⁷⁾に充てる。穀物，Cereals共に，イネ科植物5～7種類の果粒を主とし，タデ科やクワ科，マメ科の各特定種類の種子も加わったものを指していて，全體概念上は似ているが，東洋と西洋・各々の具體的内容を比較すると，構成種類の差異による，「主食」としての在り方の違いは大きい。東は

モンゴル邊を除く東アジア域、西は極北を除くヨーロッパを各範圍として、古代から新世界發見頃迄の、主食或いはそれに準じてよく利用された。東の穀物、西の Cereals の品目を、ごく概觀的に比較すると、マメ科以外では、

東はキビ、アワ、アサ、オオムギ、イネ、ヒエ、エンバク、コムギ、モロコシ→コウリヤン、ソバ。

西はオオムギ、キビ、アワ、アサ、コムギ、エンバク、ソバ。と言ったところであろう。

以上列挙した中でソバはタデ科、アサはクワ科、その他は皆イネ科である。人の食生活面に東西で最大の違いを齎したのはイネの有無であった。イネは、生長時に高温及び豊富な水量の持続が必須で、温暖な南歐でも栽培出来るのはごく一部の地域に限られる。(陸稻はあるが収量の少なさなど、難點有り。) マメ科植物の種類の違いも、大きい差異を齎した。東では、ダイズが早期から重要な存在であった。

この豆は脂肪及びたんぱく質に富んでおり、栄養面で傑出している。ダイズはヨーロッパの夏季冷涼乾燥氣候には適應せず、Cereals には含まれていない。代わるものとして地中海沿岸原産のエンドウがあり、かなり耐寒性があるが紀元前後から知られ、次第に北方へ広がったが、北方の厳しい條件への順應に手間取り、イギリスで栽培可能となったのは17世紀後半という。更に代用的にであるがソラマメ小粒種は産地(カスピ海南方)から近いヨーロッパにはごく早く傳わった。ソラマメがユーラシア東部に傳わったのは遅く、中國13世紀・南宋代頃で、栽培が廣まったのは、14世紀後半・明代以降である。

以上、ユーラシア(舊世界)全體の、古代から中世までの穀物、Cereals 事情をごく概略で述べた。名を挙げた植物はいずれも、古くから栽培されて来た間に様々な品種、系統が見出され或いは創り出されているが、各論で幾らか説明を補う。上記「穀」範疇で名を示した各品目については【原文】でその名が出た順に各個に解説し、【原文】に名が出ていないものや上記概観で列記を省略したものは、類縁が深い品目の處で紹介説明してゆく。

凡そ中國で「穀」として意識される食物の種類数は、域内原産と目されるものに、他の地域から早く傳來し普及したものを加えると、古代に既に十種程に達していた。栽培史上の實際からして、五種類に限定し難く、「六穀」でも、實際との懸隔は大きい。「九穀」⁽²⁶⁾の概念が早い時期から出現しているのは當然である。穀類は、種類によって水分、温度、土壤その他・環境條件への適應に違いがあり、それにより栽培されて来た地域も差異があるから、やや狭い地域範圍では數種類に絞ることが出来るかも知れないが、やや廣域を想定して「中國の穀」と言う場合、九種類前後を挙げるのが妥當であろう。

(26) 参考文献 1-10. 第三册 p. 628 益富壽之助博士の註記に據れば、「空青」、「曾青」、「偏青」、

「白青」,「石膽」等の銅化合物はひとしく眼病に用いられたという。

- (27) Cereals は古代ローマ・農業, 豊穰の女神 Ceres (セレス) から来た語。類義語・Grain はアメリカ英語で, イネ科植物の種子の硬く小さい粒を指し, 豆類は含めていない。
- (28) [九穀] の設定例: ①前漢 范勝之・稻, 禾 (アワ), 黍, 麻, 稷 (モチアワ), 大豆, 小豆, 大麥, 小麥。
 ②後漢 鄭司農 (鄭眾)・黍, 稷 (ウルチアワ), 稷 (モチアワ), 稻, 麻, 大豆, 小豆, 大麥, 小麥。〔周禮天官註〕
 ③後漢 鄭玄・黍, 稷 (ウルチアワ), 稷 (モチアワ), 稻, 麻, 大豆, 小豆, 麥, 苽 (マコモ)。
 上記①~③の各漢字名の同定については, 當小論で品目毎に検討した。

14. 「米」この字は本来“粃穀を取り去った穀粒一般”を指し, 稻の穀粒とは限らなかつた。北部で「米」と言えば普通はアワの穀粒であつた。【原文】の該當箇所は「米甘, 麻酸, 大豆鹹, 麥苦, 黍辛」と, 五穀を五味に對比させている中に「黍辛」が在り, 後に直ぐ「一云, 稻米辛」と續いているので, 先頭の「米」に充て得るものはアワ以外に無い。一般に, 形容詞を付けて, 「大_米」はコメ (稻の脱穀穀粒), 「小_米」がアワのそれ, 「黃_米」がキビのそれであつた。アワは穀粒として殊に小さく, キビ粒は黄色い。これらは現代中國でも通用する語である。日本では彌生時代初期に稻が傳來し, 北部寒冷地以外では次第に廣まり, 主食が「大_米」に變つたので, 「米」一字で稻のコメとなつた (→稻米)。

15. 「麻」現在この字は, 衣服の材料としてお馴染みの植物纖維を指すが, 原植物は漢名・大麻 (現中名・麻) 和名アサ *Cannabis sativa* L. クワ科。屬名は當植物のペルシャ古名 knab からという。原産地はインド西北, ヒマラヤ西方から中央アジア。雌雄異株の大型一年生草本で, 西アジアの邊りで紀元前二千年には栽培されており, 他地域への傳播も實に古く, 紀元前千數百年にヨーロッパに傳わり, 中國でも紀元前數百年以上前に栽培され, 雄株を「枲麻」, 雌株を「苴麻」と呼び分けていた。(枲麻の「枲」はカラムシ。イラクサ科の野生草本。中國や日本の暖地に廣く自生し, 大昔から纖維を採っていた植物で, 麻や木綿を潤澤に使うようになるまで, その纖維を衣服材にしていた。) 苴麻の「苴」は果實が出来ることを意味する。「目」形の小果實が稔り, 丸い種子が一つ入っている。

本草書では, 六世紀・陶弘景編《神農本草經集註》に於いて, 花「麻蕒」及び種子「麻子」を品目に立てて上古の文獻記載を集め紹介しており, それらを含め, 後代の醫書, 本草書に記録してある數々の知見も纏めて, 十一~十二世紀の《證類本草》が〔米穀部〕に記載している。初期記述を検討すると, 花について, 《神農本草經集註》《本經》文に「麻蕒・五勞七傷, 五臟を利し血, 寒氣を下すを主とし…久しく服すれば神明に通じ身を軽くする。」と, 強い效用を認めながらも「多食すれば鬼を見, 狂走せしめる」と併記して, 害作用も指摘している。《別錄》の文は「麻蕒・有毒」と斷定の後, 「積を破り, 痺を止

め、膿を散らす」と実際の薬效も述べている。種子について、《本經》文は「麻子・中を補し氣を益するを主とする。…肥健せしめて老せず。」と賞賛し、《別錄》文は「中風には汗出でて水を逐い小便を利す。積血を破り血脈を復す。乳婦産後の餘疾。髭を長くし沐を爲す可し。久しく服すれば神仙…土に入るものは人を損ねる。」と述べている。總じて《本經》では抽象的に、《別錄》では具體的に、言葉を分けて、この品目の效力と害作用を見事に説明しているのである。

アサには古來、四用途が有った。第一に、莖から纖維を採る。雄株の方が雌株よりも莖の分枝が少なく、良い纖維が採れる。第二に、雌株に稔った種子を食する。《五行大義》【原文】當該箇所の「麻」は、これを「五穀」の一つに充てている。尤も、種子は皮が堅くてそのままでは食べられず、脱穀が面倒でその上、油を含むので粉に挽き難く、美味でもない。他の食品が充分得られれば、これは敬遠されただろう。第三は、種子を絞れば油が採れる。乾性油で木材に塗るなど結構役に立った。第四が、麻薬成分である。實は、原産地や熱帯インド邊で、Tetrahydro-cannabinol と呼ぶ物質を含有する變種「インド大麻 var. *indica*」が昔から栽培されていた。この物質は人の中樞神経機能を抑制するので、鎮静、鎮痛、催眠の目的で使われたこともあったが、酒のアルコールに似て興奮、幻覺を惹き起すなどの副作用も強く、上に紹介した初期本草書の記述は、そうした作用副作用の有様によく一致する。今は世界各國でこの「インド大麻」の栽培を禁止している。本来のアサ *Cannabis sativa* は Tetrahydro-cannabinol を含有していない。*Cannabis sativa* と var. *indica* とは、植物體が形態的に同じで見分けは付かず、區別が困難で、そのことがこの有用植物の大きな問題點である。日本では當植物體の使用、所持運搬、賣買も一切禁止されていて、違反には懲役刑が課せられる。

16. 「大豆」古代本草書には「大豆黄卷」が出ている。マメ科のダイズ *glycine Max* の「藪(もやし)」である。ダイズの屬名は *glycys* (甘い) から。種子(豆粒)が糖質を多く含み(水以外の含有物の約四分の一)、含有蛋白質が分解して生じたアミノ酸も「うま味」の元なので、兩方で獨特の甘さを感じるのである。この「甘さ」と「うま味」を巧みに活用し、長持ちするよう醸造して造った調味料が「醤油」である。ダイズの英名 Soy-been の「Soy」は「しょうゆ」の音を採っている。

ダイズの豆自體については、本草書では本来、「生大豆」の名で上記「大豆黄卷」に付されていたのを、十一世紀 北宋代の中頃、敕命で總合的本草書を増補大改訂した際に改めて、分條したという。

古代本草書を觀ると、《神農本草經集註》では《本經》文で「生大豆」の名と效用をそのように記し、《別錄》文に效用記載もある。ダイズは三千年以上前に、中國で野生のツ

ルマメが栽培化されたものという。二千五百年前には「菽」と呼ばれた。アジア全域に廣まり、夏に高温、多照、高湿の三条件が揃えば北方、例えば中国北部東北部でもよく育つと判って、徐々に重要な作物となった。ヨーロッパへ伝えられたのは遅く（十八世紀）、氣候条件の點でも栽培はごく一部の地に限られ、普及しなかった。

ダイズの豆粒は、丈夫な種皮（豆皮）を除去して中身（肥厚子葉）だけを取り出すことが難しく、含有量の多い物資（たんぱく質や脂肪）の性質上、粉にもなり難く、そのままでは食し難いので、考え出されたのが、「もやし」、「豆腐」、「納豆（發酵品）」などの加工法である。「もやし」は、乾燥させた豆粒では物質が凝固しており、消化吸收を良くする爲に、水を吸わせて發芽させ、含有物質が溶け出る状態にして食するものと、今は判っているが、食しやすくする工夫から始まったのである。芽が伸びたものを干すと、日持ちも良くなる。やや高緯度或いは中緯度でも山間部で日照不足、その上、乾燥気味の地では青野菜類が育ち難いので、そのような處ではこの生乾きの「藪」が常用蔬菜である。ダイズには周知のように色の違いが有り、その差異は效用の有無にも及ぶ。上記・本草書増補時の主な關與者の一人であった儒官・蘇頌は、「黑白の二種が有り、黒は薬に入れるが白は用いない。薬に入れる場合は小さく締ったものが強く、效き目は大きい。」と明記している。「黑豆」の色は、その皮に密に含まれているアントシアニン色素に據るが、この色素はフラボノイドの一種で、フラボノイドと總稱される物質群は、「桑白皮」や「款冬」の品目解説でも述べたように、人體内で抗アレルギー、抗炎症、抗腫瘍などの作用を發揮する場合があつて、その可能性が生藥的な效用の根據となる。

ダイズの歴史についてももう少し考えてみよう。上記のようにダイズは北宋代中期に「黑白二種」と、今と同じ種類認識が出ている。しかしそれは、言わば「監督官廳の標記」であつた。総合的本草書の増補大改訂は救命に據る國家事業だから、蘇頌の同僚の政府高官が全國に手配し、各地の有用自然物の實物や丁寧な實寫圖、及びその品目に關する詳細な記述を提出させて編集した。當然、各地は選りすぐった純品やそのデータを提出しただろう。選りすぐりの方法であるが、ダイズはイネ科の穀粒より大粒で、手間さえ掛ければ、播く時と收穫した際に、黒ならそればかり、白ならそればかり、大小もよく揃うように、選ぶことが出来る。とは言つても、膨大な量を一舉に選ぶことは不可能だろうが、ダイズは一年生草本だから選擇を毎年繰り返せば累積効果は大きく、しかも自家受精が普通で、別圃の異品との豫期せぬ交配は起らないから純品が作りやすい。上納・報告用はそのような工夫で準備したのではないか。

一方、食用の間流通品や自家消費分は純品化する必要が特になかつた。それらの「大豆」は粒毎の色や大小は雑多で、他種類の豆が混入していることもあつただろう。蘇頌の《本草圖經》より數十年後、北宋代末期に出た寇宗奭の《本草衍義》では「生大豆には

緑、褐、黒の三種があり、また大粒のものと小粒のものが同じように（三種ずつ）ある。その大粒種は江、浙、湖の南北で産出する。黒い小粒種は他の地で産出する。今は小粒種を使えば薬効はますます良い。…」と記している。薬用には黒の小粒種を勧めている點は蘇頌と同じであるが、粒の色については違っている。「黒」はよいとして「緑」、「褐」は怪しい。下記の「綠豆」など、似ている別種の豆の混入を思わせる。

「綠豆」和名ブドウ *Phaseolus aureus*（屬名は *phaselus* 丸木舟・開いた莢の形から。種小名は *aureus* 金貨→優れもの。）インド原産とされるが中國へは早く傳わり、北部で千五百年前には栽培されていた。

豆はやや小さく、褐色に近い暗緑色である。一年間で播種可能期間が長く生育期間は短く、春夏二期作も可能（別和名ヤエナリの原因）。この豆の藪（もやし）はダイズのものよりも小振りで扱い易く、日本では殊に喜ばれる。「豆素麵（はるさめ）」にも造る。中國で早くから栽培されていたにもかかわらず、本草書で獨立の品目として掲げたのは、十世紀後半・北宋代初期《開寶本草》からであり、この書の内容全體を繼承した、総合的本草書増補大改訂（前述）後の《證類本草》で、「菜豆」（菜=緑）は「今附（最近の追加）」品目となっている。生薬的に使って特效を示す様でもないが、中國の本草學は、單なる「藥物の學」ではなく、薬効が顯著であろうが無かろうが、凡そ一切の自然物を巻き込んで成立している「萬物の學」である。綠豆を獨立の品目として認知するのが遅れたのは、大豆の影に隠されてというか、大豆と混同され、大豆にかなり埋没して来た感がある。數百年後の明代・李時珍《本草綱目》の記載は「大豆には黒、青、黄、白、斑、數色のものがある。黒いものだけを薬にする。」と、色の點で益々異彩の豆を示唆している。時代が下がっても綠豆以外更に別種の豆も加わっている實情であったか。

（関連）「赤小豆」和名アズキ *Phaseolus angularis* 前品目（綠豆）と同屬の近縁種。種小名は「角がある」一莢が角張っているから。原産地は東アジア北寄りの地。我國では殊に好まれて来た豆で、吉凶時の赤飯、正月十五日の小豆粥、汁粉、お萩、羊羹、餡にして餅に入れる 等々がある。アズキは先ず、豆粒の落ち着いた紅色が彩りとなって喜ばれる。この紅色はアントシアン系色素に據るので、充分には解明されてはいないが、この色素を含めて、豆の成分も生理的に好影響・即ち薬効を齎すらしい。日本の漢方で利尿、消炎の處方に加え、民間傳承でも「味を付けずに煮て毎朝食すれば便秘に良く、脚氣を治す」という。中國では《神農本草經集註》《本經》文で品目名「赤小豆」を掲げて、「水を下し癰腫の膿血を排するを主とする。」と記し、《別錄》文も「寒熱、熱中、消渴（を癒し）、洩を止め小便を利し、吐逆、卒澀（に効き）、腸滿を下す。」と、強力な薬効を記している。本草書でのその後の扱いを、宋代《證類本草》から明代《本草綱目》へかけて観てゆくと、各時代の醫家本草家は、古代の記載に沿いながらも、赤小豆の効力が良く發揮出来る新處

方を次々と定めて記載している。

食用にはどうかというと、《證類本草》後期版本に引き継がれた寇宗奭（北宋末・前記）《本草衍義》の記載には、「關西（現 陝西省中部～南部）、河北（現 河北省）、京（首都・開封）の東西では多くこれを食する。」とあって、当時の先進地域ではよく食していたことが判る。なお「赤小豆」は悪疫避け、お祓いの用途に使う場合もあり、五行に関連してまとめた箇所に引用し検討する。

17. 「黍」和名キビ *Panicum miliaceum* L. 英名 millet イネ科。屬名の源は panus（その穂の古名）。種小名は mille（多数、千）から（一穂に多数稔る）。近縁の野生種が多く現存するインド北方域邊りで栽培化されたといわれ、ユーラシア内陸ほぼ全域で、非常に古くから重要な穀物であった。ヨーロッパ新石器時代の湖上住居跡から出土し、中國では河南省殷墟の卜辭に、穂が散生しているキビらしい象形文字が記されており、《周禮》、《詩經》などにキビに相當する文字が頻出している。キビは乾燥氣候に適し、生育期間が短く、かなり高緯度でも育ち、日本ではかつて主に北海道で栽培されていた。世界的に多くの品種系統がある。中國で「黍」はモチキビ、「稷」はウルチキビ。キビに限らず稻のコメでも、酒を造るには、モチ性品種よりも蛋白質が少ないウルチ性品種の方が適しているが、「稷」からは殊に好い酒が造れるという。（参考文献5-1, 2）「秬」和名クロキビというのもあって、面白いことにこの品種は度量衡の基準に使っていた。秬の穀粒を一定數並べた列長を長さの單位に、一定數集めた嵩（かさ）を容積の單位に、一定數集めた重量を重さの單位に、それぞれ定めたのである。

（参考文献・小泉袈裟勝著『歴史の中の單位』1974年發行 東京（株）総合科学出版刊 他）

中國の「黍・キビ」を言うなら、似た別物に注意が必要で、それを説明すると、

「蜀黍」和名モロコシ、ナミモロコシ、古稱トウキビ（唐黍）、タカキビ（高黍）。*Sorghum bicolor* イネ科。歐米で通稱 African (or Indian) millet。太い莖が2～3mの高さに直立し、葉も長く幅が広い。大きさからフランスでは grand millet と呼ぶこともある。種小名 bicolor は本来「花が二色」の意味だが、この植物の場合は風媒花で花瓣は無く、種子を包む「穎（えい）・粃殻」の色に赤や黄など変化がある。同屬の野生種がアフリカに多い。西暦紀元かなり前にエジプトやインドで栽培されていた。中國へは蜀（四川域）を経て華北へ傳わり、この名が付いた。長年月の栽培中に變異を生じ、變異種間の交雜により遺傳子構成が複雑となり、現在の栽培種の系統は明らかでない。「慮粟」サトウモロコシは莖に甘味有り、絞って糖蜜を造ることもある。今はアメリカなどで重要な青刈飼料である。別の變種・ホウキモロコシは穂が特に大きく長く、果實を取り去って束ねて和籐とした。同屬の他種の中で、「高粱」和名コウリョウ、コーリヤン *S. nervosum* は中

國北部東北部，朝鮮北部などで廣く栽培され，重要な穀物となって來た。種小名は穎（前記）が脈狀（nervus）ということで，ナミモロコシとの區別點の一つである。高粱はアフリカ原産ともいう。中國のイネ科穀物でキビより更に古いものが

「禾」和名アワ *Setaria italica* である。屬名は saeta（剛毛）から。個々の花が剛毛に圍まれているのをいう。歐米では穂の形や色合いからアワを Foxtail millet と呼ぶ。

アワは砂漠以外の殆ど世界中で見られる雑草・エノコログサ（俗稱ネコジャラシ）から出て，東アジアの邊りで極めて古い時代に栽培化された。中國黃河流域「中原」で最初に栽培された穀物という（參考文獻3-8など）。三千五百年前の殷墟で出土した卜辭に，穂の出したアワに似た象形文字があり，「禾」の漢字になった。この字は全ての穀物の字の元でもあるので，複數の意味を持つことになり，アワを指すのか，他の穀物も含めているのか，文旨や前後關係に合わせて判斷する必要がある。

アワは乾燥氣候に適應し，生育期間が短いので，中國の廣い範圍で早くから栽培され，キビと共にかなり後の時代まで主食穀物であった。早くから穂の大きさが違う二系統に分かれており，穂が大きい方は「梁」（オオアワ），小さい方を「粟」（コアワ）と呼び分けた。冒頭の學名は嚴密にはオオアワを指し，コアワは同じ種ながら變種 var. *major* である。しかし，アワは栽培が早く始まったので，長い間に品種系統が分かれ，それらに消長もあり，古名もやや變遷したようである。例えば「梁」はモチアワとする見方があり，「粟」の字の第一義は，アワに限らず穀類一般の，粃殻を付けたままの穀粒を指した。

即ち「粟」の字は，粃殻を取り去った穀粒一般を指す「米」の字と對照的な概念であった。アワは東へごく早く傳わり，繩文時代には日本でも栽培していた。日本ではオオアワが主に廣まり，それに「粟」の字を充てるようになった。ヨーロッパには新石器時代に傳わって，湖上住居遺跡から出土している。多く栽培される地域の名を冠して Italian millet, German millet, Hungarian millet などと呼ぶ。

18. 「稻米」イネ *Oryza sativa* L. 英名 Rice. 原産地は，インド東部から更に東へかけての低緯度親水域。屬名はアラビア語 eruz（コメ）から。ヨーロッパへは紀元前から繰り返して傳えられたが，アラビア人が南歐へ齎したこともある。中國では，華北河南省仰韶で出土した甕の破片に稻の穎の跡が多數付いている。仰韶の地を含めて，秦嶺山脈とその東の伏牛山脈の北側斜面・西の渭水から，東は黃河にかけて各々の南岸地域は，湧水も豊富で，西周時代（紀元前千年前後）に既に稻が盛んに栽培されていた。他の穀類に比べ抜き出したコメの食味の良さもさることながら，稻作の顯著な利點は，「水田」栽培で單位面積當り極めて高い收量が得られることである。品目「靡草」の解説で記したが，イネは，密植して緑の絨毯を敷き詰めたような状態となっても，綫形の莖葉が揃って上へ伸びていて，

太陽の光エネルギーを實に効率よく取り入れて有機物を合成する。必要な無機養分は回りの水に充分溶け込んでおり、更に水は比熱が大で、日中の高温をよく保持し夜間冷却を緩和する。急斜面の地でさえ「棚田」方式で上手に栽培している例は各國の隨處で見られ、その有利性を實證している。

なお「稻米」は「イネのコメ」即ち脱穀した米粒を指す(→「米」)。

19. 「菓」「果」が本字。〔設文・果、木實也、從木象果形在木之上。〕“木に實る”果實を指している。今日我々が「くだもの」と總稱している品々は、いずれも或る程度以上大きく、且つ味がよく、生食出来るものばかりであるが、【原文】に出ている中國古代の「五果」は、そうした現代基準の「くだもの」とはかけ離れた、ごく原始的な代物かという、意外にそうではない。到底生食出来ない「梅」は外してあり、個々の果實の粒が小さ過ぎる「櫻桃」などは選ばれていない。【原文】で列擧されている五果は、極端に改良が進んだ現代の同種のものに若し直接比べる事が出来れば、見劣り味劣りするであろうが、時代の古さを考えると、現代にも通用する佳品揃いであつたに違いない。

20. 「李」和名スモモ *Prunus salicina* バラ科。中國原産で二千五百年前から栽培されて來た。昔から果實を食したが、花は純白で美しく芳香あり、中國では古來、花木の第一位と愛好された。

西歐では二千年前から、別種・アジア西部原産の *P. domestica* 西洋スモモ(現在の通稱 plum プラム)が栽培され、その木を *Prunus* と呼んでいたのが、後に近縁種も含めた屬名に採用された。*Prunus* 屬の果實の内部は表面に外果皮、その内側は肉質多漿の中果皮、中心が堅い核の内果皮、更にその中に種子が入っている。大形(ex. モモ)でも小形(ex. サクランボ)でも皆同じである。これらは内果皮の堅さから、植物學用語で「石果 Drupe」と總稱する。李の種小名は *salicina* (*salix* ヤナギの様な)から。葉がヤナギの葉のように細いのである。李(スモモ)は風土に對する適應性が強く、中國では南の廣東から東北部北緯 50°の地まで栽培される。日本でも奈良時代から栽培されて來た。後に日本からアメリカに傳わつた。この果實は酸味が強い(俗稱・酸桃)が、改良され酸味を緩和し甘味を増した品種もある。日本でハタンキョウ(巴旦杏)として流通している品はその一つである。中國では「巴旦杏」は別物の(「扁桃」)を指した(→「桃」)。「李」の名を充てている近縁品種二種を下に付記すると；

「郁李」和名ニワウメ *Prunus japonica* 《本草綱目》李時珍は「花、實、共に香りがよいから“郁”と名付けられた。」と記している。元々中國中部～北部に分布し栽培されて來た。日本へ古く渡來。種小名は *Tunberg* が日本で觀て命名したことによる。古來、小

果實（1 cm 大）は食用，種子は薬用に供したが，古書の薬用記載は同様目的の近縁種との混同交錯が激しい。「多葉郁李」和名ニワザクラは *P. glandulosa* 花を觀賞する爲に重瓣（八重咲き）化された品種で，別に一重のままの系統もある。

中國の本草書で「李」は早期の《神農本草經集註》〔別錄〕文から出ているが，品種系統別の把握は乏しく，近縁他種との混同もある。

バラ科 Genus *Prunus*（サクラ屬）にはスモモ以外にも，東西で花や果實を愛好して來た樹木が多い。【原文】に名が出ているものは當論で品目として番號を付し，順に解説してある。【原文】に名が出ていないが中國から日本にかけて，ごく一般的な「サクラ屬」の二種を下に略解する：

「梅」別體「楳」和名ウメ *P. mume* 種小名は十九世紀前半，日本の植物を研究した Siebolt と Zuccarini によるが，「梅」の中國音 mei と日本音 u-me が混合している。中國では二千五百年前から栽培されていて，《詩經》に出ている。濕潤な氣候に適し，日本でも古代から廣く栽培されて來た。《萬葉集》に出ている。先ず春に花を愛でる爲に，兩國共に觀賞用品種を多く造って來ている。果實は有毒で生食出來ないが，兩國各々巧みな處理で，保存が出来る加工を施し，生活に役立てて來た。代表的加工法は中國の「烏梅」と日本の「梅干」である。本草書を觀るとよく判るが，《神農本草經集註》の《本草經》の文が品目に「梅實」を擧げ〔主治〕「氣を下し熱，煩滿を除き心を安んじ，肢體の痛み，偏枯不仁，死肌，青黑誌，惡疾」（〔誌〕ははくろ，あざ）と概念的に效を示し，《別錄》文が「下痢を止め，唾せしめて口の乾きに好し。漢中（現 陝西省西南部）の川谷に生じる。五月に採り，火で乾かす。」と具體的に記している。編者・陶弘景は新註で「此れはまた烏梅たらしめるがよきなり。用いるにはまさに核を去りて僅かに此れを熬す（炒）べし。」と明示している。果實を採って芯を抜き，少し熏したものが「烏梅」である。その用法は陶弘景が先ず「傷寒煩熱には水に浸し，汁を飲む。」と述べ，後の時代の醫家本草家達も各々詳述している中で，宋代《日華子諸家本草》の大明が「…酒毒を消し，人をして睡（眠）を得さしむ。…」と，現代人が喜びそうなことも記している。烏梅は日本でも奈良縣月が瀬で造っていたことがあり，民間薬として使い，或いは染料にしていた。日本の「梅干」は，加熱せず多量の鹽をまぶして重石をのせると酸液（梅酢）が抜ける。その後二日二晩，「苴・むしろ」や「すのこ」の上に擴げてよく干すので「梅干し」である。更に漬け直す但其の際に「紫蘇」の葉を加える。鮮やかな彩りと共に，紅い色素の薬效が加わる。紅色色素の薬效は日本薬局方で「蘇葉」として認めている。ウメと「杏・アンズ」の雜種は純種のウメより果實が大きい。「豊後梅」と呼ばれる品種はそれらしいという。ウメは歐米では栽培せず，利用することもない。

「櫻」：中國では，この字を含む樹木名から想定する木には鑑賞花樹もあるが，薬用或い

は食用の果樹としての認識が強い。地域的な違い及び、野生種、栽培種の別もある。代表的な種類を挙げると：

「櫻桃」この名で二通り在り、一つは *P. tomentosa* (別稱・英桃) 和名ユスラウメ (種小名は“綿毛が有る” —この種の場合は若枝に密生。) 中國の殆んど全土に分布。果實・種子を薬用にも使った。

もう一つは *P. pseudo-cerasus* (種小名・偽の一櫻實) 舊和名シナミザクラ この種も中國で廣く分布し、樹皮、根、葉、果實・種子を薬用に使った。兩種共に日本へ古く渡來し、栽培もされた。一方、花樹は、中國・東北部～北部山地に *P. Sargentii* 和名オオヤマザクラ (種小名はアメリカの樹木學者 Sargent より、日本本州北半山地～北海道にも自生。),

・中部に *P. Jamazakura* 和名ヤマザクラ (小振りの花は紅色がやや強く、開花時に紅褐色の新芽も出る。日本本州以西の山地にも多く自生。),

・南東部には *P. campanulata* 和名ヒカンザクラ、カンヒザクラ (種小名は“釣鐘形の” —花の外形をいう。) 紅色の花が二月に咲く。日本・沖縄では野生化して、至る處で觀られる。

21. 「栗」和名アマグリ、(舊) シナグリ *Castanea mollissima* ブナ科 (Castana 古ギリシャ語のクリ, mollis “柔軟毛が有る” —若枝や葉の裏面に。) 華北原産で、《史記》に大産地の名が出ている。日本、ヨーロッパ、アメリカの本來のクリはそれぞれ別種。日本種は殊に大粒 (野生小粒種を古くから改良)。

22. 「杏」和名アンズ *Prunus Armeniaca* 英名 Apricot. バラ科。既出の「スモモ」, 「ウメ」等と同屬近縁、中國北部原産。古代に西域を経てヨーロッパへ傳わった。中部アジアのやや乾燥した地域で多く栽培する。アメリカへは十八世紀に傳わった。利用の歴史が長く、栽培地が世界的に廣いので、多くの品種がある。果實はウメより大きく酸味は有るが甘く、生食出来る。種子の中身が古來の生薬「杏仁」である。《神農本草經集註》《本草經》文に〔主治〕「咳逆上氣、雷鳴 (の様な鳴動)、喉痺、氣を下し、産乳、金瘡 (刃物傷)、寒心、賁豚。」、《別錄》文には「驚癇、心下の煩熱、風氣去來、時行頭痛、肌を解き、心下の急を消し、狗毒を殺す。…」とある。杏仁は成分としてフェニルアラニン由來の靑酸配糖體 Amygdalin を含み、鎮咳、去痰の薬效有り〔日本薬局方〕に登録されている。ウメに交配して容易に雜種が造れ、ウメの果實を大きし (既述)、耐寒性を増すので、早くから實施されていた。

23. 「桃」和名モモ *P. persica* 英名 Peach. 中國中北部原産。中國では二千五百年前から利

用しており、古代ペルシャを経てヨーロッパへ紀元前に傳わった。日本へも上古に傳わり、桃核が彌生式土器と共に出土する。植物體の生長は早いが個々の株の壽命は短い。生食以外に、生果肉、果實の毛、**桃臬**（冬まで樹に付いていた枯果）、種子、花、葉、樹皮、根皮内層（白皮）、樹液等々、殆んどあらゆる部分を薬用とする。「桃臬」は、〔主治〕として《神農本草經集註》《本草經》文に「百鬼の精なるものを殺す。」とあり、《別錄》文に「中惡腹痛を療し、精魅（精悍な妖怪）を殺し、五毒不祥（を療す。）」と、強力な效能を認めている。種子の中身「**桃仁**」は成分に青酸配糖體 Amygdalin を含むが、生薬としての效用は「杏仁」とはやや異なるようで、婦人病、瀉下劑の處方に配合する。

24. 「菜」 今日の蔬菜類（俗稱・野菜）を言い、《神農本草經集註》内に三十餘種の品目を見出すことが出来る。【原文】は下の五種のみを挙げ、このように「五行」に合わせて五品に絞る場合には、中國土着のイメージが明瞭な下記五品が選ばれ、「五菜」に設定されている。選ばれた五品の内、三品までが、當該屬獨特の強い臭氣を放つユリ科ネギ屬（Genus *Allium*）であり、残る二品も、自屬内で顯著な共通性・粘液質を持つ、アオイ科ゼニアオイ屬（Genus *Malva*）の代表的な一種、及び、蛋白質その他獨特の成分を共有する豆類の中でも、含有色素の實效性を示すアズキの葉である。「五菜」は明らかに古來の土着種で強い個性を備え、實效も強い種類のもが選ばれているのである。

中國では「**菘**」和名ハクサイ、「**蕪青**」カブラ、「**芥**」カラシナなど、アブラナ科の種類も、西曆紀元前から栽培していたが、これらアブラナ科のものは概ね原産地が西方であり、中國で栽培するようになった後、數百年以上経過しても尙、「外來品」のイメージを遺して、選ばれなかったのであろう。

25. 「葵」 和名フユアオイ *Malva verticillata* L. アオイ科。（屬名は malache = 緩和する一古代ギリシャでこの植物の粘液を緩和劑として使った。種小名 verticillaris = 輪生の・葉が莖に輪狀に付く。）粘液質は體內老廢物の移動排出を助ける。古代東アジアで主要蔬菜であり、苗（若い植物體）や成體の葉を食した。《神農本草經集註》の《別錄》文に「葉は百菜の主と爲る。その芯は人を傷す。」とある。種子及び根は薬用であった。種子は《本草經》文に、「冬葵子〔主治〕五臟六腑の寒熱、羸瘦、五癰、小便を利する。久しく服すれば骨を堅くし肌肉を長じ輕身延年。」、《別錄》文は「婦人の乳難内閉を療する。」、根は《別錄》文に「葵根は惡瘡、淋を療じ、小便を利し、蜀椒の毒を解す。」とある。

26. 「韭」 和名ニラ *Allium odorum* ユリ科（屬名は alere = 臭う、或いは halium = 臭い。種小名も odorus = 匂う。この植物特有の臭氣をいう。）《說文》に「韭・菜名。一種にして久しき

者。形を象る。…」とある。春に地面から生え出る様子を象っている（種=種）。中國西部の原産で三千年前から栽培し、葉を食し、品種改良した長大な薤莖も好まれ、中國では今も一般的に主蔬菜である。日本にも古く傳わったが、こちらでは葉のみ食するようになった。今は野生化しているものもある。

補. ユリ科ネギ屬 (Genus *Allium*) の植物體には揮發性硫黄化合物が生じ、この群特有の臭氣となる。この物質には殺菌力も有り、植物自體にとって微生物感染や昆蟲、草食動物による食害を防ぐ効果がある。食した側でもその効果は期待出来る。この物質はネギ屬内の種類により分子構造が少し異なるので、臭氣、刺激も種類により少しずつ違っている。例えばタマネギ (*A. Cepa* L. 種小名はこの蔬菜の古名、歐米名 Onion) の臭氣は催涙性も伴う。ちなみにタマネギは歐米及び近代以降の日本でよく好まれて来たが、現代の中國では(原産地であるにも関わらず) さほど好まれない。

27. 「藿」アズキの葉 (アズキ「赤小豆」は16.「大豆」ダイズ関連で既出)。西暦1116年刊行の《重修政和經史證類備用本草》の「赤小豆」記載内に「唐本註に云う・別録に云うに葉は藿と名付ける。小便の數(頻なる)を止め、煩熱を去る。」とある。[唐本]は西暦659年に出た敕撰の《新修本草》のことで、その内容は全て宋代《證類本草》に吸収されているが、元本は、寫本のごく一部分以外は悉く亡失している。同じ「赤小豆」記載内に別に一箇所「日華子云う…葉は之を食せば目を明らかにする。」とある。此處では「藿」の字を使っていない。[日華子]は宋代初期・西暦970年頃の《日華子諸家本草》で、後の《證類本草》に吸収されているが元本は亡失している。以上の記載は《證類本草》の別版本でも同じである。「大豆」を含め他の豆の處には「藿」や「葉」の記載はない。

28. 「薤」和名ラッキョウ *Allium chinense* (= *A. Bakeri*・ユリ科などを研究した英國の分類學者 Baker から) 中國原産という。中國各地に野生種があり、六世紀前半《齋民要術》に栽培法が出ている。東アジア廣域で古くから好まれ栽培されて来た。地下の鱗莖を鹽漬け或いは酢漬けなどにして食する。漬ける際に糖を加えることもある。歐米ではこの種類は好まず、食用にしない。

29. 「葱」和名ネギ *Allium fistulosum* L. (種小名は *fistulosum* = 管状の・葉の圓筒形を言う) 中國西部原産。二千二百年前に記録(《山海經》,《禮記》)があるというが、今のものより小型で葉も細い野生種或いは近縁種を恐らく混同していた。中國や日本で長年栽培されて来てやや大型化したので、今のものは變種 (var. *giganteum*) とすることもある。歐米ではこの種類はあまり普及せず、地中海沿岸原産の Leek 和名リーキ (*A. porrum* 種小名はこの蔬

菜の古名)が栽培されて来た。リーキは葉が扁平で、ネギよりも臭気は少ない。葉の基部(重層白色の部分)を食する。古代本草書では、《神農本草經集註》《本草經》文に「葱實」品目がある。種子を薬用としたのである。植物體の效用の記載は《別錄》文で、「(其莖)葱白, 平, (主治) 傷寒骨肉痛, 喉痺不通, 胎を安んじ, 目を歸し, 肝の邪氣を除き, 中を安んじ, 五臟を利し, 目睛に益し, 百藥の毒を解す。」「葱根, 傷寒頭痛を主とする。」「葱汁, (主治) 溺血, 藜蘆の毒を解する。」とある。

30. 「畜」 家畜・飼う動物。獸(野獸)に對する語。近代以前は實用目的以外に、祭祀執行時の犠牲としても重要であった。中國では、その種類數の定めは「六畜」が普通で、「五畜」とは言わなかった。

《爾雅 釋畜》「馬, 牛, 羊, 豕(猪), 犬, 鷄。」【原文】は「六畜」の「馬」を外して、食用の五種類を「五味」に對應させている。馬は騎乗, 曳車の用途が優先し, 平常時, 食用に供されなかった。

31. 「牛」 ウシは大形家畜の内でも古い。三千年以上前のナイル, チグリス・ユーフラテス, インダス・三大河川流域古代文明で, 牛が人の實生活, 宗教, 祭祀などの諸面で重要な役割を擔っていた。

中國でも新石器時代の半山遺跡, 仰韶遺跡で家牛の形跡が見られる。炎帝神農氏が牛頭を以って表されることは, 古代からの農業, 醫療など人の實生活への深い関わりを象徴している。中國の牛の種類は大別して, 北部中部に「黄牛」と「黒牛」, 南部平地に「水牛」, 西部高地は「犛牛(ヤク)」となる。

32. 「狗(犬)」 イヌはごく古くオオカミから家畜化された。犬は腦神經の働きで人に鋭敏に共感出来る。

新石器時代にヨーロッパ, アジア, エジプトなどで飼い馴らされていたことが, それらの地の遺跡から出た形跡で推定出来る。狩獵の助けや草食家畜の保護などの役目が優先するが, 中國では食用としても重要であった。諺に「狡兔死して走狗煮らる」(巧みに逃げ回っていた兔も狩り盡くされ, 獵犬は不要となって次に食べられてしまう)。なにやら, 現代の過酷なリストラ情況に一脈通じるようだ。

33. 「彘」(音テイ, 豚) ブタはヨーロッパでは新石器時代, 中國では四千八百年前に, イノシシから家畜化された。元々強健で成長が早く太りやすいのを, 西歐で益々改良した品種が世界中に普及している。

中國人は殊に豚肉を好む。以前は〔薬局方〕で「豚脂（肉の脂肪分）」を外用軟膏の基材としていた。

34. 「羊」ヒツジ。繊細な動物繊維「緬毛，羊毛」が採れる唯一の家畜。一萬年以上前に中央アジアの高原地で家畜化されたというが，始原動物はよく判らない。（「山羊」ヤギは羊に似るが別屬で，毛は粗い。羊より後に家畜化された。）羊を飼い養った古い記載は，西方では舊約聖書などに在り，中國では，ヒツジが性従順でよく群がる故に「羊」は「祥（さいわい，よい）」の意に使われた。

35. 「鷄」ニワトリ。南アジアに複数種類の野鷄（野生種）が分布し，その邊りで約四千年前に家畜化されたという。西歐へは古代ローマ帝國頃迄に傳わり，東アジアへも古くから中國南部～北部，朝鮮，日本へと廣まった。飼い養う目的は始め鬪鷄，次いで報時（早朝一定の時刻に鳴く）の用で，そうした特異な在り方に關連して西歐では鷄を祭祀の犠牲とし，或いは卵を祭壇に供していたのが，次第に食用とするようになった。東洋でも始めは概ね同様であったが比較的早くから食用が一般化した。

36. 「石」古い時代の「石」は普通，「藥石」即ち鑛物性生藥を意味する。《神農本草經集註》に於て，金屬及びその化合物，岩石，鑛物の類約七十種類を「玉石」として纏めて記載している。しかし今日では鑛物性生藥を實際に醫療に供することは少なく，現在〔日本薬局方〕に採用されているものは，「石膏」と「龍骨」の二品目のみ。（後者は大形哺乳類の化石化した骨で，元は動物起源）

【原文】の五品目は，「玉石」の中から選んで「五味」に對應させている。色の對比も窺われる。

37. 「玉」別名「玄眞」（道家の語）。《說文》に「石の美なるもの。五徳（仁，義，智，勇，潔）を有する。」とある。一般的には“寶物”として扱うが，中國では藥用としても重要で，碎いて水や酢に溶かして服用した。《神農本草經集註》の《別錄》文には品目名〔玉屑〕で出ていて，效用は「胃中の熱，喘息煩滿を除き，渴を止める。麻豆（麻の種子・微小粒）の如き屑とする。之を服して久しきは身を軽くし年を長らえる。」とある。玉は色々有るので，中には成分の一部が水や酢に溶け出し，内服すれば何らかの效能を示す場合が有り得るが，確率は低い。「金」と同じく心理的な好影響は有り得る。

38. 「金」別名「太眞」。貴金屬の筆頭・Goldとして，色合い，輝き，優れた可塑性，鍍

びず朽ちず…、特質は最高である。中國でも富貴、權威權力の象徴として様々に重寶した。内服薬にもなり、その際は玉と同じく微細な屑にして使った。《神農本草經集註》《別錄》文の品目名〔金屑〕・〔主治〕「精神を鎮め、骨髓を堅くし、五臓を通利し、邪毒の氣を除く。之を服すれば神仙（となる）。」である。金は水、酢、酒などの飲料には全く溶けず、反応しないから、内服しても体内に分散せず、具體的効能は殆んど無いだろう。高貴なものを攝り込んだとの氣負いが、心身に好い刺激となるかも知れない。

39. 「雄黃」 現代稱「鷄冠石」・化學的には天然の「一硫化砒素 (As_4S_4)」で、赤色～橙色または黒色の塊か粉末。《神農本草經集註》《本草經》文は「寒熱、鼠瘻、惡瘡、疽痔、死肌を（癒すを）主とし、精物、惡鬼の邪氣、百蟲の毒を殺す。五兵（五種類の兵器）に勝る。練りて之を食せば身を軽くし神仙（となる）。」、《別錄》文は「疥蟲、蠱瘡、目痛、鼻中の息肉、及び絶筋、破骨、百節中の大風、積聚、癰氣、中惡、腹痛、鬼疰を療し、諸蛇虺の毒を殺し、藜蘆の毒を解し、人面を悅澤にする。之を餌服すれば皆人腦中に飛び入り鬼神に勝ち、延年益壽、中を保ちて飢えず。」と、とても勇ましい効用を列記している。とにかくこの砒素化合物は強毒である。唐代《藥性論》は「人、之を佩ぶれば鬼神近づく能わず、山林に入れば虎狼伏し、川を渉るに毒物敢えて傷せず済むる。」と、身に着けているだけでも強い威力を發揮するようという。「正倉院」藥物の、唐渡りの「雄黃」は卵形に成形してあるので、この“携帯用”の一例らしい。（→朝比奈康彦『正倉院藥物』1955、益富壽之助『正倉院藥物を中心とする古代石藥の研究』1957他）。對比的名稱の「雌黃・二硫化砒素 (As_2S_3)」もほぼ同様の天然物である。

40. 「曾青」 現代稱「孔雀石」。天然の藍銅鑛「 $Cu(OH)_2CuCO_3$ 」は全て銅化合物特有の綠色を呈する。此處で言う「青」は綠色である。部分的に色調の濃淡が有り、一方、形状は様々で、大きい塊は小突起が放射狀に竝んで徐々に生長したもの、全體の中心が空洞になっているので「空青」と呼ぶが、淡綠と深綠の薄層が厚さ數ミリ以下で積み重なっていると、断面が見事な縞模様になり、孔雀が羽根を廣げたように美しく、この名となった。塊でなくても層模様が明瞭なものは「曾青」、層模様が明瞭でないものは形状を問わず「綠青」と呼んだ。いずれも体内に攝り入れると銅イオンが溶け出て、微量でも強い作用を起こすと思われる。「曾青」については、《神農本草經集註》《本草經》文で「〔主治〕目痛み涙出ずるを止め、風痺には關節を利し、九竅を通じ、癥の堅く積聚せるを破る。久しく服すれば輕身不老。」、《別錄》文で「肝膽を養い、寒熱を除き、白蟲を殺し、頭風にして腦中寒なるを療し、煩渴を止め、不足を補い、陰氣を盛んとす。」とあるが、「空青」や「綠青」の場合も似たような効能を記している。

41. 「赤石脂」正倉院に残る「赤石脂」が以前に研究され、「酸化第二鉄を含有し赤色を呈する白雲母源カオリン質粘土」とされた。(カオリン質・Ar アルミニウムを含む粘土) 實は《神農本草經集註》では「赤石脂」以外にも「青, 黄, 白, 黒」の各「石脂」が載っていて、總稱が「五色石脂」である。

《神農本草經集註》《本草經》文は五色一括で〔主治〕「黃疸, 洩痢, 腸澼, 膿血, 陰蝕, 下血, 赤白の邪氣, 癰腫, 疽痔, 惡瘡, 頭瘍, 疥癢。久しく服すれば髓を補い, 氣を益し, 肥健にて飢えず, 輕身延年」。《別錄》文は五色各々別記していて、「赤石脂」は〔主治〕「心氣を養い, 目を明らかにし, 精を益し, 腹痛, 洩澼, 下痢, 赤白の小便の利, 及び癰疽, 瘡痔, 女子の崩中漏下, 産難, 胞衣不出を療す。久しく服すれば髓を補い, 顔色を好くし, 智を益し, 飢えず, 輕身延年」。以上・この品目に關しては《本草經》と《別錄》は似ていて、語句が同一の箇所もある。

42. 「草」先ず, 以下【原文】で列擧している五種類の名稱を羅列してみよう;

「茯苓」, 「桂心」, 「天門冬」, 「五味子」, 「玄參」。

個々の實體については以下, 順に詳細に解説してあるが, 「茯苓」は菌類, 「桂心」は樹木。「天門冬」, 「五味子」, 「玄參」の三者は今日言うところの「草本」である。即ち, 標示項目五種の題目として掲げている「草」は, 凡そ高等植物を「樹木」, 「草本」と二大別しての「草本」の意味ではない。【原文】で前後して五種類ずつ擧げている, 「穀」, 「菓」, 「菜」, 「畜」, 「石」, の各範疇に對應する集團概念として, 或る特徴を共有する五種類の植物を選んである。その共通特徴は結論的には, いずれも典型的な「本草生薬」ということに盡きる。尙, 當小論のまとめとしての「五行との關連」で再度言及する。

43. 「茯苓」和名マツホド。 *Poria cocos* サルノコシカケ科。「松」(マツ)の根に寄生する菌類。地下の浅い處で不定形の塊「菌核」が生長する。この種類は東アジア特産。(屬名は porcus・豚, 西洋ではキノコの見付け難いものは豚に探させる。種小名は coquus・料理人, 食用には料理の腕が必要。)

《神農本草經集註》《本草經》文に〔主治〕「胸脅の逆氣, 憂恚, 驚邪, 恐悸, 心下の結痛, 寒熱, 煩滿, 欬逆, 口焦, 舌乾, 小便を利する。」。《別錄》文に「消渴を止め, 唾を好くし, 大腹の淋瀝, 膈中の痰水, 水腫の淋結, 胸膈の結閉(を療じ), 臟氣を調え, 腎邪を伐り, 陰を長じ, 氣力を益し, 神守の中を保つ。」とある。含有物質はテルペノイド, エルゴステロール。驅水, 胃腸調整, 神經鎮靜など, 上記古記載によく一致する効能があり, 漢方の要薬として安中散, 胃風湯, 桂枝茯苓丸, 逍遙散, 八味地黄丸, 苓桂甘朮丸など多くの處方に配合する。〔日本薬局方〕にも採用されている。

44. 「桂心」「桂」(本草名「牡桂」, 一般稱「肉桂」) 和名トンキンニッケイ *Cinnamomum Cassia* クスノキ科 (トンキンは現ベトナム北部。此處から中國南東部へかけての地域が「桂」の原産地である。屬名は *cinein* = 巻く—樹皮は剥がすと巻く + *amomos* = 申し分ない—最良の芳香材となるとの意味。Cassia はこの植物の古名。) 「桂心」はこの樹木の木質部分 (幹枝内部の材) である。樹皮が重要生薬「桂皮」である。《神農本草經集註》の《本草經》文は「牡桂」の〔主治〕を「上氣欬逆, 結氣, 喉の吐吸 (呼吸) を痺するもの。關節を利し, 中を補い氣を益し, …。」とし, 《別錄》文は「心痛, 脇風脇痛, 筋を溫め, 脈を通し, 煩を止め, 汗を出す。」とある。「桂皮」は *cinnamaldehyde* を主體とするフェニルアルカロイド類からなる精油を 1~3% 含有し, 獨特の濃厚な芳香を放つ。これらの成分は, 人體で毛細血管擴張を始め, 多彩な作用を及ぼして, 上記記載のように古代から強力な效能を認められ, 極めて多くの古典處方で繁用されて來た。現代でも, 食欲不振や消化不良を改善したり, 血液循環の促進, 利氣 (氣分を良くする) の目的で桂皮湯, 安中散, 桂枝茯苓丸その他, 數々の漢方處方に配合されている。〔日本藥局方〕採用品目である。原植物は樹皮以外部分にも, 含有率は下がるが同様の成分を含む。トンキンニッケイ以外にも, 同屬近縁種で, やはり *cinnamaldehyde* を含有している種類が更にあり, *C. zeylanium* Breyn セイロンニッケイはセイロンからインド南西部にかけての原産・芳香が上品で, 西方へ傳わり香味料, 菓子の香り付け, 香水などに珍重された。ベトナム一帯原産の *C. loureiri* 和名ニッケイは, 約二百三十年前に日本へ傳わり定着し, 芳香性健胃劑や香辛料として使われた。(種小名はポルトガル人研究者 Loureiro より)。中國中部南部に廣く分布する別品種 *C. Willsonii* も, 昔に日本に傳わった可能性がある。以上の各種類は含有する芳香性物質がほぼ同じであるが, 同屬内には, 全く異なる物質を含有する種類も有る。例えば *C. Camphora* L. 「樟」, 「豫樟」クスノキがそれで, その葉や材に含まれる環状モノテルペン「樟腦 Camphor」を抽出し結晶とした製品は強い防腐防蟲力を發揮する。同様效能合成物の量産が可能になる前は, この天然樟腦は日本の重要な輸出品であった。クスノキの分布は元々東アジア東部亞熱帶~暖帶, 日本では本州近畿地方以西, 及び九州, 四國の平地に限られていた。そのことは, 關東以北と近畿以西で樹木景觀の相違を齎す主因の一つであった。

45. 「天門冬」和名クサスギカズラ, アスパラガス *Asparagus lucidus* Lindley ユリ科。英名 Lucid. (屬名はこの植物の古名・*asparagos* “著しく裂けている” の意味—枝が細かく綫状に分かれて葉のように見える。種小名は *lucens* 光澤有る—葉狀枝全體に光澤。) 若い莖が多肉で食用となるが, 硬くならないように軟白 (陽に當てず) 育成することもある。ヨーロッパで紀元前から栽培されていて, 上記の古名は古代ギリシャの植物學者テオフラストスによる。中

國でも古代から知られていた。《神農本草經集註》《本草經》文に〔主治〕「諸暴風，濕偏痺。骨髓を強め，三蟲を去り，伏尸を去る。」，《別錄》文に「肺氣を保定し，寒熱を去り，肌膚を養い，氣力に益し，小便を利す。冷にして能く補して飢えず。」とある。生体内で窒素代謝に重要な意味を持つアスパラギン酸が，この植物から最初に発見された。

日本では，十八世紀後期にヨーロッパから傳來したものが食用に供されるようになり，オランダキジカクシとも呼ばれた（キジカクシは同屬近縁の大形雜草で，日本全土に自生しているが有用ではない）。

46. 「五味子」 和名チョウセンゴミシ *Schisandra chinensis* 英名 Magnolia vine (原植物)。中國の北邊～朝鮮の北部，山地～日本北部山地などに自生するモクレン科の蔓草。屬名は schizein = 裂ける + Andros 雄藥一雄藥の葯が裂開している。英名は，同じモクレン科の高木・*Magnolia* 屬（モクレンやタイザンボクなど）と，花の香りや形が似るところから付けられた。球形紅色の小果實は生食出来るが，古來，咳止めや強壯の確かな効用がある生薬でもあった。

《神農本草經集註》《本草經》文に〔主治〕「氣を益し，欬逆上氣，勞傷，羸瘦，不足を補い，陰を強め，男子の精を益する。」，《別錄》文に「五臟を養い，熱を除き，陰を生じ，肌を中する。」と有る。陶弘景が註で「今，第一に高麗に出ずる。…」と記しているから，當時から朝鮮の名産物であったらしい。

現代の分析でも，果實には抗酸化作用を持つリグナン類（固有名 gomishin）が多く含まれていることが判っていて，〔日本藥局方〕に採用されている。

47. 「玄參」 和名ゴマノハグサ *Scrophularia Buergeriana* (= *S. Oldhami*) 英名 Ningpo Figwort. 中國北部東北部～朝鮮～日本に自生するゴマノハグサ科草本。屬名は scrophula = 頸腫，瘰癧から。西歐で同屬近縁種 *S. nodosa* (nodosus = 結節) の根をそれらの病の治療に使った。種小名は十九世紀に日本の植物を採集したドイツ人 Buerger による。中國でも自生種（標記）の根を使った。《神農本草經集註》《本草經》文に〔主治〕「腹中の寒熱，積聚。女子の産乳，餘疾。腎氣を補い，人目明らかならしむ。」，《別錄》文に「激しい中風，傷寒，身熱，支滿。狂邪の忽忽として人を知らざるもの，溫瘧の洒洒たるもの，血痕にして寒血を下すもの。胸中の氣を除き，水を下し，煩渴を止め，頸下の核，癰腫，心腹の痛み，堅癥を散らし，五臟を定む。久しく服すれば虚を補い，目を明らかとし，陰を強め，精を益する。」とある。《神農本草經集註》の二系列・《本草經》文と《別錄》文を對比させて來て明らかなことは，どの品目の場合も，《本草經》文が概念的，抽象的，一般的であるのに對し，《別錄》文は即物的，具體的，個別的である。當「玄參」の兩記

載を觀ると、そうした原則がやはり見事に當て嵌まり、尙且つその上に、《別錄》文は、激しい症状の病を列擧して當品目の適應先としている。逆に言えば、當「玄參」は實に強力な治療薬とされていたことが明らかである。現代、ゴマノハグサからはケイヒ酸系の化合物が何種類も見出され、その内の或るものは動物實驗で下熱作用が認められている。ケイヒ酸は凡そ生体内で顯著な作用を示す多くの芳香族化合物が、合成される際の基礎となる物質である。

48. 「蟲」この字は《說文》に「蟲・足有るは曰く蟲，足無きは之を多と謂い，三蟲に從う。」とあり、本來、足の多い小動物を指した。従って、【原文】で列擧している以下の動物五種の内、「𧈧網」，「伊威」の二種類は字の原義通りである。同時に《集韻》に「蟲，李陽水曰く，裸，毛，羽，鱗，介，の總稱。」とあるように、凡そ動物の總稱でもあった。足の有無などは全く超越して、まさに“生き死にする動くもの”の全てである。以下五種に「蜚零」，「蜥蜴」，「蚺蛇」が入っているのは、そうした中國の「蟲」概念を如實に示している。なお根底的には、全て《神農本草經集註》に各々獨立品目として採られている重要生薬である。

49. 「蜚零」和名ツチバチ（土蜂）《神農本草經集註》《本草經》文に「土蜂子・癰腫を主とする。一名蜚零。」，《別錄》文は「武都（現 甘肅省南端）山谷に生ずる。」八世紀前半陳藏器《本草拾遺》に「…其の穴居の者は土蜂と名付ける。蜂の最大のもの。人を螫せば死に至らしむ。…」とある。成蟲は全身黒く、金毛で覆われ、乳白色、黄色、橙色、赤色などの斑紋がある。幼蟲は食用にもなる。

50. 「𧈧網」別名「馬𧈧」，「馬陸」和名ヤスデ。ごくありふれた小さな節足動物で、頭部とそれに續く多數の環節からなり、一節に二對ずつ小歩脚が付いているので、倍脚類とも呼ばれる。觸れられると丸くなる。石の下や濕った物陰に潜んでおり、腐植質を食べている。《神農本草經集註》《本草經》文に〔主治〕「腹中の大なる堅癥，積聚を破り，息肉，惡瘡，白禿。一名百足。」，《別錄》文に「寒熱，痞結，脇下の滿を療ずる。一名馬軸。」とある。

51. 「蚺蛇」和名ニシキヘビ（錦蛇）。嚴密にはアミメニシキヘビという一参考文献1-10/vol. 10-p. 454)。宋代・陸佃撰《埤雅》が「蚺蛇，…身に斑文有り，故に錦縵を暗（かく）すが如く，…」と記しているように、體表の模様が特徴である。《本草綱目》で「南蛇」としたように、東南アジア～オーストラリア～インド～アフリカの熱帯域に二十種ほど棲息して

いる。本草書にはこの蛇は鹿や馬まで呑み込むかのような、大きさを言う記事類が紹介されているが、それほど巨大なものばかりではない。この蛇の肉は薬の意味合いも兼ねて食され、膽（きも）は早くから妙薬として珍重されて来た。《神農本草經集註》《別錄》文に「蚺蛇膽・心腹の腫痛，下部の腫瘡，目の腫痛を主とする。」とある。

52. 「伊威」別名「鼠婦（鼠負）」、「濕生蟲」和名ワラジムシ。家屋床下，ごみの下など，何處にでも居る小さな節足動物。體形は別記のヤステより丸い。步脚を多數付けているが一節一對で，等脚類と呼ばれる。觸れると丸く球状になるものはごく近縁のダンゴムシである。古代には薬用に使っていて《神農本草經集註》《本草經》文に「鼠婦」を「氣癘，小便を得ざる，婦人月閉，血瘕，癘疾，寒熱を主とし，水道を利する。一名負蟠，一名蚺威。」，《別錄》文に「一名蜚蟪，魏郡平谷及人家に生じ…」とある。ドイツの民間で利尿劑などに使うという。

53. 「蜥蜴」別名「石龍子」和名トカゲ。野外に多い小形爬蟲類で，《神農本草經集註》の《本草經》文に「石龍子」〔主治〕を「五癘，邪の結氣，石淋を破り，血を下し，小便の水道を利する。一名蜥蜴。」，《別錄》文に「一名山龍子，一名守宮，一名石蜴。…」とある。なお「守宮」の名稱は後には主に別種ヤモリを指すようになった。トカゲとヤモリは一見似ているが，前者は人里に棲んでいても地面に付いて生活しているのに對し，後者は「守宮」以外に「壁宮」，「壁虎」の名も有るように，常に建物の壁や石垣の乾いた面に張り付くなど，地面から離れていて，両者は生態的にも全く異なる存在である。

【原文】iv. 總而言之，五穀則芒以配木，散以配火，房以配金，莢以配水，萃以配土。芒大小麥之屬，散麩黍之屬，房胡麻之屬，莢大小豆之屬，萃稷粟之屬，芒者取其鋒纖長。象木生出地，如鋒芒也。散舒也。象火氣溫暖，物舒散也。房方也。象金裁割，體方正也。莢狹也。象水流長而狹也。萃聚也。象萬物皆聚於土，乃爲用也。五菓則子以配木，核以配火，皮以配金，殼以配水，房以配土。子梨柰之屬，核桃李之屬，皮柑橘之屬，殼胡桃栗之屬，房蒲陶之屬，子取其含潤，如木生光潤，子實茂盛。（以下略）

（參考文獻1-13 p. 278では，以上の一文を下表に纏めている；）

五行	木	火	土	金	水
五穀	芒	散	萃	房	莢
大小麥	麩黍	稷粟	胡麻	大小豆	
五菓	子	核	房	皮	殼
梨柰	桃李	蒲陶	柑橘	胡桃，栗	

54. 「胡麻」和名ゴマ *Sesamum indicum* L. 英名 Sesame ゴマ科。原種が熱帯アフリカで作物化され、太古の昔にインドへ傳わり、インドで栽培されていたものが舊大陸の東西に廣まった。(屬名は *sessem* = このもののアラビア古名から。) 西域經由で中國へ紀元前に傳わり、更に七世紀までに日本へ達した。ただ、長年月掛けた傳播の間に、各地で品種は多少變化した。種子に充ちている油は食用にも薬用にも適し、燈用に最良でもあった。また、幼苗を蔬菜として食することもあった。歐米では油をマーガリンなどに加工して多量に消費して來た。《神農本草經集註》《本草經》文は〔主治〕を「傷中虛羸，五内を補い，氣力に益し，肌肉を長じ，髓腦を填める。…一名巨勝，菜名青囊。」，《別錄》文は「筋骨を堅くし，金瘡を療し，痛を止め，傷寒溫瘧にして大吐後の虚熱羸困に及ぶ。耳目を明とし，飢渴に耐えて延年。以って油を作れば微寒にして，大腸を利し，胞衣落ちざる（を療ずる）。生なる者は瘡腫を摩し，禿なるに髮を生ずる」。現代の分析では、ゴマ油に含まれるフェニルプロパノイド二分子結合體の一種 Sesamin が、油の酸化防止に役立っているという。油自身が自分の品質劣化を防いでいるのである。

55. 「柑橘」今日では、「柑橘類」としていわゆるミカン類・即ち外皮は黄色～橙黄色で無数の油脂腺が表面に見え、この類獨特の芳香を放ち、内部は放射状に竝んだ果囊（小袋）の中に、酸は強いが甘い液汁が充満した毛狀體が詰まっている大粒の果實類、及び、小粒で内部の様子もやや異なるが風味は同じキンカン類も加えての總稱（分類上は全てミカン科）ということで、たちまち五指に餘る種類を想定するが、中國で當《五行大義》の時代も、「柑橘」の數種は知られていた。ミカン類は、かの「レイシ」とは異なり、採果後の日持ちは良い方だから、帝のお聲懸かり超特急便でなくとも、生果をかなり遠方まで送れた。しかし基本的には、柑橘類各種の原産地、及び栽培可能域は低緯度の範圍にほぼ限られ、北方では珍果であった。【原文】にいう「柑橘」として、字の通りの「柑」と「橘」、及びそれらの種類に關連が深い他の種類を擧げると：

「橘」和名アマダイダイ *Citris chinensis* 英名 Sweet-orange (屬名は西歐の風土に適應した品種「レモン」の古名)。インド～ミャンマー邊りの原産で、ヨーロッパへは十五世紀に入り、地中海沿岸地で急速に栽培が廣まり、アメリカへも再々傳えられて、現代歐米で食するミカンは主にこの系統である。

夏雨型氣候には合わず、日本では栽培が難しい。日本のタチバナは別種で、國內暖地に自生していた。

「柚」古代中國でこの名稱のものは「ユズ *C. Junos*」であった。中國原産で日本へ古く傳わり、日本では「柚」の字を今も充てている。ユズ、別名ユノス、元は「柚の酢」で、酸味を調理に利用して來た。

中國で「柚」は後に「ザボン *C. maxima* (= *C. grandis*, 別の漢名・朱欒, 欒抛) (東南アジア原産) のこととなった。種小名は學名二通り共に“果實が最大”の意味・ザボンはミカン類の中で最も大きい。

《神農本草經集註》では橘と柚を一つにしている、《本草經》文は「橘柚」〔〔主治〕胸中痠熱, 逆氣, 水穀を利し, 久しく服すれば臭を去り, 氣を下し, 神に通ずる。〕, 《別錄》文は「氣を下し, 嘔欬を止め, 膀胱の留熱, 停水, 五淋, を除き, 小便を利し, 脾の消穀能わず, 氣の胸中を衝き, 吐逆霍亂するを主とし, 洩を止め, 寸白を去る。」とある。《本草經》文は更に「一名橘皮。」とあり, 續く陶弘景の註が「皮」について述べて「…陳なる(古いもの)を良しとする。…」と言及している。果實の皮を乾燥させたものが生薬「陳皮」である。現在日本では, 日本特産のウンシュウミカン(冬季豊富に出回る, 普通のミカン)のそれを「陳皮」とし, [日本薬局方]に採用している。成分は主に, テルペノイドの一種 limonene を含んだ精油及びフラボノイド類で, limonene はミカン類の皮の苦味の元となるが, 本来は昆蟲の食害を防止するための生體成分である。「陳皮」は粉末を芳香性健胃薬とし, 漢方で健胃, 鎮咳, 去痰, 防吐を目標として處方に加える。「橘, 柚」によく似た「橙」ダイダイ *C. aurantium* (aureus=黄金色, インド原産) 及びその變種類の成熟果皮「橙皮」も同様の成分を含み, 芳香苦味健胃薬とし, また, 苦味チンキ(トウヒチンキ)として [日本薬局方]に採用されている。(“チンキ”は, 生薬類をアルコールと水の混合液に浸して成分を溶出させたもの。吸収が早く, 即効性が期待出来る。) また別に, ダイダイの未熟果實をそのまま或いは半分に横切りし, 乾燥させたものは生薬「枳實」である。成分はやはり limonene が主で, 他にも多種類の活性物質を含んでいて, 漢方で, 胸腹部の膨満感を去る目的で處方に配合して使っている。日本では特産のナツミカン *C. natsudaidai* を全く同様に「枳實」に仕立てることもあり, 「枳實」も [日本薬局方] 指定品である。(中國で, 植物名としての「枳」は, 同じミカン属ではあるが上記各種類とは別種であり, また, 今も通用する名稱「枸橘」(和名カラタチ) はミカン科の内だが別属の種類である。)

「柑」和名クネンボ *C. nobilis* 英名 King orange (種小名は“氣品有る”)。インドシナ原産。果實は直径數センチ程度。甘味強く美味。耐寒性が無く, 中國では栽培可能地は南部に限られていて, 中部以北では馴染みが薄かったのであろう, 《證類本草》に收容された《神農本草經集註》には記載が無く, 同じく《證類本草》に合併されている八世紀唐代初期・陳藏器撰《本草拾遺》の文として「橘柚」の解説に併記して「…その類に朱柑, 乳柑, 黄柑, 石柑, 沙柑が有る。」とあるのが, 本草書での最初の記載である。同じ文でその直後に「橘の類は朱橘, 乳橘, 塌橘, 山橘がある。」と, 記載が続いているから, 「柑」と「橘」が確かに區別されていたことは明らかで, 合わせて類縁がごく近い有用果實の一群との理解が確立していて, それが「柑橘」の概念であった。「柑」クネンボは, 日本で

も本州南部で栽培可能であるが湿潤気候には不向きで、また、外皮が手で剥き難い、種子が多い、などの難点も有ったか、普及しなかった。アメリカでは品種改良の上、カリフォルニアやフロリダで広く栽培している。

東アジアのミカン属 (*G. Citrus*) には更に、「枸櫞 (香櫞, 佛手柑)」があり、現代も出回るが、比較的後世のもので詳細は略する。また、別属の「金橘」和名キンカンは、《漢書》に「盧橘」として出ており、宋代・韓彦直撰《橘録》には解説もあるが、何分、果實がやや小粒に過ぎ、しかも食用に適するのは果皮部分のみ。成分も本格的な生薬になるほどのものは無く、古代本草書には記載が無い。

56. 「胡桃」和名テウチクルミ *Juglans regia* L. var. *orientis* クルミ科。原産地はヨーロッパ南東部～アジア西部～イランの地。(属名 *juvis*=ジュピターのような, *glans*=堅果, 種小名 *regius*=王の・全てこの果實への賛辭。) 後に Linne が命名した *J. regia* が基本種で、西へは紀元前の古代ギリシャ、ローマを経て、十五世紀までにイギリスを含めヨーロッパ全土に広まり、東へは西域を経て四世紀には中国へ伝わっていた。張騫が西域から持ち帰った種類の一つというが、疑問視の意見もある。傳播した先の各地にはそれぞれ自生種があり、交配し淘汰されて新たな固有品種が分出した。東アジアではそうして出来た標記の變種 var. *orientis* テウチグルミが全體に優勢である。いずれにせよ、硬い殻の中の肥厚子葉を食する。この部分は多量の脂肪(約50%)及び蛋白質を含み、絶好の食料となるが、栄養価が高いのでそれなりに食治の効果も期待出来て、《證類本草》に引く古い記載でも「之を食すれば人をして肥え健やかに、肌を潤し、髪を黒くせしむる。…多く食せば小便を利し、…五痔を去り、…」などと、效能を列記している。食するだけでなく、肥厚子葉を絞って得られる油や、植物體の皮の浸出液、殻を焼いた炭なども内服或いは外用で薬としていた。外用の目的は髪を密にする黒くする、など。

—以下、《黃帝內經太素》より—

57. 「蘭」特定植物の呼稱として古くから使われて来た語で、例えば《太素》卷三十〔脾痺消渴〕に「黃帝(問いて)曰く、病に口甘なるもの有り、名は何爲るや、何以って之を得るや。岐伯(答えて)曰く、此れ五氣の溢也。名付けて脾痺と云う。…甘なるものは人をして満たせしめ、故にその氣は上溢して轉じ、轉じて消渴となる。之を治すに蘭を以てし、蘭は陳氣を除く。」とある。この場合、「蘭」には次(58.「蘭草」)の「フジバカマ」を充てるのが適當であるが、中世(唐代)以降、「蘭」名で指す植物は變遷しているので、以下・二項目に分けて詳解する；

58. 「蘭草」和名フジバカマ *Eupatorium Japonicum* (= *E. Fortunei*・英國東洋植物研究者 Fortune から。) 別名「水香」, 「蘭澤香」, 「香水蘭」, 「千金花」。現中國名「山蘭」。キク科。屬名は當屬を解毒用に使った B. C. 1世紀の小アジアの國王 Eupator から。日本では「秋の七草」の一つ。乾いた葉莖は芳香を發するので、古來廣く、それを身に付けたり衣類の函に入れたりしていた。*Fortunei* 種だけでなく *Eupatorium* 屬の近縁種(「澤蘭」こと *E. chinense* ヒヨドリバナ或いは *E. lindleyanum* サワヒヨドリなど)は、ヨーロッパから日本に至る廣範圍で廣く自生或いは古くから栽培され、いずれもよく似ていて、芳香も多かれ少なかれ共通しており、東西で何れも混同して使って來た。中國でも《證類本草》に收録されている六世紀・陶弘景から十二世紀・宋代《本草圖經》に至る當植物の記載には *Eupatorium* 屬内の各種類の混同が觀られる。當屬植物の藥效性の記載は明確で、《神農本草經集註》の《本草經》文に〔主治〕「水道を利し、蠱毒を殺し、不祥を避ける。…」、《別錄》文に「胸中の痰癖を除く。」とあるように、古くから藥用にも重用されて、例えば《太素》で上記・卷三十〔脾痺消渴〕治療用以外にも、〔血枯〕の病の條中に「黃帝曰く、これを治するは奈何、何術を以ってするや。岐伯(答えて)曰く、烏賊骨四、蘭茹一、二物合せしむること三合(充分混合せよの意)、雀卵を以って小豆大の丸とし、飯後に五丸、鮑魚汁を以って(服)すれば、胸中及び傷肝を利する」とある。文中の「蘭茹」は當 *Eupatorium* 屬植物の新葉を指す。(烏賊骨、雀卵、鮑魚汁は別に解説)

中國では昔は「蘭」字をこの植物に充てていたが、唐代頃から「シンビジウム」も指すように變わった。

59. 「草蘭」Genus *Cymbidium* シュンラン屬(ラン科)の、*C. virescens* 「春蘭」和名シュンラン(virescent 淡綠色・花の色をいう)や *C. Kanran* カンランなどの古い總稱。同屬内で別一種に「建蘭」*C. ensifolium* 和名スルガランがある(種小名は ensifolius 劍形・葉の形を指す)。

《證類本草》に附刻された西曆十二世紀宋代・寇宗奭《本草衍義》が、「蘭草」の内で別に、この屬の特徴を明確に記述しているから、その頃までに「蘭」字で「シンビジウム」を意識するようになっていたことは確かである。しかし十六世紀明代末・李時珍《本草綱目》は、その植物呼稱の變化を認めず、「シンビジウム」を別品目として提示しなかった。十八世紀後半清代末・趙學敏《本草綱目拾遺》が「シンビジウム」を「建蘭花」、及び「春蘭」として二品目を獨立に掲げ、各植物體について詳述し、生藥としての效用も、十七世紀後半 明代末・郭佩蘭による藥理の專書《本草匯》の記載からの轉記を含めて詳しい。效用は植物體の各部分毎、また花色別に分けて記述されているが、極略記すると；花・黒花一瞥目(盲目)を治する。紅花一氣の臭濁(を解消する、藥には入れない)。黃花一

瀉を止める。青花—氣分をよくする。素心（純白花）一葉に入れるに最良。

葉・《本草匯》曰く「胃を開き、肺を清め、痰を消し、能く積久陳鬱の結氣を散らす。」
根（「土續斷」と名付ける）・跌打（打撲）を治し、血を和する。

「春蘭」根・瘋（頭痛、狂氣）にして狗の咬みたる（狂犬病）、行篋檢祕（旅行時の便秘）を治す。

60. 「半夏」和名カラスビシャク、ハンゲ *Pinellia ternata* サトイモ科。屬名は十六世紀のイタリア人植物學者 Pinelli から、種小名の由來は ternatus 三出・葉が三分岐していること。徑 1 cm ほどの小球根から 1～2 枚の葉と細い花莖が出る。單獨では目立たないが、夏に多數の微小果實が出来て廣く分散し、隨時、小さな「むかご」を作って無性生殖でも増える。あらゆる耕作地に入り込み、一旦入ると除き難い。古來、田畑の雜草として東アジア全域で最もありふれた存在である。中國では、古くから球根を藥とした。《神農本草經集註》《本草經》文は「傷寒、寒熱、心下、堅下の氣、喉咽の腫痛、頭眩、脇脹、欬逆、腸鳴を主とし、汗を止む。」、《別錄》文は「心腹、胸滿、痰熱滿結、欬嗽上氣、心下の急痛堅痞、時氣嘔逆。癰腫墜胎を消し、痿黃を療す。面目を悅澤とする。…」とある。

61. 「烏賊骨」・「烏賊」和名マイカ (*Sepia*)。これは「軟體動物」の一種で、よく發達した兩眼が付いている頭部から足が出ており、同様のタコと共に「頭足類」と分類されている。所謂「貝類」から出て進化し、活發に動き生活するに至り、身を覆っていた貝殻は退化消失したが、烏賊（イカ）類では胴部分内に長紡錘形骨狀の薄板で殘存していて、それがこの「烏賊骨（俗稱・海螵蛸）」である。古代ヨーロッパでも、「烏賊骨」は藥用に使われた。成分は炭酸カルシウム (CaCO_3) などのカルシウム化合物で、人が攝取すると一部は體液に溶け込み、イオン調整などの働きを示す。《神農本草經集註》《本草經》文に「烏賊骨・女子の漏下赤白、經汁血、閉陰、蝕腫痛、寒熱、癥瘕、無子を主とする。」、《別錄》文に「驚氣入腹して腹痛臍と陰中を環るもの、…人をして子有らしめ、又、瘡の多膿にして燥かざる（を治す。）」とある。當品目が加わった《太素》の〔血枯を治する處方〕を
58. 「蘭草」項目で引用した。

「骨」以外の效用も有り、烏賊（イカ）が危機に吐く「烏賊墨」が“*Sepia*”で、主成分は黑色色素メラニン・昔は藥用に使われた。色素は往々にして好き藥となる。この「墨」は繪具ともなって來た。

62. 「雀卵」スズメは熱帯と極地以外、ユーラシアのほぼ全域に居るが、大陸では普通、

野外の自然内に棲むのに對し、日本では人家周邊で生活している。本草の古記載は《神農本草經集註》の《別錄》文に「雀卵…氣を下し、男子陰痿不起は之を強め、熱して精多く子有らしめる。」とある。當品目を加えた、《太素》の〔血枯を治す處方〕は58.「蘭草」項目で引用した。

63. 「鮑魚汁」・「鮑魚」は中國では特定の魚種を指さず、「開いて鹽漬け、鹽引きした魚」を意味する。《説文》に「鮑、鮑魚也。」〔段註・鮑、飯傷溼也、故鹽魚溼者爲鮑魚。〕とあるが、要するに腐飯と同じ惡臭を發する場合は、鹽の效きめが悪く腐敗しているのである。本草古記載は《神農本草經集註》の《別錄》文として藥效を「墜墮腿蹶（墜落打撲轉倒などして立てない狀況）、腕折（足の萎えや骨折）、瘀血、血痺四肢に在りて散ぜざる、女子崩中にして血止まらざるを主とする。…」としている。

なお、藥用に使う場合の「鮑魚」の選び方は、陶弘景が自註で詳しく指示していて、その要點は「所謂〔鮑魚〕は之れその臭を言うを避くる也。…藥に作るはまさに鹽して臭少なき者を用いるべし。…今は此れ、鮑魚はすなわち是れ鱸魚にして長尺許、完に合して淡き之を乾し、亦藥に入れる。而して全て臭氣無し。…」と述べている。「鱸魚」は和名「コノシロ」、東アジア一帯の近海で豊富に採れる美味な白身魚である。（小振りのものは「コハダ」と稱し、江戸前握り鮓の定番。）これなら、上手に乾かせば腐臭の無い干物に仕上げることが出来るだろう。陶弘景は當品を實際に觀て記載したようである。

俗に「鮑」を淺海底に棲む軟體動物・腹足類「アワビ」に充てたりするが誤りで、中國本草書で「アワビ」は「石決明」であり、《神農本草經集註》の昔から《別錄》品目として収録されている。平たい皿のような貝殻が名稱の通り目病の妙藥となり、重寶されて來た。勿論、肉質部も珍味として食された。

日本でも、魚でないのに「魚」字で指すのはおかしいと、アワビには國字「鮑」を充て直した。

「腹足類」は俗稱「巻き貝」・貝殻が渦を巻いて形成されるのが特徴である。アワビの貝殻でも、皿のように見えて實は押し延べた渦模様が残っている。「貝類」には別グループ「斧足類」がある。對稱形の貝殻二枚が蝶番で開閉する、俗稱「二枚貝」・少し開いた殻の隙間から「古代の斧」形の足を出す、お馴染みの生物である。これら二類に前述「61. 頭足類」を加えた三者が「軟體動物門」を構成する。

64. 「生鐵落」新しい（錆びていない）鐵屑を浸してあつた液を使う。《太素》では、卷三十〔陽厥（心の病）〕について、「（黃帝）問いて曰く、之を治するは奈何。（岐伯）答えて曰く、…生鐵落を以て飲と爲せば、それ長氣を生じ、椎鐵自ずと落して氣疾を下す。」と

あり、一方、本草書の古記載は、《神農本草經集註》《本草經》文は「鐵落・風熱、惡瘡、瘍疽、瘡痂、疥氣の皮膚中に在るを主（治）とする。」、《別錄》文は「鐵落・胸膈中の熱氣、食の下らざるを除き、煩を止め、黒子を去る。一名鐵液。」、及び「生鐵・下部及び脫肛を癒すを主とする。」である。《太素》が全く観念的であるのに對し、《神農本草經集註》では《本草經》及び《別錄》雙方が、具體的效能の主張に徹している。

—以下、《醫心方》及び關連參照古文献より—

65. 「細辛」ウマノスズクサ科 *Asarum* カンアオイ屬の數種（屬名は *Asarum* 毛氈一葉には柄が無く、地面に密着して生え擴がり、毛氈を敷いたようだからと言うが、異説も有る）・山地や林下の日陰濕地に自生する宿根性小草本。中國に *A. mandshuricum* ケイリンサイシン（種小名は東北地域の舊稱）、日本に *A. Sieboldi* ウ斯巴サイシン（〔日本藥局方〕登録品）などの種類がそれぞれ分布している。生薬としては、根莖と根を採り、乾かして生薬「細辛」とする。含まれている芳香性精油（methyleugenol 他）が鎮痛、鎮痙、去痰などに有効と認められている。《神農本草經集註》《本草經》文に「効逆、頭痛、腦動、百節拘攣、風濕の痺痛で死肌なるを主とし、久しく服すれば目を明とし、九竅を利し、身を軽くし、年を長らう。」、《別錄》文には「中を溫め、氣を下し、痰を破り、水道を利し、胸中を開く。喉痺、鼈（鼻詰り）、鼻の風痙、癩疾、乳を結し汗出せず血行かざる（を癒す）。五臓を安んじ、肝膽を益し、精氣を通じる。」とある。

なお、徳川家の「葵紋」は近縁種 *A. caulescense* フタバアオイ（種小名は *caulescens* = 有莖の・當種類は葉に柄が付いている）の葉を圖案化したものである。葉が地面から高く擴がる點が好まれたか。

66. 「蜀椒」ミカン科 *Xanthoxylum* 屬（*xanthos* = 黄色の、*xylon* = 材—この類は幹の内部が黄色い）の數種である。サンショウ類はアジア温暖帯に廣く分布し栽培されて來た落葉性低木で、それぞれの地域の品種系統があり、中國全域から朝鮮にかけて廣く分布している *X. simulans* トウザンショウ、カホクサンショウ・現中國名「花椒」の種小名も、*similis* = 類似の・すなわち「この植物は品種系統が幾つも分かれているが皆似ている」との意味である。中國では昔から四川地域の名産品で、その地域を意味する形容詞を付けて「蜀椒」、**「川椒」**、**「巴椒」** などと呼んで來た。比較的近年、中國で**「秦椒」** と呼んで來たものは別種 *X. Bungeanum* とする見解も出た。（種小名は十九世紀ロシア人研究者 Bunge から）日本には古來、別種の *X. piperitum* サンショウが自生し、葉や果實などが香辛料的な食品として様々に利用され、親しまれて來た。當種は現〔日本藥局方〕に登録されている重要

生薬でもある。種小名は Piper = コショウ・香りが類似しているから。サンショウ類は一般に、生薬としては熟して裂開した果皮を使う。芳香性精油 (limonene など) や辛味成分 (sannshool など) が独特の風味と薬効 (健胃, 活氣) をもたらす。《神農本草經集註》《本草經》文は「邪氣, 欬逆, 中を温め骨節, 皮膚, 死肌, 寒濕, 痺痛, 下氣を逐う。久しく之を服すれば頭白からず輕身増年。』, 《別錄》文は「六腑の寒冷, 傷寒, 温瘡, 大風, 汗出でず, 身腹溜飲宿食, 腸避下痢, 洩精, 女子字乳の餘疾, …鬼疾蠱毒を散らし蟲魚の毒を殺す。腠理を開き血脈を通じ, 齒髮を堅くし關節を調え寒暑に耐える。」とある。

67. 「續斷 (續斷)」 マツムシソウ科 *Dipsacus japonicus* 和名ナベナ (屬名は dipsa = 渴き。當屬植物は葉の付け根が重なって杯状となり水を溜めていて, 渴時に利用出来るから)。東アジアの山地に自生する大型越年生草本。當種類は, 現代はあまり使われないが, 中國中南部内陸からヒマラヤにかけて分布する近縁種 *D. asper* トウナベナ「川續斷」は今も栽培され, 補氣強壯等の効用で使われている (種小名は asper = 粗面の一莖などがざらざらしている)。《神農本草經集註》《本草經》文に「傷寒, 不足を補い, 金瘡 (刃物傷), 癰傷, 折跌 (躓いて骨折), 筋骨を續ぎ, 婦人の乳難。久しく服すれば氣力を益する。』, 《別錄》文に「崩中, 漏血, 金瘡の血が内漏れするもの。痛を止め, 肌肉を生じ, 腕傷 (もがき傷) の惡血, 腰痛, 關節の緩急に及ぶ。」とある。

68. 「烏頭」 キンポウゲ科 *Aconitum* 屬 (トリカブト類) の各種。北半球に廣く分布し古來, 強毒植物として知られる。地域毎に多くの品種系統に分かれているが, *A. carmichaelii* 種が一應, 普邊的である。(屬名は地名からというが不確實。種小名は元スコットランド軍人で植物収集家 Carmichael から)。この植物は毒性が強く, 状態や處理方法によってそれが様々に異なるにもかかわらず, 人類は叡智を發揮して, 古來, その塊根に含有する猛毒アルカロイド aconitine を減毒處理し, 薬として活用して來た。中國では昔から, 根の古さ大きさの状況により, 天雄, 附子, 側子と呼び分け, 使い分けて來た。

《神農本草經集註》《本草經》文は「〔主治〕中風惡風, 洗洗たる出汗。寒の濕痺, 欬逆, 上氣を除き, 積聚せる寒熱を破る。その汁は之を煎じて射罔と名付け, 禽獸を殺す (例えば, アイヌの人達は熊を狩る際に用いた)。一名奚毒, 一名卽子, 一名烏喙。』, 《別錄》文は「大毒有り。風濕, 丈夫の腎濕陰囊痒, 寒熱で歷節掣引して腰痛み行歩不能, 癰腫膿結, 又墮胎を主とする。」とある。

69. 「皂莢」 マメ科 *Gleditsia sinensis* トウサイカチ (屬名は十八世紀のドイツ人研究者 Gleditsch から。和名は「唐西海子」が訛ったもの)。この種は中國固有で原野の水邊に多い。

同属の近縁種が日本に自生。幹枝に大きく鋭い刺が多数付いている。果實（殊に莢の部分）は強發泡性の saponin を含み、昔は洗濯に使った。この成分は溶血作用などが有り、人體に有毒であるが、古來、修治（減毒）して利尿、去痰劑とした。《神農本草經集註》《本草經》文に「風痺、死肌、邪氣風頭で涙出るを主とし、九竅を利し、精物を殺す。」、《別錄》文に「腹の脹滿を療じ、穀を消し、欬嗽囊結、婦人の胞落ちざるを除く。目を明とし、精を益す。」とある。

70. 「石南」バラ科 *Photinia serrulata* オオカナメモチ。中國東南部、及び沖縄～臺灣～フィリピンに分布する常緑小高木。同属の近縁種 *P. glabra* カナメモチは日本の温暖地に自生（生垣などの植栽が多い）。属名は *photeinos* = 輝く・新葉が紅く照り輝くから（植栽が好まれる理由となる）。種小名・中國種は *serrulatus* = 鋸齒が細かい（葉の縁のギザギザ）、日本種は *glaber* = 無毛一枝葉が全く無毛である。

中國では葉を茶葉のように煎汁を飲み、強壯藥とした。《神農本草經集註》《本草經》文に「腎氣、内傷、陰萎を養い、筋骨皮毛を利する。實（果實）は蠱毒を殺し、積聚を破り、風痺を逐う。」、《別錄》文に「脚弱、五臓の邪氣を療し、熱を除く。…」とある。

▲ツツジ科の「石南」（和名シャクナゲ・これは有毒植物）と漢字名が同じで、混同する恐れが有るが、バラ科のものとは幹枝、葉、花、果實種子の様子がそれぞれ異なるので、區別は付け易い。

71. 「厚朴」モクレン科 *Magnolia officinalis* 和名コウボク。中國中部南部～西部に廣く分布する落葉高木。日本では同属の近縁種 *M. ovata* ホウノキが自生。純白で大振りの花を開く。近代以降、アメリカ大陸原産の *M. glandiflora* 和名タイザンボクが公園、學校などに植えられ、更に大きな花を付けて目立っている。属名は十八世紀フランス人研究者 *Magnol* から、種小名 *officinalis* = 薬用、*ovatus* = 卵圓形・葉の形から。「厚朴」は薬用には樹皮を使う。Eudesmol, Magnolol 等、含有成分多く、芳香健胃、胃腸系統の鎮痛、鎮痙、利尿、去痰、等の效用あり、〔日本薬局方〕にも登録されている。《神農本草經集註》《本草經》文に「中風、傷寒、頭痛、寒熱、驚悸、氣血痺、死肌を主とし、三蟲を去る。」、《別錄》文に「中を溫め、氣を益し、痰を消し、氣を下し、霍亂及び腹痛脹滿、胃中の冷逆、胸中嘔して止まらざる、洩痢淋露を療し、驚を除き、留熱の心煩滿を去り、腸胃を厚くする。一名厚皮、一名赤朴。その樹は榛と名付け、その子は逐折と名付く。鼠瘻を療し、目を明とし、氣を益する。」とある。

72. 「苧草」〔拾遺〕イネ科 *Glyceria acutiflora* ムツオレグサ、ミノゴメ。水田に多い多年

草。《證類本草》に附刻された八世紀・唐代の陳藏器《本草衍義》には、「苳米，味甘寒無毒。腸胃を利し，氣力に益するを主とし，久しく食せば飢えず。熱を去り人に益して飯と爲す可し。水田中，苗子は小麥に似て而して小。四月熟す。爾雅云うに皇，守田。燕麥に似て食す可く，一名守氣也。」とある。イネ科の雑草で水田に多いものは何種類も在り，こうした限定的な記載だけでは特定種に定め難い。

73. 「白朮」キク科 *Atractylodes ovata* 和名オオバナオケラ。中國中部原産。日當りよく乾燥氣味の地に生える多年草。屬名は *Atracton* = 紡錘・根莖が結節して紡錘形になっているのを言う。(種小名は卵圓形-71.「厚朴」參照) 昔から新芽を食用とし，根は重要生薬「ビャクジュツ」である。根にテルペノイドの一種・*Atractilon* を含む芳香性精油成分が在り，漢方處方に配合されて健胃消化，止瀉整腸，益氣，等の藥效を示す。中國から朝鮮半島にかけて自生している同屬近縁種の「蒼朮」*A. chinensis* 和名ホソバナオケラの根も，ほぼ同様の成分を含み，「ソウジュツ」として同様に使われて來た。日本では徳川期以降，輸入或いは栽培していて，同屬日本自生種 *A. japonica* オケラも同様に使い，正月の「屠蘇散」にも加えられている。「白朮」，「蒼朮」共に〔日本藥局方〕登録品である。本草書の古記載では「朮」として一本化されていた。《神農本草經集註》《本草經》文に「風寒濕痺，死肌，瘡(引きつれ)，疽(かさ)を主とし，汗を止め，熱を除き，食を消す。煎に作りて餌すれば輕身延年，飢えず。一名山薊。】

《別錄》文に「大風身面に在りて風眩頭痛し目涙出ざるを主とし，痰水を消し，皮間の風水結腫するを逐う。心下急滿及び霍亂吐下の止まらざるを除き，腰臍間血を利し，津液を益し穀を消し食を嗜む。一名山薑，一名山連，…」とある。

74. 「黃耆」マメ科 *Astragalus* 屬の二種類で，中國東北，北部，西北，モンゴル，朝鮮北部，北海道など，溫帶の冷涼乾燥地で育つ宿根性草本。古代から生薬として使って來た種類は，中國西北部原産の *A. membranaceus* 和名タイツリオウギ，キバナオウギ。現代は *A. mongholicus* モウコオウギも同様に使う。屬名は *astragalos* = 結節有る骨一根莖の形から，種小名は *membranacea* = 膜質の一膜質の莖が膨らんでいる。成分は *saponin* 類以外未詳ではあるが，古來重要生薬の一つ。現代も保健強壯の漢方處方に配合し，〔日本藥局方〕登録品である。《神農本草經集註》《本草經》文に「癰疽，久敗の瘡の排膿，痛を止め，大風癰疾，五痔鼠瘻，虚を補し，小兒の百病を主とする。一名戴糝。】，《別錄》文に「婦人の子藏風邪氣，五臟間の惡血。丈夫の虚損勞羸瘦を補し，渴，腹痛洩痢を止める。氣を益し，陰氣を利し，白水を生ずる者を冷補する。その莖葉は渴及び筋攣癰腫疽瘡を療す。一名樞糝。」とある。

75. 「當歸」セリ科の宿根性草本 *Angelica sinensis* 和名カラトウキ。中國に廣く分布。朝鮮では同屬近縁種が自生。日本にも同屬近縁種 *A. acutiloba* トウキが自生し、同じ生薬として使われ、殊に大和に産するものは最佳品とされた。北海道には同屬で別の近縁種を産する。屬名は *angelos* = 天使—顯着な薬效を天使の働きに例えている。種小名 *acutilobus* = 尖った裂片・葉の形をいう。根に精油類その他の含有物質が多く、補血、強壯、鎮痛、鎮靜、婦人病の處方に配合する要薬である。〔日本薬局方〕登録品。

《神農本草經集註》《本草經》文に「欬逆上氣，溫瘧，寒熱洗洗と皮膚中に在るもの。婦人漏下絶子，諸の惡瘡瘍を主とし，金瘡は煮て之を飲む。」，《別錄》文に「中を温め痛を止め，客血内塞，中風の疾にして汗出せず，濕痺の中惡，客氣虚冷（を療し），五臓を補い，肌肉を生ずる。」とある。

76. 「獨活」當品目の原植物は，中國に於いても錯綜していて，近代以降の精査でも，セリ科 *Angelica pubescens* 和名シシウドであったり，時にはウコギ科 *Aralia cordata* 和名ウドであったりという。屬名 *Angelica* は75.「當歸」参照，*Aralia* はカナダの土名。種小名 *pubescens* = 軟細毛がある・葉莖に生えている。*Cordatus* = 心臟形・葉形をいう。《神農本草經集註》《本草經》文に「風寒の撃つ所，金瘡の痛を止める，賁豚，癰濕，女子疝瘕を主とする。久しく服すれば輕身耐老。一名羌活，一名羌青，一名護羌使者。」とある。

77. 「芎藭」中國では古來，セリ科の Genus *Ligusticum* (マルバトウキ屬) の數種を充てて來た。代表的な種は *L. wallichii* で，中國南部内陸からインド，ネパールにかけて分布していたが，四川地域産のものが殊に品質最良とされ，「川芎」として重寶された。日本では同じセリ科ではあるが別屬 (ハマゼリ屬) の *Cnidium officinale* を特定し，「川芎」として栽培して來て，この種が今も「センギユウ」の名で〔日本薬局方〕に登録されている。屬名は，前者は古代イタリアの地名 *Liguria* から。*wallichii* 種ではないが，何か似たような效用の有る植物が傳わっていたのであろう。後者は *Cnide* イラクサの棘を思わせるような強い異臭からというが，今一つ明瞭でない。種小名 *wallichii* は，デンマーク出身でインド・カルカッタ植物園長となった研究者の名である。上記種類は何れも冷涼地を好む多年生草本で，塊状根莖に特有臭のある精油を含有し，當歸 (前出75.) と同様の效能 (補血、強壯、鎮痛、鎮靜、…) がある。《神農本草經集註》《本草經》文に「中風の腦に入りて頭痛，寒痺，筋攣緩急，金瘡，婦人の血閉無子を主とする。」，《別錄》文は「腦中冷動，面上遊風去來，目涙多く出でて涕唾忽忽醉うがごとく，諸寒冷氣，心腹堅痛，中惡卒急，腫痛，胸風痛を除き，中内の寒を温する。一名胡窮，一名香果。その葉を靡蕪と名付ける。」とある。「靡蕪」は古い本草書で獨立品目として別に記載がある。

78. 「白芷」セリ科の *Angelica dahurica* 和名ヨロイグサ。中國東北，朝鮮，東シベリア，日本本州西部，九州に自生する巨大な多年草。温暖寒冷何れにも強く，古來，中國各地で栽培している。屬名は *angelos* = 天使（の様な效能・「75. 當歸」既出），種小名 *Daphuricus* = シベリアのバイカル湖以東地域名。塊状の根に環状有機物クマリン類を含有し，鎮痛，鎮靜，止血の効用で漢方處方に配合。〔日本藥局方〕登録生藥。《神農本草經集註》《本草經》文は「女人漏下赤白，血閉，陰腫，寒熱風頭の目を侵し涙出ざるを主とする。肌膚を長じ潤澤にして面脂に作す可し。一名芳香。」，《別錄》文は「風邪久しく渴して嘔吐する，療脇滿風，痛頭眩目，痒には膏藥と作す可し。面脂顔色に潤う。一名白芷，…」とある。

79. 「芍藥」キンポウゲ科 *Paeonia lactiflora* (= *P. albiflora*) 和名シャクヤク。宿根性の大形草本で，中國北部から同東北，シベリア東部へかけての地域の原産。中國では，花を觀賞し根を藥用に使うために，凡そ千年前から栽培され，日本へも平安朝の内に傳わった。屬名は古代ギリシャ神話の名醫 Paeon より，種小名は *lactiflorus* = 乳色の花，*albiflora* = 白花（花色は紅，白以外にも有る）。「芍藥」は根に *paeniflorin* 等のテルペン類を多く含み，鎮靜，鎮痙，抗炎症として漢方處方に頻用される。〔日本藥局方〕登録生藥。《神農本草經集註》《本草經》文に「邪氣，腹痛，血痺を除き，堅積を破り，寒熱，疝瘕，止痛，小便を利し，氣を益するを主とする。」，《別錄》文に「血脈を通順し，中を緩め，惡血を散じ，賊血を逐い，水氣を去り，膀胱大小腸を利する。癰腫，時行の寒熱，中惡，腹痛腰痛を消す。」とある。同屬近縁種に「牡丹」*P. mutan* ボタンがある。中國西北部に自生していた灌木で，「芍藥」よりも花が大きく，唐代には栽培鑑賞が大流行した。「牡丹」も根皮が重要生藥で，「ボタンピ」として〔日本藥局方〕に登録されている。効能も芍藥根に似るが，こちらは殊に婦人藥の處方に配合されることが多い。

80. 「辛夷」中國ではモクレン科 *Magnolia* 屬（モクレン屬）の内，*M. liliflora*（モクレン，紫モクレン）及び *M. denudata*（白モクレン）の若い蕾を乾燥させたものが「辛夷」である。日本にはこれらの種類は分布しておらず，同屬近縁種のコブシ *M. Kobus* やタムシバ *M. salisiflora* の蕾で代用した。屬名はこれらの植物を研究した人名から（同屬71.「厚朴」の解説参照），種小名は，*liliflora* = ユリの花（形が似る），*denudatus* = 裸出の一果實が熟すると裂開し，種子が裸出しているように見える，*kobusi* = こぶし・開花直前の蕾が子供の握り拳に似る，*salisiflora* = *Salix*（柳）の葉・葉形が似ている。日本では「辛夷（コブシ）」の煎汁を頭痛，瘡毒解消の民間藥として飲用していた。成分に毛細血管透過性抑制作用あり内出血豫防劑として注目されている・フラボノイド *Lutine* などが溶け込んだ芳香性精

油が有る。

《神農本草經集註》《本草經》文に「五臟身體の寒熱，風頭，腦痛，面𩚑を主とし，久しく服すれば氣を下し輕身，明目，増年耐老。一名辛矧一名侯桃一名房水。」，《別錄》文に「中を溫め肌を解し九竅を利し鼻塞涕出を通じ面腫の齒痛を引き眩冒して身兀兀として車船上に在るが如きを治し，髭髮を生じ白蟲を去る。膏藥に作して之を用いれば心及び外毛の人肺に毛射して人を效せしむるを去る。」とある。

81. 「防風」 *Siler divaricatum* 和名ボウフウ，参考文献 1-10 Vol. 4-p. 285・北村新註によれば *Ledebouriella seseloides* と同一種である。セリ科。當植物は大陸では中國中部以北，モンゴルから東北部まで分布する。屬名 *Siler* は *Sium* = 水・當屬は水邊を好むからというが他説あり，種小名は *divaricate* = 分岐一葉が細かく分岐。別稱は，十九世紀前半ロシア植物研究者 *Ledebour* から，*seseli* は古代ギリシャで別の植物に付いていた名の轉稱。「防風」は日本に自生せず，かつて栽培されたが今は絶えているという。若い葉は食用菜になり，薬用には主に肥大根を使ったが，葉，花，細粒の果實も薬として使った。成分は香氣性精油など。《神農本草經集註》《本草經》文に「大風，頭の眩み痛み，惡風，風邪，目の盲して見る所無き，風行身を周る，骨節疼痺して煩滿を主とする。」，《別錄》文に「脇痛，脇風の頭面去來，四肢攣急，字乳（授乳），金瘡内瘻（刃物傷で内部が引き攣る）。」とある。

82. 「地黄」ゴマノハグサ科 *Rhemanium glutinosum* アカヤジオウ及びその同屬近縁種。中國西部，北部，東北部に自生する多年生草本。根出葉が放射状に伸び擴がり，長い花莖の頂に橙赤色の花を付けるので一株でも目立った存在となる。朝鮮，日本で栽培可能。肥大根をそのまま，或いは蒸した後，それぞれ干したものを薬用に使う（前者・「乾地黄」→本草書の品目名でもある。後者・「熟地黄」。）兩者共にイリドイド配糖體など，活性化化合物を多種類含む。漢方處方で頻用され，乾地黄は止血，清熱など，熟地黄は補血，強壯などの効能が認められており，〔日本薬局方〕に登録されている重要生薬である。

「乾地黄」の本草書古記載は，《神農本草經集註》《本草經》文に〔主治〕「折跌絶筋の傷中（筋骨の大怪我で内部損傷），血痺を逐い，骨髓を填め，肌肉を長じる。湯に作れば寒熱の集聚を除き痺を除く。生の者尤も良し。久しく服すれば輕身不老。一名地髓。」，《別錄》文に「男子の五勞七傷，女子の傷中漏下血，惡血溺血を破り，大小腸を利し，胃中の宿食飽じて力の斷絶せるを去り，五臟内傷の不足を補い，血脈を通じ，氣力を益し，耳目を利する。」とある。更に《本草經》文が「生の者尤も良し。」と記しているのに對應し《別錄》文は，「生地黃・婦人崩中血止まらざる，及び産後血上りて心に薄（=迫）り悶絶せ

る、身を傷して胎動下血し胎落ちざる、墮墜腕折、瘀血留血衄鼻吐血は皆擣きて之を飲む。」と追加している。生薬は採取後時を経ると劣化し、「蒸す」などの加工は効果を出るだけ保つ爲の工夫ではあるものの、やはり生（なま・新鮮品）の方が良いのであろう。ちなみに、凡そ古今東西を問わず、医療の實際家は生薬の良否判定で苦心したようで、この「地黄」品目でも、簡単に判りやすい方法の一つが次のように《證類本草》に収録されている；

日華子諸家本草*の文「生者は水浸して験する・浮く者は天黄と名付け、半ば浮き半ば沈む者は人黄と名付け、沈む者は地黄と名付ける。沈む者の力は佳く、半ば沈む者はその次で、浮く者は劣る。…」

*《日華子諸家本草》・十世紀後半・唐代開寶年間の本草書と推定されるが亡失し、宋代の《證類本草》の中に、品目毎に分散して添付する形で収録されている。

83. 「大黃」 *Rheum officinale* 別稱「四川大黃」、和名ダイオウ。タデ科。チベット地域及び北部、西部、中部南部の内陸山地に自生する *Rheum* 屬數種の總稱。屬名は Rha（ロシア西部 Wolga 川の古稱）から・その流域に多く自生していた。日本には自生しないが北海道では栽培可能。巨大な株になる多年生草本で、肥厚した根莖にはアントラキノンを始め多種類の活性成分があり、緩下、健胃などの効果で漢方處方に配合されて来た。〔日本薬局方〕登録生薬である。近縁種は更に廣範圍に朝鮮北部、シベリア、ヒマラヤ、シリアなどにも自生していて、それぞれの地域で同様に食用、薬用に使われている。

本草書の古記載では、《神農本草經集註》《本草經》文に「瘀血血閉の寒熱を下し、癰瘕積聚留飲宿食を破り、腸胃を蕩滌し、推陳致新、水穀を通利し、中を調え、食を化し、五臓を安和する。」、《別錄》文に「胃を平し、氣を下し、痰實の腸間結熱、心服脹滿、女子の寒血閉脹、小腹痛、諸老血の留結を除く。一名黄良。」とある。ちなみに、歐米で好まれる蔬菜の一つ「ルバブ」がダイオウ屬で、若い根出葉の柄の部分を食べる。近年、日本でも普及して来た。

84. 「藁本」参考文献 2-1 によれば、現在の中國では原植物をセリ科多年生草本 *Ligusticum sinense* に充てている。この種は「河南、陝西、甘肅、江西、湖南、湖北、四川、雲南の各地に分布し、山地草叢の中に自生していて、根を薬に入れ、（内服して）風寒、頭痛、腹痛、泄瀉を、外用は疥癬などを治療する。」とある。同屬近縁で東北部に産する「遼藁本」 *L. jeholense* も根と根状莖を薬にするという。（Genus *Ligusticum* については「77. 芎藭」参照。）日本ではそれらの種類は産しないので、セリ科内ではあるが別屬のヤブニンジン *Osmorhiza aristata* の根を「藁本」の代用品として来た。（osme = 香氣, rhiza = 根。

arista=芒=のぎ・全體にざらざらする。)《神農本草經集註》《本草經》文に「婦人の疝瘕，陰中寒腫痛，腹中の急を主とし，風の頭痛を除き，肌膚を長じ，顔色を悦とする。」，《別錄》文に「霧露潤澤を辟し，風邪の蟬曳，金瘡を療す。沐藥面脂に作す可し。」とある。

85. 「蛇銜」別名（本草書での名稱）「蛇含」。《牧野 新日本植物圖鑑》昭和36年初版本では，「蛇含」をバラ科の *Potentilla Kleiniana* 和名オヘビイチゴに充てている（potens=強力・藥效の強さ，Klein=採取した研究者名。）が，參考文獻1-10. の當該品目記載に付された註は「牧野曰フ，姑ク先輩ノ見ニ從フテ蛇含ヲをへびいちごトシテ置ク，植物名實圖考卷ノ十一ノ圖略ボ其形狀ヲ示シテ居ル。」とある。

つまり牧野博士は「蛇銜（蛇含）」の本草書古記載を觀て同定されたのではなく，文獻1-10. の當該品目に清代《植物名實圖考》から轉付された「蛇含」圖はオヘビイチゴであるとしておられる。改めて本草書の古記載を觀ると，陶弘景が「（蛇銜）兩種有り，並びに石上に生じる。まさに細葉黃花の者を用いるべし。處々之有り，亦た黃土の地上に生じ，必ずしも皆，石上に生ぜず。」と記しているのは，形態及び生態の兩面で當該植物の特徴を，混同してはいるものの，かなりの確に示している。「兩種」とは，上記オヘビイチゴ，及び同屬近縁種のカワラサイコ *P. chinensis*・現中名「委陵菜」と定めてよい。葉形が，前者は（小葉に分かれてはいるが）丸みを帶び，後者は細かく羽狀化している。また，好んで自生する處は，兩者共に河川敷などに多く，前者はやや濕った細土面，後者は石がごろごろしている乾いた砂原である。兩種共に，丸く黄色の辨が5枚の小花が莖先の穂に群がり付いて咲く。分布面では，「蛇含」は暖帶～熱帶；本州，四國，九州，朝鮮，中國，印度，マレーシア（以上・北村）。「委陵菜」の分布も「蛇含」と重なっているが，より廣域に，北は甘肅～内蒙古～東北，西はチベット，南は貴州～雲南に及ぶ（以上「委陵菜」の分布は參考文獻3-2. Vol. 2. pp. 103~117）。

成分面は，「近縁種の根莖にはタンニンを含む。」との研究報告もあり，人が攝食した場合，近年註目されている「ポリフェノール効果」その他，茶葉のそれに似た效能は充分期待出来るだろう。古い記載で陶弘景が「細葉の者を用いるべし」としているのは，知見として「委陵菜の方が良い」との意味である。《神農本草經集註》《本草經》文に「蛇全」・「〔主治〕驚癘，寒熱，邪氣。熱を除き，金瘡，疽痔，鼠瘻，惡瘡，頭瘍。」，《別錄》文に「心腹の邪氣，腹痛，濕痺を療し，胎を養い，小兒を利する。」とある。

86. 「馬蘭」。現代中國ではキク科の *Kalimeris indica* に充てる（參考文獻3-1. Vol. 4. p. 419）。「馬蘭」は本來，アジア南部に自生していた。學名を *Aster indica* L. とすることもあったが，二つの屬名・*Kalimeris* と *Aster* は Synonym（同義語）である（kalos=美しい+

mero=部分—美花を言う、Aster=星—花の形)。日本の同属近縁種は「ヨメナ」・本州以南の山野で自生しているのをよく見かける大形の草本で、古代から若葉を食用として来た。以前は馬蘭=ヨメナ *Aster indica* とされたが、本草書で当該植物の記載がやや錯綜しており、古記載だけではそうした同定には不十分で、現代の専書でも當植物は變異が多いとしている(上記・参考文献3-1.)。日本の自生種は「馬蘭」ではなく同属の別種であり、その後、ヨメナは *Kalimeris Yomena* Kitamura と定められた。

成分面では、これらの種類を含めてキク科植物は、タンニン類などの活性化合物を合成し、根、莖、葉、花、果實、種子などの各部分に保持し、更にそのような物質を積極的に發散、分泌することが多い。本来は、動物による食害や微生物による罹病を防ぎ、周囲の植物との生存競争に打ち勝つ爲であるが、利用する人間の立場で言えば、そうした物質の性質、特徴及び、攝り入れる側(人體)の病状、症状をよく調べた上で適應するものを選べば、生薬として有効なものが多く見出せることになる。「馬蘭」の効能は《神農本草經集註》《別錄》文に「宿血を破り、新血を養い、金瘡を合わせ、血痢、蠱毒を斷ち、酒疸を解し、鼻衄、吐血を止め、諸菌の毒に及ぶ。生なるを搗きて蛇咬に傳ける。」とある。

87. 「蠶實」, 「荔實」, 「馬蘭子」。 *Iris Pallasii* (= *I. ensata* var. *chinensis*) 和名ネジアヤメ。アヤメ科。属名 *Iris* = 虹・花色が多彩なことを言う、種小名はドイツ人研究者 Pallas から。 *ensatus* = 刀状・葉の形を言う。その形の葉が長く伸び、捩れ氣味となる。和名はその特徴から。「荔」一字が《禮記》に在るが、このものを指すかどうかは尙、検討を要する。當植物は中國の中部、北部、東北部の各地に分布。日本へは早く渡来したが、本来乾燥地を好むので日本ではあまり増えなかった。主に「實(この場合は種子)」を薬用とし、《神農本草經集註》《本草經》文に「蠶實・皮膚の寒熱、胃中の熱氣、風寒濕痺を主とし、筋骨を堅め、人の食を嗜めせしむ。久しく服すれば輕身。花葉は白蠱を去る。一名劇草、一名三堅、一名豕首。」、《別錄》文に「心の煩滿を止め、大小便を利し、肌膚を長じ、肥大せしめ、(花葉は)喉痺を療す。…一名荔實。」とある。さらに《證類本草》では「〔唐本註〕云うに、此れ即ち馬蘭の子なり。月令云うに荔挺出ずる。鄭(玄)註云うに荔、馬薤なり。説文云うに荔は蒲に似て、根は刷と爲す可し(刷毛にする)。通俗文一名馬蘭、本經一名荔實。」とある。「蠶實」が《神農本草經》からの名稱、「荔實」は《名醫別錄》から《神農本草經集註》に合流した名稱、「馬蘭」はやや後の時代からの植物體全體の通稱、「馬蘭子」はその種子である。

88. 酢漿, 「酢漿草」。 *Oxalis corniculata* 和名カタバミ、カタバミ科。属名は *oxys* = 酸味—葉莖に酢酸を含んでいる、種小名 *corniculatus* = 小さな角(つの)—果實の形を言う。

世界中の暖帯～熱帯に分布している。《唐本草（=七世紀に出た新修本草）》から本草の世界に登場した。《證類本草》に収録されているその記載は「〔主治〕悪瘡、渦癭は之を擣いて傳ける。諸小蟲を殺す。」と、酸性による外用效能を、《新修本草》を改定増補した後の十世紀・宋代《開寶本草》で「今按ずるに、之を食せば熱渴を解する。」と、内服效用を述べている。

89. 「甘草」 このマメ科多年生草本は代表的な中國生薬の一つで、中國傳統醫學の多くの處方で頻用され、食品加工や日常調理にも甘味料として使われて来た。普通はアフガニスタン～パキスタン～新疆地方～モンゴル地方～中國北部、東北部～シベリアに分布する *Glycyrrhiza uralensis* 種を充てるが、同屬近縁二、三種・中央アジア～南歐寄りに分布する *G. glabra* 種、その變種で華中から西方にかけて分布する var. *glandulifera*, ロシアが主産地の *G. echinata* 種なども同じように使われている。(屬名は glycos = 甘い + rhiza = 根・根が甘く、その部分を使う。種小名は, uralens = ウラル山脈に多い, glaber = 無毛の, glandulifer = 腺が有る, echinatus = 剛毛が有る。) 薬としての效能は、《神農本草經集註》で陶弘景が「…此の草最も眾薬の主となる。經方にして用いざるは少なし。…國老即ち帝師の稱。」と讃えている。《本草經》文は「〔主治〕五臟六腑の寒熱邪氣、筋骨を堅くし、肌肉を長じ、力を倍にし、金瘡、腫（腫れ物）の解毒。久しく服すれば輕身延年。」、《別錄》文は「中を温め、氣を下し、煩滿、短氣、臟を痛めたる欬嗽、渴を止め、經脈を通じ、血氣を利し、百薬の毒を解し、九土（全國）の精と爲り、七十二種の石、一千二百種の草を安和する。一名蜜甘、一名蜜草、…」とある。現代の分析では主成分 glycyrrhizin や當屬植物獨特のトリテルペン類及び抗潰瘍性イソフラボンや色素類の含有が知られている。乾燥根を砕いた「カンゾウ末」が鎮痛、鎮攣、整胃、整腸、去痰、甘味の生薬として〔日本薬局方〕に登録されている。日本では氣候が合わず栽培困難な爲、需要は輸入に依存している。

90. 「麻黄」 現中國名「草麻黄」*Ephedra sinica* 和名マオウ、及び同屬近縁の數種。マオウ科。草狀小灌木の裸子植物で、中國東北部、北部、モンゴル、西部などの乾燥地に自生する。(屬名 epi = 上 + hedra = 座、一石の上でも生えるから。) 短い木質莖から緑色の草質莖が出て直立、分枝し、全體の高さは40 cm 程度に伸びるが、葉は鱗片狀に退化し、莖の節に對生している。地上部を細かく切って干したものが重要生薬で、獨特のアルカロイド Ephedrine を含有し、發汗、鎮咳去痰、解熱、消炎などの效能を持ち、現代醫處方及び漢方處方に配合される。この成分を抽出し鹽酸エフェドリンとしたものが〔日本薬局方〕に登録されている。根は逆に止汗作用の成分を含んでいる。《神農本草經集註》《本草經》文に「主治・中風、傷寒、頭痛、溫瘧には表を發し、汗を出し、邪熱の氣を去り、欬逆上氣

を止め、寒熱を除き、癥堅、積聚を破る。一名龍沙。】、《別錄》文に「五臓の邪氣、緩急風の脇痛、字乳（授乳）の餘疾（を治する。）好睡を止め、腠理の疎を通じ、傷寒の頭疼、肌を解し、邪惡の氣を洩らし、赤黒の斑毒を消す。」とある。原植物は日本には産せず、栽培も困難であり、需要は輸入に依存している。

91. 「黄芩」 *Scutellaria baicalensis* 和名コガネバナ、コガネヤナギ。シソ科。中國北方～朝鮮北部～東シベリアに分布する多年生草本。屬名は Scutella = 小皿・宿存萼に皿が付いている。種小名はバイカル湖邊に多いから。二、三の同屬近縁種が地方的に代用或いは混用されることもある。根に baicalin, woogonin, scutellarin などのフラボノイドを含有する。《神農本草經集註》《本草經》文に「〔主治〕・諸熱、黄疸、腸澼、洩痢。水を逐い、血を下し、惡瘡、疽蝕、火傷を閉じる。一名腐腸。】、《別錄》文に「痰熱、胃腸熱、小腹絞痛を療じ、穀を消し、小腸を利し、女子の血閉、淋露、下血、小兒の腹痛（を癒す）。」とある。根を粉碎し「オウゴン末」の名稱で〔日本藥局方〕に登録され、健胃・消化、止瀉・整腸、瀉下、解熱・鎮痛・消炎の效能で漢方處方に配合される。日本でも冷涼の濕地なら生育可能。

92. 「山茱萸」本草書の古記載・《神農本草經集註》《本草經》文に「〔主治〕心下の邪氣、寒熱、中を溫め、寒濕の痺を逐い、三蟲を去る。久しく服すれば輕身。一名蜀棗。】、《別錄》文に「腸胃の風邪、寒熱、疝瘕、頭風、風氣去來、鼻塞、目黃、耳聾、面皯。中を溫め、氣を下し、汗を出し、陰を強め、精を益し、五臓を安んじ、九竅を通じ、小便の利を止める。目を明とし、力を強め、年を長らう。實は漢中山谷、琅邪、冤句、東海承縣に生じ、九月十月、實を採り、陰乾す。」とある。古代の原植物が何であったか、「未詳」とされて來た。しかし實際には、ミズキ科の樹木で朝鮮や中國東部に自生する *Cornus officinalis* が「山茱萸」として使われ、日本にもその名で十八世紀までに渡來し、定着した。（屬名は cornu = 角・幹や枝の材が堅いことから。種小名は「藥用」の意味。なおこの學名は十九世紀に日本の植物を研究した Siebold 及びその協力者 Zuccarini による。）結實の様子を愛でる觀賞用にも植栽されている。生藥として使うのは、花を載せる床が肥大した「偽果」から種子を取り去り、果肉を乾燥させたものである。loganin その他のイリドイド配糖體、有機酸類、及びタンニン類など、活性有機物を含有し、〔日本藥局方〕に登録され、保健、強壯、收斂などの效能で各種漢方處方に配合されている。

93. 「遠志」 *Polygala tenuifolia* 和名イトヒメハギ、ヒメハギ科。細い莖に綫形で小さい葉が付いている多年生草本。分布は中國北部～モンゴル～東北部～シベリアとされてい

る。この種とは僅かな變異で「□□遠志」の名を持つ多くの同屬近縁種が中國の殆ど全土に自生し、日本にも、見かけはよく似た *P. japonica* 種 (ヒメハギ) が自生する。そうした同屬近縁種の中には、本來の *P. tenuifolia* 種に準ずる藥效を持つものも有るが、全ての同屬近縁種がそうではない。(日本種は藥效が無い。) 屬名は polys = 多い + Gala = 乳汁・同科の或る植物が牝牛の乳の出を良くするとされたことから。種小名は tenuis = 細い + folius = 葉。《神農本草經集註》《本草經》文に「主治・欬逆，傷中，不足を補い，邪氣を除き，九竅を利し，智慧を益し，耳目聰明，不忘，強志，倍力。葉名小草。…」，《別錄》文に「丈夫を利し，心氣を定め，驚悸を止め，精を益し，心下の膈氣，皮膚の中熱，面目の黄なるを去る。顏色を好くし，延年。〔葉の主治〕精を益し，陰氣を補い，虚損夢洩を止める。…」とある。當品目の特徴は「精神安定，鼓舞」の效用有り (上記古記載引用の下綫部) とされることで，品目名「遠志」もそれを意味する。

成分的には，主に根に當植物獨特のサポニンが數種類，確認されており，その粉末が「オンジ末」の名で〔日本藥局方〕に登録されて，保健強壯，精神神經，去痰などの效能で漢方處方に配合されている。

94. 「**黃連**」キンボウゲ科多年生草本の *Coptis chinensis* で，中國中部の東西南北域 (浙江～湖北～湖南～貴州～四川～陝西の各省邊) に分布し，古くから栽培もされて來たこの種類を主とするが，雲南地方その他，やや外れた處にも同屬近縁種が有り，上記の種と同様に使つて來たようである。日本にも同屬近縁の *C. japonica* 種「オウレン」が自生し，それがさらにキクバオウレン (葉が菊の葉に似る)，セリバオウレン (同 芹に似る)，コセリバオウレン (コ = 小) と三系統に分かれているが，幸い，どれも本來の標記種と概ね似た效能を持つということで，全て利用されている。これらの *Coptis* 屬植物の根莖には，Berberine を主とする活性アルカロイド數種が，全體重量の數%以上の多さで含まれており，それらの物質は強い抗菌性，抗炎症性，及び，高等動物體内の消化器官その他の臟器への強い作用性を持っている。《神農本草經集註》《本草經》文に「〔主治〕・熱氣の目痛で眚 (まなじり) 傷付き泣き出るは目を明とする。腸癖，腹痛，下痢，婦人陰中の腫痛。久しく服すれば人を忘れざらしむ。一名王連。」，《別錄》文に「五臟の冷熱，久しく下る洩癖，膿血。消渴 (糖尿症狀)，大驚を止め，水を除き，骨を利し，胃を調え，腸を厚くし，膽を益し，口瘡を療ずる。」とある。民間藥的に苦味健胃，整腸，洗眼などの用途に使用し，重要生藥として〔日本藥局方〕に登録され，胃腸の炎症，下痢，瀉下，胸の支え，精神不安などを治す效能で漢方處方に配合される。根の汁を黄色染料に使つたりもした。

95. 「**苦參**」 *Sophora flavescens* (= *S. angustifolia*) 和名クララ，マメ科。中國北部～東北

部～朝鮮～日本～東シベリア南部の山野で、日当たり良い草地に自生する、やや大形の多年生草本。属名はアラビアの或る植物の名 *sophera* を轉用。種小名 *flavescent* = 帶黄色・花瓣の色, *angustus* = 狭い + *folius* = 葉・羽状複葉で個々の小葉は巾が狭いこと。根の内質部を生薬とするが、アルカロイドを數種、加えてフラボノイド類、及びサポニンも含まれ、味わうと極めて苦い。「苦蔘」たる所以であり、和名も目が眩む(クラクラする)ほど苦いので、という。〔日本薬局方〕に登録され、苦味健胃、消炎、止瀉などの効能で民間薬となり、漢方處方にも配合される。《神農本草經集註》《本草經》文に「心腹の結黄、癥瘕、積聚、黄疸、溺に餘瀝を有するは水を逐い、癰腫を除き、中を補い、目を明に、涙を止める一名水槐、…」、《別錄》文に「肝、膽の氣を養い、五像を安じ、志を定め、精を益し、九竅を利し、伏熱、腸澼を除き、渴を止め、酒を醒し、小便の黄赤、惡瘡、下部の匿を療す。」とある。なお、中國で「尊樹」とされる「槐」和名エンジュの學名が *Sophora japonica*。「苦蔘」と同属である。「槐」は廣い場所に植えれば樹形の良い見事な大樹となり、獨特の風格が有って景觀に寄與するが、見かけだけではなく、「槐」の蕾にはフラボノイドの一種・*rutin* が多量に含まれている。これは毛細血管透過性抑制薬として内出血豫防などの目的で使用され、近年特に注目されている天然物質である。

96. 「藕」*Nelumbo nucifera* 和名ハス、スイレン科。池沼の浅い水面に自生し、水田で栽培もされる大形多年草。原産地は熱帯インド或いはその西方邊りと思われるが未詳。属名はセイロン(現スリランカ)での當植物の土名、種小名 *nucifer* = 堅果を持つとの意味。北村四郎博士によると、ハスが佛教と共に用いられるようになったのは、古代ギリシャやエジプトなどでの近縁種スイレンと偶像との結び付きが東へ傳わり、インドでハスと佛教との結び付きに代わったという(参考文献3-9、中編 p. 251.)。ハスの實物は古昔から中國に分布していたから、佛教が廣まる前の古記載は古代中國本來の觀方としてよい。《證類本草》に引かれている、諸古典からの當該植物各部分の古稱は多様であるが、《爾雅》の「荷、芙蓉也。其莖荷，其葉遐，其本蒂，其華菡萏，其實蓮，其根藕，其中的，的中薏也。」に加えて、邢昺の註で「芙蓉は總名・別名が芙蓉、江東地方で荷、菡萏は蓮花、的は蓮實、薏は的中の青心、…」、郭璞の註で「蒂とは莖下の白藕で泥中に在るもの、…蜀地方では藕を茄という…」、で「…其花の未だ開かぬを菡萏と言ひ、已に開きたるを」などはよいとして、郭璞註の残りの部分や、陸機(3世紀後半)の詩の疏の説明などには重複或いは矛盾がある。ハスは地下莖が泥の中を横に伸びて分枝し、秋の終わり頃、その先が太って「藕(俗稱レンコン)」となる。花は夏に咲くが、長い花柄が水面から抜き出た頂に付く。花後、花床が圓盤状に大きくなり、穴が多數、蜂の巢のように開いているので、和名が古くは「ハチス」、平安朝後期以降「ハス」となった。穴の中に指頭大で橢圓體の

堅い果實が出来た。これは先ず食用になるが、主に薬にするのもこの果實で、《神農本草經集註》《本草經》文に「藕實〔主治〕中を補し、神を養い、氣力を益し、百疾を除く。久しく服すれば輕身耐老、不飢、延年。一名水芝丹。」、《別錄》文に「一名蓮生、…」とある。「藕」は《爾雅》で根とするが實は上記のように地下莖で、食用（上述レンコン）で薬にもなり、《別錄》文に「〔主治〕熱渴、血を散らし、肌を生じ、久しく服すれば人心をして懽（よろこば）しめる。」とあり、花（蓮花）も薬になり、唐代《日華子本草》の大明は「花・心を鎮め、輕身、色を益して顔に駐（とど）め、香を入れるに甚だ妙なり。」と述べている。陶弘景が「根と花は竝びて神仙に入れて用いる。」と述べている。

97. 「藍」, (=「蓼藍」)。 *Polygonum tinctorium* 和名アイ, タデアイ。一年生草本。タデ科。原産地はインドシナ南部との説があるが、古くから中國の殆ど全土に分布している。早くから含有色素 indigo による青色染料として利用し、また生薬でもあった。屬名は polys=多い+gonu=節・莖に節が有る。種小名 tinctorius=染物屋。近縁種、或いは類縁が遠い別の植物でも、同じく indigo を含有するものが他にも早くから見出され、それらは「馬藍」, 「吳藍」, 「菘藍」, 「木藍」などの名稱で呼ばれ、本草書では或るものは「藍」品目に統一され、或るものは「大青」として別に記載されて、同様に利用されて来た。

(例えば、「木藍」はマメ科樹木の *Indigofera tinctoria* 和名タイワンコマツナギ)

「蓼藍」の果實「藍實」について《神農本草經集註》《本草經》文に「〔主治〕諸毒を解し、蟲蛟（小兒の憑ききもの）、主鬼、螫毒を殺す。久しく服せば頭白からず、輕身。」、 「葉」及び「莖葉」について《別錄》文に「其の葉汁は百薬の毒を殺し、狼毒、射罔の毒を解する。其の莖葉にて青に染めたるを以つても可（青色染めに使った莖葉でもよい。）」とある。「大青」について、《別錄》文に莖葉の〔主治〕を「時氣の頭痛、大熱、口瘡。」とし、陶弘景が「…時行熱毒を除くに良しと爲す。」と記している。

98. 「貝母」 *Fritillaria Thunbergii* 和名パイモ, アミガサユリ。ユリ科多年生草本。ユリ科各種は、鱗片を重ねた鱗莖が地中に在り、その中から地上莖が出ているが、この種類の場合は半球形鱗片が二枚向き合っていて、丸っこい二枚貝のように見えるので、この名である。中國原産で古く日本へ傳わり、廣範圍で野生化している。屬名は *Fritillus*=遊具“さいころ”を入れる小鉢・花の形を言う（和名も花が日本の「編み笠」に似るとの意味）。種小名は、十九世紀に日本の植物を調べたスウェーデン人 Thunberg の名から。現代の分析で、薬用として来た鱗莖には、アルカロイド Peimin 及びその配糖體 Peiminoside を含み、後者には強い血圧降下作用が有るといふ。《神農本草經集註》《本草經》文に「主治・

傷寒の煩熱，淋瀝，邪氣，疝瘕，喉痺，乳難，金瘡，風痺。…」，《別錄》文に「腹中の結實，心下の滿，洗洗たる惡風寒，目眩，項直，欬嗽，上氣を療し，煩熱の渴を止め，汗を出し，五臓を安んじ，骨髓を利する。…」とある。

99. 「白藎」，「白藎」 *Ampelopsis japonica* 和名ビヤクレン，カガミグサ。ブドウ科。掌状葉が付いた細い蔓性の樹木で中國原産。中部から東部，華北，東北部，日本に自生する。屬名は *Ampelos* = ブドウ + *opsis* = 外観 (が似ている)。和名の「カガミグサ」は，古い幹蔓は巻き鬚で他物に固着しているが，蔓先の新しく伸びた部分は未だ固着せず，垂れ氣味に屈 (かが) んでいるからであろう。地中に太めの棒状根を一株當り十本ほど伸ばして，その部分が古來の生薬である。《神農本草經集註》《本草經》文に「主治・癰腫，疝瘕，結氣を散じ，痛を止め，熱を除き，目中の赤，小兒の驚癇溫瘧，女子の陰中腫痛。…」，《別錄》文に「赤白を下し，火毒を殺す。」とある。陶弘景が「根を採り，搗いて癰腫に傅するも亦效 (あり)。」と記しているように，この品目は内服薬の處方に配合する記載も記されてはいるが，病變が體表に出ている場合や外傷に使う處方が多い點で，かなり特徴的である。

100. 「茵陳蒿」 *Artemisia capillaris* 和名カワラヨモギ。キク科。屬名は *Artemis* = 古代ギリシャの女神・當屬植物は婦人病に效く。種小名 *capillus* = 細毛・葉が毛のように細い。日本及び朝鮮を含めて東アジアの廣い範圍・北は中國東北部から，南は臺灣，フィリピンまで廣く分布する多年生草本。和名の通り，河川敷や海岸の乾いた砂地に自生し，様子はヨモギ (蒿) に似てはいるが，葉身がごく細かく分岐し，綫状となっている。冬に葉が全て枯れ落ちて，莖は木質化して枯死せず，春には新葉新芽が陳 (古い) 莖に因 (よ) って伸び出るので，この名である。キク科の花は「頭花」すなわち極小の花が多數密集して一つの花に見えるが，茵陳蒿の場合，その頭花がまた多數，大形の圓錐花序を構成して幹莖の頂に付く。成分は，現代の分析に據れば，全草にアセチレン化合物 *Capillin* を主成分とする精油を含み，この化合物は皮膚病原性糸状菌に對して強い防カビ作用を示し，また，花穂には胆汁分泌増加作用を持つ *Esculetin dimethyl ether* が含まれている。現在も〔日本薬局方〕登録の重要生薬である。本草書古記載では地上部全體を使っており，《神農本草經集註》《本草經》文に「主治・風濕寒熱，邪氣熱結，黄疸。久しく服すれば輕身益氣耐老。」，《別錄》文に「通身 (全身) 發黃，小便利せざる。頭熱を除き，伏瘕を去り，…」とある。適應症を「黄疸」，「全身發黃」と明示しているのが，現代の分析結果で見事に裏付けされたのである。

II. 總括—まとめと考察

以上、《五行大義》「卷第二」、《黃帝內經太素》、《醫心方》に出ている、またはそれらに密接に関連する古典に、名稱が頻繁に出ている自然物135*品目を逐一検討した結果、全て本草品目であった。（*品目数の数え方・当該古典に名稱が出ているものには番號を付して100品目を採り挙げた。それらの或るものと関連が深く、併せて検討する必要を認めたものが他の35品目である。）

◎ 前述 I. で列挙検討した品目類・全體のまとめは次の二觀點に絞り、簡明な表形式を執った：

1. 原產地別の概要を觀る。此處でいう「原產地」とは、原則として當該の種類が最初に本格的に栽培されるようになった地域。生物品目については、生態的な水分狀況の差違も略示する。
2. 效用別の概要を觀る。「效用」古記載を、現代の範疇ごとにまとめて、各品目の特徴を觀る。

◎ 表形式まとめとその説明の後、改めて全體を通觀し、ポイント3點を定めて總合的に考察する。

〔表1. の補足説明と考察〕

全て六世紀の《神農本草經集註》の記載に照合しての結果である。中部（華中）及び北部（華北）～東北部が多く、それら兩區域だけで全體の半數に近くなる。そのことは、編著者・陶弘景及び先驅者たちの主な活動圏がそれらの地域であったことから當然でもあるが、東アジア農耕文化が、その頃迄に當該兩地域邊で最も早く成立發展したことを、如實に示しているとも言える。

言い換えれば、先進的な兩地域が、廣大なユーラシアの西方はもとより、南方及び南東方の遠隔地域からも、當時としては最先端の自然物を取り寄せ、自地の物産に同化させていたことに他ならない。

殊に動植物品目は、自領域より遙か先の西、南、南東の三方から招來していることが歴然と觀て取れる。

◎ 次の「效用別」では、本草書の效用表現語の中に現代は使わないものが在り、また複數の語で同じ效用を指す場合もあるので、現用語の局限的なものを含めて、次のように大まかに整理し、分別した。

○ 結氣、心腹、除毒、解毒、益氣、補中、調中、緩中、中和、五癰、五臟

→全身狀態とその改善。

表1. 原産地別；(各枠内の数値は品目数)；

	地 域	鑑物	植物 (乾燥地～並湿～湿潤)	動物 (陸棲～水棲)	その他
1	日本～朝鮮	7	(7)		
2	中國北邊～モンゴル～シベリア		8 (4, 4)		
3	中國北部 (華北) ～東北部	2	19 (6, 12, 1)	1	
4	中國中部 (華中)	5	23 (2, 17, 4)	4 (3 1)	2・酒, 醃
5	中國西部～チベット	3	11 (5, 4, 2)	1	
6	中國南部～インドシナ半島	1	9 (5, 4)	1	
7	東南アジア～オーストラリア		3 (1, 2)	1 (1)	
8	ミャンマー～インド (熱帯域)		7 (2, 5)	2	
9	インド北部		4 (3, 1)		
10	中國西域～中央アジア東部	1	4 (2, 2)	1	
11	中央アジア中部～西部		3 (3)	1	
12	アラビア～アフリカ		3 (2, 1)		
13	地中海東方		2 (1, 1)		
14	地中海沿岸		2 (2)		
15	ヨーロッパ中部～北部		4 (4)	1	
	計 (總計135)	11	109 (26 64 19)	13 (11 2)	2

- 痺胃, 腸痺, 胃實, 腸實, 胃虚, 腸虚, 反胃, 胃中熱, 腸結など, → 消化器, 消化器系疾患。
- 欬逆, 喘喉など喘□…, 喉痺など喉□…, 肺□…, → 呼吸器, 呼吸器系疾患。
- 癰 (結石, 尿閉。別意↓・次ページ) 淋, 石淋, 水道, 赤白小便, → 泌尿器, 泌尿器系疾患。
- 血脈, 積聚, 濃血, (下血は前後関係で判断) → 循環器, 循環器系疾患。
- 癲, 心, 心狂, 不眠, 痺, 身痺 → 精神神経, 神経精神系疾患。
- 鬼, 蠱毒, 邪, 邪氣, 煩, 煩邪, 伏尸, → 悪い憑き物, 煩雑な邪氣, 狂犬病。
- 目痛, 明目, 目明, 耳目 → 眼, 感覺。
- 消渴, 目黄 → 糖尿病, 黄疸。
- 以下, △四つの場合 → 流行病, 流行性熱病。
 - △ 寒熱・高熱と寒氣を伴う病。
 - △ 傷寒・高熱と激しい胃腸症状を伴う病 (腸チフスなど)。
 - △ 瘧・おこり, 大風, 惡風 → マラリア, 高熱病の類。
 - △ 霍亂・日射病, 或いは急性高熱性胃腸炎。

表2. 效用別—1/5；

番	【原文】名	品 目 名 本草經, 名醫別錄○ 本草名	全 身 狀 態	消 化 器 系	呼 吸 器 系	泌 尿 器 系	循 環 器 系	精 神 神 經	憑 物 煩 邪	明 目 感 覺	糖 尿 黃 疸	流 行 熱 病	男 女 性 別	小 兒	筋 骨 關 節	傷 腫 皮 膚
1	榆	榆皮		● ○		● ○			●			○				○
2	桑	桑根白皮	●	○		○	●	●			○	●	●			● ○
3	棗	酸棗	● ○	○	●	○		○	●		○	●			●	○
4	薺	薺	○	○						○						
5	麥	大麥	○								○	○				
6	款冬	款冬花							● ○		○	●		●		
8	醴	醋				○			○							○
9	酒	酒	○						○							
10	蜜	蜜(蠟) (白蠟)	● ○			○	○	●								● ○
11	薑	乾薑, 生薑	● ○	● ○	● ○		●					○				○
12	鹽	戎鹽, 鹵鹹, 大鹽, (胡鹽)	● ○	○					●	●	●					● ○
14 17 18	米	粟米, 黍米, 稻米	○ ○ ○	○ ○		○					○	○				
15	麻	麻蕒(花), 麻子(種 子)	●				● ○	●					○	○		● ○
16	大豆	大豆黃卷, 生大豆	○	○		○	○	●	●						●	●
20	李	李核人, 根皮					○	○			○					○
21	栗	栗子	○	○		○										
22	杏	杏核人	○	○	●			●		○		○	●	○		● ○
23	桃	桃核人, 花, 毛, 桃臬, 桃蠹	○				●	○	●	○		●	○			○
25	葵	冬葵子, 葵根	●			●		○	○	○		●			●	
26	韭	韭, 韭根	○	○				○					○			○
27	藿	(赤小豆の葉)					○						○			
28	薤	薤(菜)	●			○						○				● ○

表2. 效用別—2/5:

番	【原文】名	品目名 本草經, 名醫別錄○ 本草名	全身 狀態	消 化 器 系	呼 吸 器 系	泌 尿 器 系	循 環 器 系	精 神 神 經	憑 物 煩 邪	明 目 感 覺	糖 尿 黃 疸	流 行 熱 病	男 女 性 別	小 兒	筋 骨 關 節	傷 腫 皮 膚
29	葱	葱實	● ○		○				○	● ○		● ○	● ○			●
31	牛	牛膽, 肉, 腎, 尿 角髓,	● ○			○				● ○	● ○	● ○	● ○		●	○
32	犬	膽, 腦, 齒, 蹄, 牡陰莖, 心臟, 頭骨, 白狗血, 肉, 尿	○		○			○	○	●		●	●	○		○
33	彘	豚/卵(辜丸), 脚, 蹄, 膽, 肚(胃), 齒, 膏(脂肪), 尿	●	●		○	○	●	●			●	○	●	○	○
34	羊	羚羊角, 髓, 膽, 肺, 心臟, 腎, 齒, 肉, 腦, 骨	● ○		○		○	●	●	●			○	○		● ○
35	鷄	丹雄雞, 白雄雞, 烏雄雞, 卵, 黑黃雌雞, 脂肪, 腸胃, 冠血	● ○	○		●	○	○	○	●	●	○	●		○	○
37	玉	玉屑, 玉泉	○	○	○			○							○	
38	金	金屑	○					○	○						○	
39	雄黃	雄黃, 黃金石, (鷄 冠石)	● ○						●	○		●	○		○	●
40	曾青	曾青	○					○	○			○	○		○	○
41	赤石脂	赤石脂	○	○		○		○		○			○			○
43	茯苓	茯苓, 茯菟	● ○			●		●	●			●				○
44	桂心	牡桂, 菌桂	●	●	●		○	●	○						●	○
45	天門冬	天門冬	● ○		○	○			●			●			●	○
46	五味子	五味子	● ○		●							○	●			● ○
47	玄參	玄參	● ○	●		●			○	●		●	●			○
49	蜚蠊	土蜂子			○											●
50	虵蛭	馬陸, 百足, 馬軸	●	●								○				●
51	蟬蛇	蟬蛇, (錦蛇)		○						○			○			○
52	伊威	鼠婦, 負蟠	●			●						●	●			
53	蜥蜴	石龍子, 山龍子, 守宮	●			●	●									
54	胡麻	胡麻, 巨勝, (菜) 青囊	● ○	○						○		○	○		●	● ○

表2. 效用別—3/5；

番	【原文】名	品目名 本草經, 名醫別錄○ 本草名	全身 狀態	消 化 器 系	呼 吸 器 系	泌 尿 器 系	循 環 器 系	精 神 神 經	憑 物 煩 邪	明 目 感 覺	糖 尿 黃 疸	流 行 熱 病	男 女 性 別	小 兒	筋 骨 關 節	傷 腫 皮 膚
55	柑橘	橘柚, 橘皮, (柑)	● ○	● ○		○						○				
56	胡桃	胡桃	○	○		○										○
57	蘭	▽《太素》	▽								▽					
58	蘭草	水香, 香水蘭, 千金 花, 澤蘭	●		○	●			●							
59	草蘭	建蘭花◇葉, 根。◆春 蘭《拾遺》, 《本草匯》	紅白 ◇◆	黃◇ 葉◆	葉		葉 ▽	青 ◇	根 ◆	黑 ◇						根 ◆
60	半夏		● ○	●	○						○	● ○				●
61	烏賊	烏賊骨					○						● ○			●
62	雀卵						○						○			
63	鮑魚	鮑魚汁					○						○		○	○
64	生鐵	鐵落, 生鐵落				○		● ○				●				● ○
65	細辛		● ○		○	○		● ○		●		●	○		●	
66	蜀椒	川椒, 巴椒, 秦椒,	● ○	○	●		○	●	● ○			○	○		● ○	● ○
67	續斷	川續斷	●				○					●	●		● ○	● ○
68	烏頭	奚毒, 即子, 烏喙 天雄, 附子, 側子	● ○		●		●					○	○		○	○
69	皂莢		○					●		○			○			●
70	石南		● ○					●	● ○						● ○	●
71	厚朴		● ○	○	○	○	●	● ○	●	子 ○		● ○				子 ○
72	芮草	《本草衍義》	△	△								△				
73	白朮	蒼朮, 山薊	● ○	● ○	○							●				●
74	黃耆	戴椹, 椹椹	● ○	● ○			○						○	●	○	●
75	當歸		● ○				○					● ○	●			●
76	獨活		●					●				●		●		●

表2. 效用別—4/5; ■唐本草

番	【原文】名	品目名 本草經, 名醫別錄○ 本草名	全身 狀態	消 化 器 系	呼 吸 器 系	泌 尿 器 系	循 環 器 系	精 神 神 經	憑 物 煩 邪	明 目 感 覺	糖 尿 黃 疸	流 行 熱 病	男 女 性 別	小 兒	筋 骨 關 節	傷 腫 皮 膚
77	芎藭	川芎, (藤蕪)	○					●				●		●	●	●
78	白芷	白芷	○					○		●				●		○
79	芍藥, (同屬·牡丹皮■)		● ○	●		● ○	● ○		●			●	■			
80	辛夷		● ○		○		●	● ○		●		●				○
81	防風		●		○			● ○		●		●		○	● ○	○
82	地黃		● ○	○			● ○	●				●		○	●	
83	大黃	黃良	●	● ○	○		● ○					●		○		●
84	藜蘆	(遼藜蘆)	● ○	●									●			● ○
85	蛇衞	蛇含 (委陵菜)		● ○					○			●		● ○		●
86	馬蘭			○	○		○		○							○
87	蠱實	荔實, 馬蘭子	●	● ○	○			●				●			●	● ○
88	酸漿	酸漿草《唐本草》										■				■
89	甘草	國老, 蜜甘, 蜜草	● ○		○		○	○	●			●			●	●
90	麻黃	龍沙	● ○		○		●	● ○				●		○		
91	黃芩	腐腸		● ○	○	●					●	●		○	○	●
92	山茱萸		● ○	○	○	○		●	●	○		○	○			○
93	遠志		● ○		●			● ○	●	●				○		
94	黃蓮		○	● ○		○		● ○		●			●		○	
95	苦參	(同屬·槐)	● ○	● ○		● ○		○		●	●			○		● ○
96	藕(根)	藕實, 蓮	●				○	● ○				● ○				○
97	藍	蓼藍, (大青)	● ○						● ○			■		●		

表2. 效用別—5/5:

番	【原文】名	品目名 本草經, 名醫別錄○ 本草名	全身 状態	消化 器系	呼吸 器系	泌尿 器系	循環 器系	精神 神經	憑物 煩邪	明目 感覺	糖尿 黃疸	流行 熱病	男女 性別	小 兒	筋骨 關節	傷腫 皮膚
98	貝母		○	○	●	○		○	●			○	●		○	●
99	白薇	白薇 (□陶)	●			○			●	●		●	●	●		● □
100	茵陳蒿		● ○			○		○	●		●	● ○				

[考察]

以上, I. は「個別詳細検討」, II. は「效用への振り当て」の観点でそれぞれ纏めたものである。

改めて全體を通観し, 以下①~③・ポイント3点を設定し, 総合的に考察する:

- ① 《神農本草經集註》構成要素の雙壁・《本草經》文と《名醫別錄》文の對比を, 如何に理解するか。
- ② 成立年代の差が少ない他の醫藥關係古典・《五十二病方》等との関連で, 何が判るか。
- ③ 中國古代思想概念で, 各種自然物にも充てられて來た「五行」と, どのように関連しているか。

① 《本草經》文では, 先ず代表的な品目名を掲げ, 本文の冒頭に必ず〔釋名〕項目・即ち諸別名列擧とそれら各々の典據と解説がある。續いてその物についての基本的事柄・「味」, 「寒溫の別」, 「毒の有無」等を記し, 後は〔主治〕が續く。〔主治〕はやはり基本的な用途效能を定型的な表現で綴っている。言い換えれば《本草經》文はアカデミック傾向・或いは學究的であるのに對し, 《別錄》文は, 別名を添えることはあっても, 定型的に説き起こすのではなく, 實際的な用途效能や, 産地など, 具體的な必要事項を添えて述べている。明らかに, 《本草經》文が骨組みを形成し, 《別錄》文は肉付けしているのである。現代風に例えてみれば, 《本草經》文は典型的な「テキスト」で, 《別錄》文は行き届いた「解説文」である。兩者相まち, 《神農本草經集註》は高度に充實した本草書となっている。《別錄》文の中で殊に價值が高いのは産地, 及びそれに關連しての收穫時期の記載である。そうした記載は當該品目が實際にどのような自然物であるか・正確に同定する

際に大いに役立ち、更に、以前の拙論（文献2-4）で提唱したように、数ある品目の産地分布を総合的に検討してゆけば、《本草經》文や《別錄》文よりも更に遡った極く早期の“原本草體系”が推察出来る。「本草學」の総合的な歴史としても、品目収録記載の具體的實體に即して詳細に観てゆけば、《神農本草經集註》はこの後、唐代《新修本草》を経て、宋代の《證類本草》へと受け継がれ、更に中國でのその後の展開のみならず、朝鮮、日本、東南アジア等々、極めて廣域に亙る東アジア本草體系の核となった實體であることが明らかである。この本草體系の巨大な流れは、出發點である《神農本草經集註》自體の内容充實、及び完成度の高さにより、後々への大展開が可能となったと言える。

② 今回、題材の有用自然物多數は悉く本草書で観ることが出来たが、そのことは「古代にはあらゆるものを薬として使った」ことの裏返しである。本草書は本來、藥物學的博物書であり、自然物を個別に列擧し詳論しているが、書の構成としては、異種類の自然物複數を組み合わせて疾病治療に供する・即ち「處方」を示す目的も明らかである。一方、東アジアでは古い時代から、疾病を個別に列擧し、各々を療す藥物の組み合わせを數々示す・文字通りの「處方集」の類も編集されていた。ただ從來は本草書や後世の類書等に分散吸収された斷片で観ていたのが、比較的近年、かなり缺損してはいるが原本的に纏められたままのものが幾つも發掘されて、存在が明確化して來た。1970年代前半に中國湖南省長沙市郊外の漢墓から出土した帛書・いわゆる《五十二病方》部分はその典型例である。示されている處方はやはり多種類の自然物を驅使して成り立っている。先年、京大大學人文科學研究所・東部科學技術史共同研究班で《五十二病方》及びやや先驅けて出土した同様範疇・《武威漢代醫簡》等の新出土醫藥資料が次々と検討された経緯があり（その際の譯註・文献1-14、論文集・文献2-7）、この共同研究に参加し、論述した分の題材自然物は、種類が今回のそれらと全て重なっており、全ての記載を今回と全く同様に本草書と照合して考究した。

③ i. 五行及び他の特定數との相關性：テキスト《五行大義》卷二、第六の記述を模式化すると：

	立春	仲春	立夏	仲夏	立秋	仲秋	立冬	仲冬
王：	木		火		金		水	
	↑↓		↑↓		↑↓		↑↓	
	甲乙		丙丁		庚辛		壬癸	
	(金)		(水)		(火)		(土)	
		榆莢		桑椹		棗		草木
		↓		↓		↓		↓
		白		黒		朱		黄

これは、四季それぞれの最中に、特定植物が固有の色彩を顯すとしていて、
 榆莢・白←金、桑椹・黒←水、棗・朱←火、草木・黄←土
 と、四色の背後に、その各々に合う基本要素四種を配しているところに、巧みな工夫が觀
 られ、更に上記・空間配列の右下「仲冬 草木→黄」から左上「立春 木→金」へ視線が
 戻れば、おのずと自然の循環に従うことになり、何の違和感も無い。

ii. また自然の要素及び自然物との單なる對比は下のようによにまとめられる（文献I-13. p. 274より）：

五行	木	火	土	金	水
方角	東	南	中央	西	北
季節	春	夏	季夏	秋	冬
五味	酸	苦	甘	辛	鹹
五味	醢	酒	蜜	薑	鹽
五穀	麻	麥	米	黍	大豆
五果	李	杏	棗	桃	栗
五菜	韭	薤	葵	葱	藿
五畜	犬	羊	牛	鷄	彘
五石	曾青	雄黄	玉	金	赤石脂
五草	五味子	天門冬	茯苓	桂心	玄參
五蟲	伊威	蚺蛇	蜚零	蛭網	蜥蜴

補. 「五味」が二通りあるが、一方は「五覺」と解釋する。

iii. 五行の序列・「木火土金水」は管子の《四時篇》に始まると、島邦男氏は解説している（文献3-5）。

當文献には方位、日、等・基本要素への配當表が示されている（p. 41）ので、節略して下に引用する：

方位	東	南	中央	西	北
其時	春	夏	土德實輔四時入出	秋	冬
其氣	風	陽	以風雨節，土益力	陰	寒
日	星	日	土	辰	月
五行	木	火	土	金	水

文獻

〔古典・原典，復元本，復刻本，集成本，譯本，一般論文集〕一辭書，事典，年表類は省略。一

- 1-1 唐慎微著 艾晟增訂《經史證類大觀本草》1108年
 - 1-2 唐慎微著 張存惠（晦明軒）重刊《重修政和經史證類備用本草》1116年
 - 1-3 陶弘景校註 小島尙眞，森 立之他重輯 岡西爲人訂補改題《本草經集註》1972年 南大阪印刷センター刊
 - 1-4 馬王堆漢墓帛書整理小組編「馬王堆漢墓出土醫書 釋文(二)」・『文物』1975年 第9期 所收
 - 1-5 馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓出土帛書 五十二病方』1979年 北京 文物出版社刊
 - 1-6 蘇敬，他撰 岡西爲人編《重輯新修本草》1972 再刊 學術圖書出版會刊
 - 1-7 隋 楊上善撰註《黃帝內經太素》京都 仁和寺本 1924年 蘭陵堂影印
 - 1-8 李時珍著《本草綱目》初版・金陵本 1596年（內閣文庫所藏）
 - 1-9 李時珍著《本草綱目》第二版・江西本 1603年（京都府立植物園所藏）
 - 1-10 李時珍著 鈴木眞海譯 木村康一監修『新註校定 國譯本草綱目』昭和8及び同52年 東京 春陽堂刊
 - 1-11 陳景沂著《全芳備祖 前編，后編》（日藏影印本）1980年 北京 農業出版社
 - 1-12 自然科學史研究所 主辦《中國科學技術典籍通彙》（生物，醫藥，農學）1993年～河南教育出版社刊
 - 1-13 中村璋八著『五行大義 上，下』2冊 平成10年1月～5月 明治書院刊
 - 1-14 山田慶兒編『新發現中國科學史資料の研究 譯註篇』昭和60（1985）年 京都大學人文科學研究所刊
 - 1-15 藪内 清編『中國中世科學技術史』昭和38（1963）年 京都大學人文科學研究所刊
 - 1-16 藪内 清編『宋元時代の科學技術史』昭和42（1967）年 京都大學人文科學研究所刊
- 〔關連自著論文，翻譯〕
- 2-1 『歷史上及び現在の活性天然物に関する化學的研究』2004年 廣島大學醫學部総合藥學研究科刊
 - 2-2 「中國園林植物小見」・田中 淡編『中國技術史の研究』1998年 京都大學人文科學研究所刊 所收
 - 2-3 「東アジア有用植物考一地域及び民族とのかかわりについて」・山田慶兒編『中國古代科學史論』1989年 京都大學人文科學研究所刊所收
 - 2-4 「中國古代の有用自然物—その産地分布と原本草體系の推察」・山田慶兒編『新發現 中國科學史資料の研究 論考編』昭和60（1985）年 京都大學人文科學研究所刊所收
 - 2-5 「中國の本草學と本草學者」・吉田 忠編『東アジアの科學』昭和57（1982）年 勁草書房刊 所收
 - 2-6 「古代正史に見える生物と生物觀」・吉田光邦編『東洋の科學と技術』昭和57（1982）年 勁草書房刊所收
 - 2-7 「新出土醫藥資料における自然品目の研究」・『東方學報』第五十三冊 京都 1981年所收
 - 2-8 「展望—中國本草史」・日本科學史學會編『科學史研究』第Ⅱ期第17卷 1978年所收
 - 2-9 「歷代總合本草書における植物新入品目の考察」・山田慶兒編『中國の科學と科學者』昭和53（1978）年 京都大學人文科學研究所刊所收
 - 2-10 「本草綱目の植物記載—李時珍の形態・色の表現について」・藪内 清，吉田光邦編『明清時代の科學技術史』昭和55（1970）年 京都大學人文科學研究所刊所收
 - 2-11 『植物圖譜の歴史』（翻譯）1986年 八坂書房刊（原著 Wilfrid Blunt “The Art of Botanical Illustration” 1951）

〔自然科学，科學史，自然思想史〕

- 3-1 『中國高等植物圖鑑 第一冊～第五冊』1971年～1994年 北京 科學出版社刊
- 3-2 『同上 補編 第一冊～第二冊』1982年～1994年 北京 科學出版社刊
- 3-3 陳燦著『中國樹木分類學』1937年 北京 中華農學會刊
- 3-4 中國古代農業科技編輯組『中國古代農業科技』1980年 第1版 北京 農業出版社刊
- 3-5 島 邦男著『五行思想と禮記月令の研究』1971年 汲古書院刊
- 3-6 平田 寛著『科學の起源—古代文明の一側面』1974年 岩波書店刊
- 3-7 伊東俊太郎著『文明における科學』1976年 勁草書房刊
- 3-8 北村四郎著『有用植物學』昭和27年初版 東京 朝倉書店刊
- 3-9 北村四郎，村田源他共著『原色日本植物圖鑑』（草本編上，中，下）昭和32～39年 大阪保育社刊
- 3-10 北村四郎，村田 源共著『原色日本植物圖鑑』（木本編・I，II）昭和46～54年 大阪保育社刊
- 3-11 大井次三郎著『日本植物誌 顯花植物篇』第四版 昭和36年5月 東京 至文堂刊

〔本草，醫藥，化學〕

- 4-1 中國醫學院葯物研究所等編『中葯志』（第一冊～第五冊）1979～1994年 北京 人民衛生出版社刊
- 4-2 奇玲，羅達尙主編『中國少數民族傳統醫葯大系』2000年 內蒙古科學技術出版社刊
- 4-3 岡西爲人著『中國醫書本草考』昭和49年 大阪 南大阪印刷センター發行
- 4-4 岡西爲人著『本草概說』昭和52年 大阪 創元社刊
- 4-5 山崎幹夫，齊藤和季編集 正山征洋他執筆『葯用資源學』平成12年 第3刷 東京 丸善刊
- 4-6 指田 豊，山崎和男編集 田中 治他執筆『生葯學 改訂第5版』1999年 東京 南江堂刊
- 4-7 田中 治他編集 田中 治他執筆『天然物化學 改訂第5版』1998年 東京 南江堂刊
- 4-8 村上隆夫著『天然物の構造と化學—展望と研究序說』昭和57年 東京 廣川書店刊
- 4-9 友田正司著『植物藥品化學』第2版 昭和50年 東京 廣川書店刊

〔食物，香料〕

- 5-1 篠田 統著『中國食物史の研究』昭和53年9月 八坂書房刊
- 5-2 篠田 統著『中國食物史』昭和49年6月初版 柴田書店刊
- 5-3 山田憲太郎著『東亞香料史研究』1976年 中央公論美術出版社刊

A Study on the Natural Products

Ken-ichi MORIMURA

Author has been studying the history of 本草學 BenCaoXue (Pharmacognocny in East). On this time, the medicinal property of materials was thoroughly interpreted with two points of View. One was the decipherment of descriptions on original text; the other was the collection of modern pharmacological information. The original texts with which the old descriptions were examined are mainly 《神農本草經集注 Shen Nong Ben Cao Jing Ji Zhu》 in A. D. 5 and 《新修本草 Xin Xiu Ben Cao》 in A. D. 7. The letters from which picked up the names of materials are 《五行大義 Wu Xing Da Yi》, 《黃帝內經太素 Huang Di Nei Jing Tai Su》 and 《醫心方 Yi Xin Fang》.

The data gained from both sides above mentioned have filled up in each domain, but reciprocal verifications have not been done sufficiently until now, accordingly, the principle in the investigations of this paper was the minute comparison and verification between above two data. This time about 130 species of materials were adopted, many of which belong to the plant, but specific animals and minerals were also examined in scores respectively. Those materials have been very popular crud drags in the history of Asia and Orient. At that time, those materials had been connected each other with a thinking-model (五行 Wu Xing), for example:

五行 (Origin);	木 Wood	火 Fire	土 Earth	金 Metal	水 Water
五穀 (Cereals);	麻 Hemp	粟 Millet	麥 Barley	米 Rice	大豆 Soybean
五果 (Fruits);	李 Plum	杏 apricot	棗 Jujube	桃 Peach	栗 Chestnut
五畜 (Domestics);	犬 Dog	羊 Sheep	牛 Cattle	鷄 Chicken	彘 Pig
五石 (Minerals);	曾青 Malachite	雄黃 Orpiment	玉 Jewel	金 Gold	赤石脂 Kaolin.

- ① Habitats i. Plant-articles abound in 華中 HuaZhong (The Yangtze valley), 華北 HuaBei (The reaches of the Yellow River). A lot of the plants had been imported from South (India ~ Indo-china) and West (Central-Asia ~ Arabia ~ Africa).
ii. Animal-articles inhabit in 華中 and 華南 (HuaNan · The south-east of China).

iii. Mineral-articles yielded in the area 華北, 華中～ The west-China.

- ② Efficacies i. General-feature · Exceedingly abundant technical-terms had been used on diseases and symptoms. This time exhaustive arrangement on them were carried out, all the Articles were classified into 14 categories according to their proper efficacy. Categories were decided on the human body system, for example: 消化器系 The digestive system, 呼吸器系 The respiratory system, and so on. The results of the classification were made up into Table 2 (5 sheets).

The Tōhō Gakuhō Journal of Oriental Studies (Kyoto) No. 84 (2009) 302 ~ 281

The Introduction of the Chinese Calendrical System in Chosŏn and Its Philosophical Background

Yong Hoon JUN

This paper describes the bilateral characteristics of annual calendars 曆書 in Chosŏn 朝鮮 (1392-1896). The Sino-Korean relationship in the Chosŏn period has been often called “the investiture system” 冊封體系, under which Chosŏn was impelled to accept the Chinese calendar as one of actions by which to receive the investiture. On the other hand, Chosŏn tried to construct and issue its own annual calendar because doing so was a symbolic practice of Confucian ideology, “observing sky and granting season” 觀象授時 to the people.

Until the adoption of the Shixianli 時憲曆 system, Chosŏn issued its annual calendar according to the Chiljongsan 七政算 system, which was developed in Chosŏn in the fifteenth century by assembling the Chinese calendrical systems of Shoushili 授時曆 and Datongli 大統曆. Under the investiture relationship with Ming China, Chosŏn was also compelled to accept the annual calendar from Ming China, which claimed suzerainty over Chosŏn.

When Chosŏn submitted to Qing China in 1637, the suzerain state was changed from Ming to Qing, and Chosŏn was required to accept the Qing’s calendar instead of Ming’s one. Qing’s adoption of the Shixianli system in 1645 resulted in Chosŏn’s introducing that system in calculating domestic calendars beginning in 1654. Chosŏn